

日本太古史

卷上





有類。言曰。鳩有三枝之禮。鴉  
 呼禽獸尚且知報本及始之大  
 義矣。方今雖學術日進。工藝月  
 盛。至于報本及始之大義。則蓋

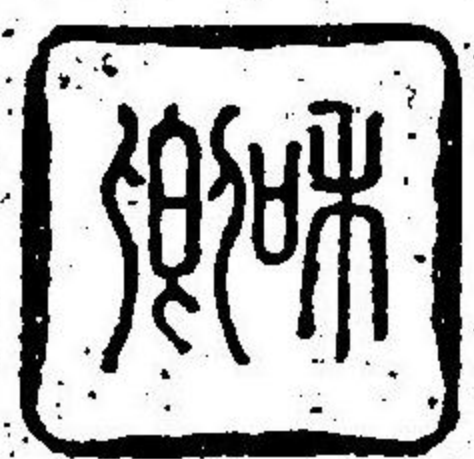
明治  
 26 12 11  
 内交



闕如焉。豈可堪慨嘆哉。於是余欲詳神代之事蹟。明祖宗之遺德。使我四千餘萬之同胞。知所本焉。乃徵之內外歷史地理神話言語風俗人種古跡遺物。且較東西宗教之異同。以為一書。

名曰日本太古史。後學少年。由是而學焉。則庶乎其不差矣。明治三十六年十月上澣

石川利之撰





日本太古史目錄

上篇

記紀神代卷大意

別神五柱

天神七代

地神五代

中篇

東西宗教の比較

神道は正直勲業尙武を以て教とあす

神道と他教

神道は一視同仁

神道の大本と儒老佛瑣耶回の大本

正直の解釋

正直の範圍

三種の神器

目次



智仁勇

敬神

葬祭

尙武

美育

自國と他國

農工商と漁獵

績織と裁縫

醫藥と禁厭と湯治

己の欲する所を人よ施す

分を守る

一家和樂

君臣の道

父子の道

夫婦の道

兄弟の道

朋友の道

自主

立志

忍耐

知足

教化

教と政

教は心に在り

大國主尊の三徳

惠比須講

女を重んず

改過と懺悔

因果應報

名家の信仰

目次



記紀と他教の經典

宗教の必要

下篇

教育勅語の正解

祖宗の遺訓は神道に據り儒佛の未だ入らざる前にも忠孝節義と博愛公益の道あるよとを明かにす

評論諸家姓名

藤原鎌足	大織冠内大臣
菅原道真	贈正一位、太政大臣
僧 空海	弘法大師
源 頼朝	正二位、右大將
僧 日蓮	
北畠親房	准后
一條兼良	從一位、太政大臣
徳川家康	征夷大將軍
清原宣賢	正四位、少納言、侍從
小野 通	
林 道春	號羅山、刑部卿
新井君美	號白石、從五位、筑後守
熊澤伯繼	字了介、號菴山
山崎 嘉	號垂加、又關齋

目次



賴 襄

號山陽、贈正四位

伊勢貞丈

吉見幸和

德川齋昭

號景山、贈正一位

藤田 彪

號東湖、贈正四位

會澤 安

贈正四位

帆足萬里

加賀見光章

鈴木真年

野々口隆正

大久保利通

正三位、參議、內務卿

成島 弘

號柳北、朝野新聞社長

勝 安芳

伯爵、正二位、樞密院顧問官

中村正直

文學博士、正四位、元老院議員

川田 剛

文學博士、從三位、宮中顧問官

井上 毅

正四位、文部大臣

外山正一

正三位、文部大臣

大隈重信

伯爵、正二位

副島種臣

伯爵、正二位、樞密院顧問官

福澤諭吉

慶應義塾主

元田永孚

從三從、一等侍講

栗田 寬

文學博士、帝國大學教授

西村茂樹

文學博士、正三位、弘道會長

重野安釋

文學博士、正四位

三島 毅

文學博士、東宮侍講

細川潤次郎

男爵、從三位、華族女學校長

谷 干城

子爵、從二位、陸軍中將

大島圭介

男爵、正三位

高島嘉右衛門

號吞象、從五從

渡邊國武

子爵、從二從

目次



土方久元

子爵、從二位

東久世通禧

伯爵、樞密院副議長

芳川顯正

子爵、正二位

岩下方平

子爵、從三位

福羽美靜

子爵、正三位

千家尊福

男爵、正三位、東京府知事

井上哲次郎

文學博士、帝國大學教授

元良勇次郎

文學博士、帝國大學教授

和田垣謙三

法學博士、帝國大學教授

田口卯吉

法學博士

島田三郎

每日新聞社長

久米邦武

前帝國大學教授

南摩綱紀

從四位、高等師範學校教授

木村正辭

文學博士、學士會院會員

伊藤圭介

理學博士、帝國大學教授

澤柳政太郎

文學士

石黑忠憲

男爵、從三位、陸軍少醫總監

田中芳男

從三位

津田真道

法學博士、男爵、正三位

富田鐵之助

正四位

楠本正隆

男爵、正三位

前田正名

正四位、五二會々長

長岡護美

子爵、正三位

黑田長成

侯爵、貴族院副議長

北島道龍

原坦山

帝國大學講師

釋雲照

十善會戒師

村上專精

文學博士

井上圓了

文學博士

前田慧雲

文學博士、帝國大學講師

目次



島地 獸雷  
 新島 襄 同志社長  
 小崎 弘道 同志社大學校長  
 岡本 監輔 從五位  
 加藤 高文 從四位、東宮侍講  
 本居 豐穎 陸軍教授  
 內藤 耻叟 文學博士、帝國大學教授  
 星野 恒 文學博士、帝國大學教授  
 小中村 清矩 文學博士、帝國大學教授  
 黒川 眞頼 文學博士、帝國大學教授  
 有賀 長雄 文學博士  
 穂積 八束 法學博士  
 姊崎 正治 文學博士  
 高楠 順次郎 文學博士  
 坪井 正五郎 理學博士、帝國大學教授

小金井 良精 醫學博士、帝國大學教授  
 藏原 惟郭 米國哲學博士  
 三宅 雄次郎 文學博士  
 松本 愛重 文學博士  
 辰巳 小二郎 文學士  
 宮部 殿夫 掌典  
 田中 頼庸 第一高等學校教諭  
 増田 于信 學習院教授  
 湯本 武比古 文學士  
 鈴木 敏雄 文學士  
 八木 辨三郎  
 飯田 武郷  
 森 三溪  
 槐 陰迂叟 姓名未詳(史海抄錄)  
 石川 義形 字伯方

目次



- 沈 文 燧 清國人、正五品、陝西省候補、直隸州知州
- ス タ イ ン 澳國人、法學大博士
- ル プ オ ン 佛國人、法學博士、帝國大學教師
- ニ コ ラ イ 魯國人、主教、在東京駿河臺
- レ オ ン ド ロ ニ 佛國人
- フ エ ノ ロ サ 米國人、帝國大學教師
- サ ト 一 英國人、特命全權公使
- チ ャ ム パ ー レ ン 英國人、帝國大學教師
- ジ エ ー ム ス、レ ッ グ 英國人、漢學者
- ロ ベ ル ト、フ アル ケ 獨國人、普國軍隊附布教使

# 日本太古史

石川利之著

上篇

記紀神代卷大意

別神五柱

天地初發の時高天原に成坐せる神の名は

熊澤伯繼曰く古事記に成ませる又は生みなせるの語は意味廣くして人を使ふにも國を治むるにも物を造るにも此語を用ひたる所あり

飯田武郷曰く天御中主尊、高産靈尊、神産靈尊は記紀ともに成坐とあれども此神等は天地を造玉ひし神あれば天地混成の時に當りて始めて生出玉ひし神には坐さず

岡本監輔曰く高天原は太虛清淨の名なり天に在ては太虛地に在ては皇居人に在ては心性而して唯太虛を本義と爲す即ち所謂天なり天は太虛に外ならず其高と曰ひ原と曰ふは皆上に在るの義にして本尊稱に係る其實は宇宙を謂ふを



り皇居は之を尊稱し以て天に擬する耳  
利之曰く天地初發とは初めて發ける、即ち未成の意にして初めて發けたる即ち  
既成の意にあらず又高天原に就きては二説あり一は上古天にあらず地にあらず  
人知を以て測るべからざる最玄最妙の所を謂ひ一は伊弉諾伊弉册二尊及び  
天照太神の都とせる大和邊を最玄最妙の所に擬して高天原と稱すと茲に記す  
る所の高天原は即ち最玄最妙の所を指したるものなり

### 天御中主尊

勝安芳曰く近頃天御中主尊と西洋の「ゴット」と同一で有るとか同一で無いとか  
云ふ論があるが天御中主尊と高産靈神産靈とは造化の神とあり造化の神は國  
毎に別々にあるものにあらず

千家尊福曰く造化の神靈は其源一にして宇宙に瀰淪す故に天地位し萬物育し  
四時來往して以て生々化々窮きは一も造化の神徳にあらざるはあし是一本  
散じて萬株となり萬株又一本に歸する所以あり是れ則惟神大道の教源なり  
副島種臣曰く天御中主尊は實に天地元始の主宰にして人類の始祖なり  
又曰く我日本人民萬姓の祖先を究むれば即ち天神に出づ忠孝二致なし親に孝

あるものは君に忠なる所以あり君に忠たる者は天神天祖を敬する所以なり苟  
も天祖の靈旨に悖らざらんことを勤むる者にして豈不忠の臣あらんや苟も皇上  
の聖旨に協はんとを期する者にして親に孝ならざる者あらんや萬世一貫其祖  
先を敬する者は則徳義の本源あり故に我國の歴史を講ずる者は先天地開闢の  
始に遡り國家成立の靈妙なる淵源を窺ひ以て列聖の遺範を拜するを得は則我  
道義の由來する所了然たるへし

元田永孚曰く純誠の靈魂を大極と云ひ孔子の所謂易に有大極生兩儀と是なり  
本朝にては之を稱して天御中主尊と云ふ此一箇純誠の靈魂動て乾にして元亨  
利貞となり天地之を以て始めて剖判す

高島嘉右衛門曰く我國に在ては之を天御中主尊と曰ひ儒に大極と曰ひ佛に法  
身如來と曰ひ耶蘇に「ゴット」と曰ひ各稱各異ありと雖も造化の大神を表示する  
意は同じきなり其大神は萬物の寓する靈魂の分母にして萬物の靈魂は之が分  
子を受けたるものあり神道儒道佛道既に同じく神より出るの道あるが故に  
國に於ては固有の神道を輔翼せしめんが爲めに儒佛の兩道を容れ共に相並ひ  
て人民を教化せしむ方今に在ては耶蘇教も同じく神より出るの道なれば聯合



して人心を善に導くべきなり

北島道龍曰く夫れ神は乾坤の大造主にして佛之を如來藏と言ふなり人共同異を知るや否や

島地黙雷曰く儒は大極兩儀を生すと云ふを常談とし佛は真如の妙徳生滅の作用を發すと云ふを通説とせり所謂大極と真如とは同體一理にして兩儀と生滅とは亦自から一義同法である凡そ一切萬物は平等差別の二法を以て成立するものにて皆其體を一にして其相を二にするものなり

新島襄曰く天御中至尊は萬物造化の神なりと云はゞ即ち天帝なり神道と基督

教と大に似たる所あり

四村茂樹曰く平田篤胤氏の説は暗に西洋耶穌教の説を  
取りし其跡も見ゆれども確證を得ざるを以て明言せず

中村正直曰く日本は神國と稱する程なれば神明を尊嚴すると古よりの習なり神學者の説妄想より出る者多かるべけれども余は一概に妄想説と片付るを欲せず何とあれば人の上に神あるを知て之を敬するは人心に具する眞理の發見する者なり眞理を知るに至らざるも之を知るを得べき統系を得たる者と云ふべし即ち吾が上に所謂妄想の中に眞理を含める者あり貴重なる元素と爲して論すべきなり支那古來聖賢の説にあれ耶穌の教法にあれ西洋哲學者の説にあ

れ其中は所謂上帝、天道、天則、神明、眞神、天主、造物主、神道、天命等の字を妄想的と爲して除き去り人爲の道德學を造らしめば如何、人生を福祉に導くとの好結果を得るや否、余は思ふに其人爲の道德學は淡泊冷寂にして香の抜けたる香水、味の抜けたる食物の如くあるを信ず

又曰く造物主を英語にては「クリエーター」と曰ふ創造者と曰ふ義である萬物を「クリエーター」と云ふ受造者の義である又「ゴット」眞神と譯し天主とも譯す然れども余は此處で一つの言はねばならぬとがある「バイブル」の創世紀を讀めば眞神の天地萬物人類を六日に造ると謂ふ此六日は二十四時一晝夜のとでなく六劫時の間に造ると曰ふとなれど其文句を讀めば神が形を現す様に見へ其人を造るには人形師が人形を造る様に見ゆ吾が所謂造物主でも眞神でも決して斯様な造り様で人物を造たものでない星宿日月地球人物等万有をして自然に成生し自然に陶汰し自然に修繕せしめ宇宙の大機關を運轉し古今世界盛衰禍福命運を統攝し萬全の由て出る所の者、眞理の由て出づる所の者、知らざる所無く能はざる所無き者を造物主と曰ふ

又曰く羅馬の昔時ゼネカと云へる有名ある理學者あり其言に曰く人其友より



少々の品物田地或は錢財を受納する時は必ず感謝の心を生ずるであらふ然るに我に吾が生命吾が健康吾が心智を付與する此大仁惠の主造物主に向て何故に感謝の心を生せぬかと孔子の所謂天も此造物主に歸すべきものあり獲罪於天無所禱と曰へるは人を支配するものを天と曰へば造物主に當る西村茂樹曰く元氣は自然に成り自然に動く者か或は之を造り之を動かす者あるか人類の眼より見れば自然の如くなれども其自然を爲す者あかるべからず其自然を爲す者は何ぞ是即ち神明あり上帝なり神明は至貴至尊至靈至妙至大至微至正至公全智全能の物の如くなれども我等の五識は直接に神明に觸るゝと能はざれば其詳細を言ふと能はず惟我靈性は天地に通貫するを以て明かに神明の存在を知るとを得べし神明に多くの名あり主宰の意味より之を上帝と言ひ包涵遍覆の意味より之を天と言ひ其古今に亘りて變化なきより之を天則と言ひ其至正至公にして誤謬なきより之を天道と言ふ其實は皆一なり我等人類此天道の下に在りて生死禍福吉凶榮辱皆之か管理を受け此天道の外に逸出せんとするも決して能はざる所あり况や此天道は善に福し惡に禍するの形迹あるに於てをや凡る人類か最も尊ぶべく最も敬すべく最も畏るべきは此天道に

及ぶ者あかるべし故に天道は万理万物の根原にして又道德の根原なり古語に所謂道の本原出於天と云ふ是あり古の聖賢が深く天道を敬畏する者は固より本心の誠より出る者なれども其他又別に深意の存する者あるとを察すべし但其上帝が人に對して言語を發し奇怪なる神迹を現はし一家一人を偏愛するとの如きは吾儕良知の信する能はざる所なれば斷然之を排棄せざるを得ざるあり

井上圓了曰く神とは種々の解釋あるも要するに宇宙の本源万有の本體にして無限の生存絶對の性質を具有する躰ならざるはあし之を耶蘇教にては造物主と云ひ佛教にては眞如と云ふ唯耶佛兩教の異なる所は其躰と世界との關係を説明する點にあり耶蘇教は造物主ありて世界万有を創造せり故に世界開端の原始ありと説き佛教は眞如の自轉開發して世界万有を現出せり故に世界は無始にして其躰即ち眞如なりと説く此神に對して我人の盡すべき徳義は古來一般に敬信にありとす是れ重に耶蘇教中に擧ぐる所の名稱あるも之を局外より考ふるに天地萬物に對して我人盡くすべき徳義ありとするときは其本源實躰たる神に對して盡くす所の徳義あるべきは勿論あり而して之に對して敬信を



盡くさんと欲せば宜く其現象たる目前の事物に向て盡くすべし神は形象を有せざるものなれば唯我人の心中に其存在を想定するのみ而して目前の一事一物皆其造出或は開發に出でたるものあれば此事物の上に神の實在を想出し天地萬物は皆神の子孫若くは一部分なるを思ひ之を大切に守るは即ち神に對するの徳義と謂ふべし又我身も神の子孫若くは一分子あれば之を愛重するも敬神の一なりと知るべし然り而して之を我國の忠君を以て徳義の根本とする國風の上に考ふるときは神の理想を君主の上に適用し來りて我人の君主に對して忠順を盡すは即ち神に對して敬信を盡くすものと想定して我人の君主を視ると神を視るが如くし敬神と忠君と其敬一ある國風を養成し神に對しては忠君を思ひ君に對しては敬神を思ひ以て天皇の神聖を護り皇室の尊嚴を保つべし是れ亦臣民の皇室に對する義務の一なりとするも豈不可ならんや

井上哲次郎曰く我神道の如きは西洋人の近來切ら知らんと欲して未だ知らざる所なり佛國のレオンドロニー日本紀の神代卷を譯し英國のチャムパーレン古事記を譯すも雖も餘り神名多くして未だ其傳指するに未だ其外境國のプヒキツマイル中臣の祓祠を譯し英國のサトー「純粹神道の恢復」と題する文を

著せるも是れ亦廣く學者の注意する所とならざるなり此の如き現今の狀態なるが故に我邦人は決して佛教、儒教、道教并に神道の研究を怠るべからざるなり歐米の宣教師が動もすれば世界中に於て唯々耶穌教のみを眞正の宗教なりと説く然れども彼れ嘗て和漢の宗教を研究せしとなく初めより唯々己の信する所の宗教のみを以て精確無二の宗教と爲し強ひて我邦の無智矇昧ある者を引入れんとす妄爲も亦甚だしと謂ふべし

有賀長雄曰く日本は天神の造り給へる國にして天神今尙は此國を冥護し給へり故に此國に生息する者は皆天神を祭るの義務あり而して天皇は天神の後裔として此祭を主宰し玉ふの權ありと是れ日本古來の理論あり此理論の正否如何に拘はらず天皇に於て之を保持し玉ふ上は日本國中に於て敢て其可否を論ずる權ある者なし

藏原惟廓曰く印度最古即ち吠陀時代の宗教は自然の現象を神と崇め其最も勢力ある神をアグニ（火の神）インドラ（空氣の神）スルヤ（太陽の神）之を三種の神と云ふ猶我が古事記に於ける天御中主神、高産靈神、神産靈神の如し印度吠陀教の詩人は火は天地萬物に普遍ある一元素にして太陽も火の動きたるものに過ぎ



す水も火の作用あり日月星辰は火の顯現なり草木禽蟲は火の方に依りて發生  
成育し人間の生命も天地萬物の生命も亦火の勢力の外ならずとし火を以て全  
智全能ある天地萬物の主宰者なり創造者なりと思惟したるあり吠陀一篇數千  
百の詩歌祈禱は畢竟此アグニと呼べる火の神を讚頌し祭祀せるものに過ぎ  
ず故に余はインドラもスルヤも共に是れ一個の元素たるアグニ神の變躰化  
身たるに過ぎずと思惟するあり吠陀の聖歌中に萬神は三神の各所に存在する  
現像なり彼の神性を異名せるものあり其實惟一神の外に神あらざるなり又  
吾人をして數千年後の今日に於て驚嘆措く能はざらしむるは印度詩人が火を  
以て天地萬物の作用本源と爲したるは希臘の哲學者パミニデスとホラクリデ  
スが火を以て萬物の本とあせるに符合し又近世理學者が「越歴力」を以て天地  
萬物を説明するは印度詩人が火及び電光を以て天地の根原と思惟せるに似た  
ればあり

スタイン曰く日本の天御中主尊と西洋の「ゴット」とは同物異名にして造化天神  
たることを信ず東西其名稱異なれども其實同じきと例へば仰ぎ見る所の太陽は  
各國其名を異にすれども其實同じきと一般あり

レオンドロニー曰く日本の神道は唯一教あり何となれば數多の神ありと雖も  
天御中主神を主とせるを以て結極唯一教あり

利之曰く我國上古凡て上に在あるものを「カミ」と稱し漢字の渡來するに及び神  
の字を用ひたるゆゑ多神教の如く解釋する者あるも天御中主尊を百神の上に  
置き儒道の所謂上帝又は大極、佛教の所謂眞如又は彌陀、耶穌の所謂ゴット、回  
教の所謂アラナリ儒道も上帝を鬼神の上に置き郊社に於て天地山川を祭る  
も天地山川其者を祭るに非ず上帝の靈が天地山川に充滿しあるゆゑ之を祭る  
ものなりに故に孔子は郊社の禮は上帝に事ふる所以あり宗廟の祭は其祖先を  
祀る所以ありと云ひ又易に大極兩儀を生ずとあるは大極は無限を意味し兩儀は  
即ち二氣なり二氣は即ち陰陽あり故に具原益軒は物として陰陽あらざるはな  
し一氣の流行、長進、温熱、生長、春夏、晝、男、明、生、剛等を陽と爲し一氣の収斂、消退、涼寒  
收藏、秋冬、夜、女、暗、死、柔等を陰と爲すと云へり大極の兩儀に於けるは天御中主尊  
の高産靈、神産靈に於けるが如し佛教に於ても彌陀を諸佛中の主とあし無量壽  
經に十方世界の諸佛如來皆共に無量壽佛(阿彌陀)の威神功徳の不可思議を讚嘆  
すどあり博士中村正直の説に世に三尊と稱す彌陀は天御中主尊の如く勢至は



高産靈の如く観音は神産靈の如しと然らば勢至は即ち陽にして剛、動威嚴を意味し、観音は即ち陰にして柔、靜慈悲を意味するものあり(観音は梵語にてアハロキテージュバラと云ひ鳩摩羅什は觀世音菩薩と譯し、玄奘は觀自在菩薩と譯す)此觀自在菩薩の方が穩當なりと云ふ)又華嚴經に譬へば淨き滿月が一切の水に現する如く其像の影は無量あるも天に在る眞月は一にして二ありし佛も無礙の智を以て正等覺を成就し普く一切の國に現するも其眞體は一にして二ありしとあり此處に佛と稱すは彌陀を指したるものあり佛敎に於て單に佛と云ひ如來と云ひ又は彌陀と云ふは儒敎に於て單に神と云ひ上帝と云ひ又は大極と云ふか如し耶蘇敎は一神敎と稱するも三位一體の説あり又舊敎に於ては會堂にアブラハム、モゼス及びマリヤ等の像を安置するものあり又耶蘇敎を奉ずる歐米諸國に於て古代の英雄、豪傑、碩學、高僧等の像を公園に建設し或は國民會堂なるものを設け之に安置するは我邦に於て社閭を建設すると同一にして、其趣は異なるも欽慕の念は相似たり然るに我邦を偶像を禮拜し又は多神敎なる故野蠻なり坏と誹る者あり我邦にても亦然りと思ふ者あるは大なる誤りなり

次に高産靈尊、神産靈尊

中村正直曰く或人の説に此二神に神名を付するも實は陰陽又は動靜の二氣なり故に古語拾遺にも延喜式出雲國造の神賀辭にも祈年祭の詞にも其註解には二氣の靈魂の如く説きたるものありと云へり既に二氣とせば古事記日本紀の所々に散出する高木命と同一のものにあらず

新島襄曰く高産靈尊、神産靈尊は天御中主尊の呼吸なりとも云ふ其呼吸は即ち空氣にして空氣は動植物の死生榮枯に大關係あれば造化の神と云ふも大に理あり

宮部嚴夫曰く高産靈尊は中心より外面に向て健り膨張する事を主り神産靈尊は外面より中心に向ひて嚙しめ收縮する事を主る是を理學に合はして見ると物には必ず中心力がありて其中心より外面に行く力を遠心力と云ひ外面より中心に來る力を求心力と云ふ天地創造の原理を探求するに甚だ恐れ多けれど天御中主尊は宇宙の中心力、高産靈尊は遠心力、神産靈尊は求心力にて此宇宙所謂天地日月星辰及森羅万象は創造せられ且生々化々として止むべきは全く此三神の無量無邊の功德に依るものあり

辰己小二郎曰く上代の人は造化の神を呼びてムスビの神と云ひき造化の神に



三種あり天御中主神タカミムスビ神カミムスビ神是あり天御主中神は如何なる物事を專一に造り給ふか定かに史籍に知れざれど万の主と云て宜しからんタカミムスビは男性の物を造り政体の上に関係し給ふありカミムスビは女性の物を造り教育の上に関係し給ふありムスビは結ぶの名詞にして凝結の意あり又鍛造の意あり天地を始として万物皆此神々の結はざるはあし男女の妹と脊に爲るも親と爲り子と爲り君と爲り民と爲るも皆然り靈魂も此神々の造りて人に授け給ふあり

田口卯吉曰く平田篤胤は古史傳及び靈之眞柱に於て其師本居宣長が加牟漏岐加牟漏美を高産靈尊と天照大御神といひ又カミムスビを男神と云へるを駁し更に進みて加牟漏岐加牟漏美の義を解し岐は男神を云ひ美は女神を云ふなりと論じたれども結局に於て大殿祭詞、大祓詞、遷却崇神祭詞などにある「カムロキ」カムロミは高産靈大御神と天照大御神とを申せりとて宣長の説に服したり余は篤胤も異議を容るゝ能はざりし大殿祭詞、大祓詞、遷却崇神祭詞をどに於ける「カムロミ」の語は果して天照大御神と稱するや否やを講究せざるべからず第一に祈年祭の詞の中に「辭別きて伊勢に坐す天照大御神の太前に曰く(中略)皇吾が陸神

漏岐神漏彌の命と宇事物頭根衝抜て皇御孫の命の宇豆乃幣帛を稱辭竟まつらくと宣る」と夫れ天照大御神に奉る祝詞に於ける「カムロミ」も尙ほ天照大御神を指し奉るや如何第二に篤胤が引證せる出雲國造の神賀詞に「高天の神王高御魂、神魂命の皇御孫の命に天の下大八島國を事避まつるの時出雲の臣等が遠祖天穗比の命を國跡見に遣し給ひし時に云々」此皇孫天降の場合に於て「カムロキ」カムロミ果して「タカミムスビ」「カミムスビ」の二神あらば何故に大殿祭以下の詞に於ける「カムロミ」を天照大御神と云はんとするや大殿祭の詞に曰く「高天原に神留まします皇親神魯岐神魯美の命を以ちて皇御孫の命を天つ高御座にまして云々」大祓の詞に曰く「高天原に神留まします皇親神漏岐神漏美の命を以つて八百萬の神等を神集集へ給ひ神議議り給ひて我が皇御孫の命を豊葦原の水穂の國を安國と平く知ろしめせと事依まつりき云々」其れ既に出雲國造の賀詞に於ける「カムロミ」にして「カミムスビ」ある以上は大殿祭大祓等の「カムロミ」も亦「カミムスビ」の神ならざるを得んや且余は此等の祝詞を熟讀するに所謂「カムロキ」「カムロミ」は八百萬の神の中にて牛耳を執れるものにて首唱とありて皇御孫に豊葦原水穂國を事依せまつりしとを云へるにて天照大御神の御言とは見



る能はざるなり

利之曰く高産靈尊に就ては余が最も苦心して研究せしものあり何となれば尊に一方に於ては有名無形ある造化三神の一にして一方に於ては歴史上有形の者として祭政に參與し加之其子孫多く今に至る迄其後裔の存在するとは神代の事は人智を以て測るべからざるものなりと云ふも余は決して然らざるを信ず故に古書と先輩の論とを探究し先輩は未だ一言も漏したる者はあらざれどタカミムスビはタカキムスビにしてキは即ち男性ミは則ち女性なれば此キとミとは廣く解釋すれば男女陰陽内外上下等に通ずべし故に造化三神の一なる高産靈尊はタカミムスビに非ずしてタカキムスビなり高木命は天照太神に仕へて大功あり殊に忍穗耳尊に對して外戚の親あれば當時既に之を造化三神のタカキムスビに擬し恰も天照太神を太陽に比し皇居を天に擬したるが如し且其名も亦相似たるを以て後世同一の神と爲したるものあらん又大祓の詞祈年祭の詞大殿祭の詞等にあるカムロキとカムロミをタカミムスビとカミムスビありと云ひ或はカタミムスビと天照太神なりと云ふは博士田口卯吉の説の如く皆非なりカムロキは神諸岐或は神群岐とも云ふにてカミモロ又はカミムレ

を切めたるものにしてモトムと相通ヒロとレと相通ず即ち神諸岐は高木命天兒屋命天太玉命等の男神を謂ひ神諸美は天細女命等の女神を謂ひロキとロミとの上に神の字を冠したるは群神の上にある三十二神又は五部の首を指したるものあり其群神の上にあるものに對し神の字を冠したる例は神武天皇の御名を神倭磐余彦と云ひ綏靖天皇の御名を神淳名川と云ひ又饒速日を神饒速日と云ふが如しカムロキカムロミの上に皇親とあるは天照太神にして即ち皇親が男女の群神を以て云々せしなり出雲國造の神賀の詞に加夫呂伎熊野大神とあり續後記十九の卷に載せある長歌に賀美侶伎の宿那毘古那とあるは一は素盞鳴尊を指し一は少彦名命を指したるものなり是れカムロキの群神たる一證あり

此三柱の神は皆獨神に成坐して御身を隠し給ひき

野々口隆正曰く隱身は始め御形ありて後に御身を隠し給ひしにあらず素より靈神に坐ますか故にカクリミニヌマスと訓むべしカクリミは現身の反對なり津田真道曰くケミとカミと語例は風に同じとす風は氣瀾にて竹藪をタカヤブと謂ふに同じ故に神は氣身なり古事記に天御中主尊、高産靈尊、神産靈尊此三



柱神は獨身に成坐して御身を隠し給ひきと謂へるに基きて言へるあり此造化の三神は身はあれども人目に觸れず大氣は地球上に瀰滿すれども人目に觸れざるに同じければなり此は余の一考にて敢て其説を固執するには非れども聊か參考に供す

次に國雅く浮脂の如く水母の漂る如き時に葦牙の如く萌騰れる物に因て成坐せるは

加藤高文曰く浮脂の如く此段は天地の成る始めを譬へたるにて日本紀の一書には其狀貌無言ともあるか如し

天常立尊地常立尊

熊澤伯繼曰く天の常立地の常立國の常立と云ふは常に存立して萬世不變を謂ふ

利之曰く天の常立地の常立は天地の靈を指したるものなり古事記に宇麻志阿斯訶備比古遲とあるは地の常立にして地を先に記し天を後に記したるは成立の時前後あき故あり天高く地低くして乾坤定まる天地位し萬物育すとありて既に天地あれは國生し國生すれば火水木金土生す而して亦人類生育するもの

あり

天神七代

國常立尊

利之曰く國土の靈を指したるものにして世人か天御中主尊と同一の如く説くは謬あり或人曰く國土其者には靈あるにあらず天神の靈か國土に充満しある故同一に説くも可ありと此説理あり然れども天神の靈は世界に及ぼし爰に載するは我邦のみにして世界の國土を指したるものにあらず

國狹槌尊豊斟停尊

利之曰く國狹槌は水の靈を指し豊斟停は火の靈を指したるものにして水火は動發して天に騰る故に陽にして單成なりとて獨成の神と云ふ

泥土煮尊沙土煮尊大戸道尊大戸邊尊面足尊惶根尊

利之曰く泥土煮沙土煮は木の靈を指し大戸道大戸邊は金の靈を指し面足惶根は土の靈を指したるものにして木金土は靜肅して地に着く故に陰にして偶成ありとて男女の二つの神名を附するものあり

又曰く國常立より伊弉諾伊弉册二尊に至る迄を國水、火、木、金、土、人の七種に別ち



物に在ては其靈を指し人に在ては其元首即ち君主を指す諾冊二尊は我邦太初の君主なり支那にては水、火、木、金、土を五行とあし印度にては地、水、火、風後に空を加へて五大とあし希臘にては水、火、氣、土を四元行と爲す埃及最古の神代には第一ノタは神々の父にして第二ノは日の神第三シユは大氣の神第四セブは地の神其他數種の神あり我邦にては國、火、水、木、金、土、人を以て七種と爲す想ふに世界萬國多少異なる所はあれど此七種は國家成立の原素なれば其一を缺くべからざるものあり而して此原素は天神即ち天御中主尊の成立せるものなるを以て後世國常立より以下諾冊二尊に至るを天神七代と云ふ

伊弉諾尊伊弉册尊

新井君美曰く二尊が人も國も盡く造りしと云ふは誤りあり二尊の持ちし天沼矛は誰が造りしか八尋殿は誰か造りしか此時既に多くの人ありて其人の造りし事は明あり且天沼矛を天神より賜はりしといふは手づから賜はりしにあらずして天命の歸する所を謂ひしなるべし

福羽美靜曰く日本の開闢は天神七代を神とす夫より以前も人あきにはあらず今の臺灣呂宋蝦夷などの如く仁義五常といふを知らず只禽獸の如くなりしを

國常立尊伊弉諾尊あらん勇智ありて終に海内を略し給ひしかと劔刀類は更にあく遙に素盞鳴尊八岐の大蛇を退治ありて初て天の叢雲の劔を得たまひしとやらにて夫迄の闘諍の具は木石を以て製せしものにて今の世に思ひ察せるとは大に異なる風俗なり曲玉の類にても神代の昔察し給ふへし爰に圖せる器は神代以前の石劔にまされあきものにて天下の珍器といふへし(圖は別項にあり熊野神社と石神々社の神寶を指す)

神田孝平曰く皇祖に従ひ高天原より移住せし者は金器石器俱に用ひたると史中に見へたり西洋理學士の説に従へば金器を用ふるの智を具へたる者は復石器を用ふるの理あかるべきあり然るに獨り我邦に於て否らざるは何ぞや蓋亦其故あらん憶ふに其初め有する處の金器は高天原より齎らしたる所にして其數甚だ少く每人之を用ふるに足らず故に之を用ふるは君主將領等に止まり其他の從民は仍ほ石器を用ひざるを得ざりしなるべし

又曰く太古の石器を神物として之を尊敬するは萬國未開の人の同しき所あり蓋未開人は太古石器を見て人間界より一層上界に位せる者の製造せし者と誤信するに依るといふ此誤信は我邦人に於ても免れざる所あり然れども我邦に



於ては別に一種崇敬の因由あり蓋我邦人は始祖を重ずるの心殊に深く建國以前を崇みて神世となし其遺物を神物とす是れ即ち徳を慕ふて物に及ぼす者にして之を彼の誤信に依る者に比すれば大に庭逕ありとす

坪井正五郎曰くアイヌの口碑を聞くに我々は元來シヤモチ(日本々州を謂ふ)に居りし者あるがシヤモチ(日本人種を謂ふ)の爲に追ひ拂はれて此島(北海道に移り越せしなり今より何代以前の事か知らざれども其時分には此島にアイヌとは異りたる人間住ひ居れり常に落の葉の下に隠れし故コロボクウンクルの名を下したりコロコニ(落ボク)下ウン(のクル)人の約言なり其居所は堅穴なるゆゑトイチセクル(土の家の人)といひ今も諸所に其趾存在せり此種の人間はアイヌに比して丈低かりしと云ふ土を以て椀を造る事巧あるゆゑトイチクル(土を焼く人)と云ふ屢アイヌの家に來り食物杯を交換して往きしとを窓より手のみ入れて遣り取りするを例として決して家に入らざりしを或アイヌか無理に引き入れしかば甚く怒りて其後は絶てアイヌに接近せる事なく追々に此地方を退きて終には悉く北の方に移り往けり現存する堅穴の中より土製の椀鐵製の鍋石製の刀物等出る事あり何れもコロボクウンクルの用むし器物なりと云へり

小金井良精曰く本邦貝塚を爲りたる人類は其身軀現今の本邦人或はアイヌよりも矮少あらざりしことは斷言するを得べし

八木舛三郎曰く我日本の上代は如何なりしや普通記録の傳ふる所に據れば皇祖神武天皇の東征に先つて伊弉諾伊弉册二尊の國土を經營し給ふ由を記せり其年代は固より知る可からすと雖も或は三千年に庶幾からん之を世界の歴史に照し見るに其發達敢て遲しとせず然れ共此以前に於て猶石器類を製作使用せる者國內に住居散在せることは從來の學者多く氣付かさりし所なり然るに近世科學の發達は永く此記録以外に存在せし人類の不明を許さず遂に我が全國及各島嶼に散布せる這の太古の遺蹟遺物を發見するに至れり噫世界の廣き邦國の多き概ね地誌に載するが如しと雖も詮し來れば殆皆此石器時代あり而して我日本の如きも亦己に其迹を存す然らば則ち人類たるものは必ずや一度此階級を経過すべき筈なりや又金鐵の用を知るに至らば果して開明に向ふべきか否々事實悉く然るにあらず現に我北海の野に棲居して氣息奄々將に消滅に歸せんとしつゝある夫のアイヌの如きは其蠻境を脱せざる事敢て鴻荒の世に毗睨跳梁を極めし蠢爾たる醜類に譲らざりしと雖も嘗て石器の類を使用せ



し事なく又今日印度の内部に残存せるドラビリアン人種の如きは久しく金属の具を使用し居れども今猶世界の未開人民中其最も甚だしきものと見做さるれば人類の開否は必ずしも使用物の品質如何に因るにはあらず其原因自から他に存するあり猶例證を求めば埃及人はいふに及ばず猶太人の如きも今日歐亞の間に彷徨して國を建つるの氣力なく又朝鮮人の如き世界の文明に伴ふ事を難しとする可憐のものあり之に反して歐人の未だ米大陸を發見せざるに當り獨り自から開明に趣きて今に其意外ある遺物を留めしヘルキート・メキシコ人の如きは實に未だ石器時代の境域を全脱し能はざりしあり

又曰くアイヌは吾々日本人種と同く世界の學者間に於て尤も疑問多き人民なり去れば或者は彼を目して蒙古人種に屬せりと云ひ又他の者は之を指して印度日耳曼人種と本源を同ふせりと稱す其外亞細亞南端の人類中に祖先を有すと説くものあれ共要するに彼等は亞細亞太古の人民にして僅に我北方の地に其名残を留めたりとの説實に近きが如し而して石器使用の人民と彼等アイヌとは固と同一種族なりしや否や換言せば石器時代の住民はアイヌなりしかとの問題は世人の毎に發する所あり我邦の石器使用者を指してアイヌありと説

けるは舊く徳川時代に在らんか今其始を審にすること能はず近く此意見を主張せしは前東京大學の履教師ウィリアム・グリフス及びジョン・ミルンの如きあり尋で其意見を繼承せるは小金井博士を初めとして世に甚だ多し又右は我日本人の祖先が用ひたりと云へるも舊く國學者の著述に見ゆ而してアイヌに非ず日本人に非ずとの説は實に新井白石の文中に記せり然れども此説には又二様の別あり即ち新井先生は肅慎襲來の遺物と認め米人モールヌの如きは明言せざれども右以外と見做せるに似たり而して近時坪井先生の執る所亦アイヌに非ず日本人に非ずエスキモーに類したる者あらんと云ふに在り斯く諸家の聚説紛々たれ共今日尤も正しく思はるゝは最後の一説に過ぎざるが如し

大隈重信曰く寒い地方の人民は多く動物を利用し熱い地方の人民は多く植物を利用する寒い地方には植物が少いソコで動物を殺して其肉を食ひ其毛皮を取て其跡に纏ひ動物の這入つて居た所の洞穴に這入つて之を自然の家屋とする歐洲の石屋は地中の洞穴を地上に移し出し地上に一の洞穴的居所を作つた者である然るに熱い地方には植物が多きソコで米麥を食物とし麻や綿を衣服とし桑に生する所の繭を取て衣服を作り而して樹木の間眠る日本の家屋



か樹木を多く用ゆるは祖先が樹木の間に雨露を凌いだる習慣の發達した者で、木を以て柱となし茅を以て其屋根を葺き板を以て其壁を作る歐洲の石屋と其根本に於て其趣を異にしたものである。

西村茂樹曰くチャールズダーウキン曰く吾等人類は其初め猿猴と其祖先を同くしたる者にして其祖先は既に世に滅びたりと此言尤も疑ふべし世界に動物の種類多し何ぞ猿猴の類のみ此の如く大に進化して他の動物は進化せざるや馬は古より馬にして牛は古より牛なり若し猿猴の類化して人と爲りたるとならは犬豚は化して人と爲り人と爲らざるも犬豚よりは高等の動物と爲るべし人は化して神となるへし蠕蟲無腸蟲原蟲の如き最劣等の動物は何れも進化して世界に其迹を絶つへきの理あり然るに猶然らざる者は何ぞや

小崎弘道曰くチャールズダーウキンは種属起原ある書を公にし其進化論を發表したる必實に一千八百五十九年ありとす進化論の始め世に稱へらるゝや反對論者は之を以て從來の基督教會が信奉し來りたる天地創造説に反し造物主を蔑視する説なりとして之を排斥し其主唱者も亦之を以て從來有神論唯一の論據として舉示せられたる意匠論を自然法に因て解釋し得る者と爲し雙方の

間に激き辨難抗論を見るに至れり而して吾人は最初進化論に反對を稱へたるは必ずしも神學者のみに非ず有名なる博物學者オーウエン、アガスシー氏の如き人々も之に加はり居たることを記憶せざるへからず其後進化論が稍々廣く學者の間に承認せらるゝに至るや神學者科學者間に於ける第一の問題は如何にして進化論と有神説との調和を圖るへきやにてあり神學者并哲學者にて衆に先立て進化論を是認し之と有神説の調訂を試みたるはプリントン大學の故總長博士マッコツシにてありき而して神學者并宗教家として最初より之を歡迎したるは故ヘンリーウォールド、ビーチホルなり又科學者にして最初より之を以て有神説に反する者に非すと爲し進化論有神説の並立を主唱したるはダーウキンと同功一軌の學者たるアルフレット、ウオーレスの如き其他ジョルヂ、ミーラー、アサクレ、レントの如き是なり進化論の世に公にせらるゝに當り當時の學者か多く之を以て有神説に反すると爲したるは當時の神學思想たる十八世紀以來神學界に暴威を縦にせしデーブム(一神説の餘毒を未だ全く脱する能はず神の普遍内住的特性を十分承認せざりしに由る當時の神學思想は神は天地を造り給ふに初め之に賦するに自然の理法を以てし爾後天地は其



自然法の結果に因て進行する者と爲せり故に進化論にて種属の起原を解説し得ると爲す以上は造物主の存在を要せざるは勿論宇宙の森羅萬象悉く自然の理法に依りて解説し得へしと爲したるや當然なり然れども今日の進みたる思想を以て之を見る時は進化は神の天地創造の一手段にして之を以て假に萬事を解釋し得ると爲すも之か爲め造物主の存在を不必要と爲すの理由なく神は天地の上に在りまた裏に在りて働き給ふものなれば進化の進行もまた神の一働作たるに外あらざるありされは現今に至りては進化論と有神説とを調和するの必要は殆ど見ざるに至れり

利之曰人類は天御中主尊の造り給ひしものにして其始めて生れし所は内外の學者も知る能はず時代も亦詳ならざれど考古學者の説に依れば今より二十餘萬年前ありと云ひ又進化論者の説に據れば人類は他の動物より進化したるものありと云へり其證は今日の馬は太古の馬にあらず今日の牛は太古の牛にあらず何れも進化したるものなりと云へど余は進化論を歓迎する者あるも人類は他の動物より進化したる者にあらざるを信す何となれば今日の牛馬は太古よりは進化したるも狗猫より進化したるにあらず太古に於て多少其容貌は異

にせしも其性質は依然牛馬に相違なかるべし今日東洋の草木鳥獸を西洋に持行き之に改良を施す時は五十年乃至百年にして其容貌を變更するも恰も別種の如くなるべし然れども其性質は決して變せざるなり故に余は人類も他の動物より進化したる者に非ずして一種の子孫蕃息して諸國に移住し氣候と食物との異動に因て體格言語性情等の變化せるを以て遂にアリヤン人種又はチユラニヤン人種等の名稱を付するが如く二十餘万年間には屢々變化せしも元とは一種にして決して他の動物より變化したるものにあざりしならん故に余は進化と稱するよりは寧ろ變化と云はんとす日本人種に就ては種々の議論あり言語體格遺物地理宗教等に因て觀察する者あれども何れも其一科に就て觀察すれば其要領を得ず前帝國大學教師チャンパーレンは日本人種はチユラニヤン人種ありと云ひ博士田口卯吉は各國の語を調査し日本の文法は全くトルコと同一にして唯々動詞の後に人性語尾の付かぬ點が相違して居るのみ神代の尊達の歌を見ても動詞の後に人性語尾の付て居るなし故に歴史以前に於て是れは消え失せたることと信す朝鮮にも此の如き語法なし其れより先に消え失せたることあらん併しトルコ、サンスクリット等の文法は日本文法中に無疵



に存生して居るを以て我々はヨーロッパ人に比すれば本家筋に近きものと云はざるべからずと云へり此論はアリヤン人種と爲すものあり其他日本人種はコロボクウンクル即ちエスキモー人種と云ひ其證としては近世諸國に於て掘出せる埴輪人物が温和なる丸顔にて一見男女の區別を爲し難く只乳部の大小にて異なるのみエスキモー人は男子も鬚髯少く温和ある丸顔にて言語もやさしく一見男女を區別し難きのみならず其衣服も日本にて太古使用したるウツハタに似て居ると或は日本人種はアイヌ人種ありと云ひ其證としてはアイヌの言語中に日本古代の言語が存し居るのみならずアイヌが巴の紋様を嗜好するは神代に關聯するものなりと或は日本人種はマレー人種ありと云ひ其證としては日本古代の劔はマレー人の持たる劔と其形を同ふせりと又近世我邦諸處に於ては象骨を掘出せり考古學者の説には六千年前は我邦と支那大陸と連續し居たれば我邦にも象は棲息せりと又地理學者の説に依れば日本の西部の土地は追々陥落して海とあり東部の海邊は追々突出して陸とある故に今より三千年前は日本と朝鮮とは僅に一葦帶水を隔つるのみなりと博士星野恒は本邦古籍に就き日韓交渉の件を査せしに二國はもと一域にして他境に非ず其全

く別國に變せしは天智天皇以後なりと云へり是れ亦人種を研究するに參考と爲すべきものあり余は日本人種の祖先はアリヤンあるやチユラニヤンあるや措て問はず神代の前即ち石器時代はコロボクウンクルと云ひアイヌと云ひ皆同一の人種ありと信ず今諸國の貝塚より掘出したる古物とアイヌの口碑と考古學者の説とを參考するに四千年前あるか五千年前あるか詳あらざれど我國には古く一種の人類あり南洋又は北地より多少移住したる者もあれど(其中追々進歩せし者と退歩せし者とあり其原因は海岸に棲息して漁魚を爲す者と山間に棲息して獵獸を爲す者と原野に棲息して果物即ち草木の實を食ふ者とあり余は不適當あるも假りに此三者を名けて漁族獵族稼族と稱す此中稼族は多く西南に居て漁族獵族は多く東北に居り稼族は漁族獵族とも交通し追々進歩して遙に漁族獵族よりは優れたる者となりたり神代に至り古事記に火照命は海佐知毘古として緒廣物緒狹物を取給ひ火遠理命は山佐知毘古として毛毳物毛柔物を取給ひきとあるは即ち二君が一は漁族の多き土地を領し給ひ一は獵族の多き土地を領し給ひしものなるべし又博士黒川真頼が古代の建築を説くに上中下の三等あり上は宮殿に住み中は家屋に住み下は依然穴居すと博士栗



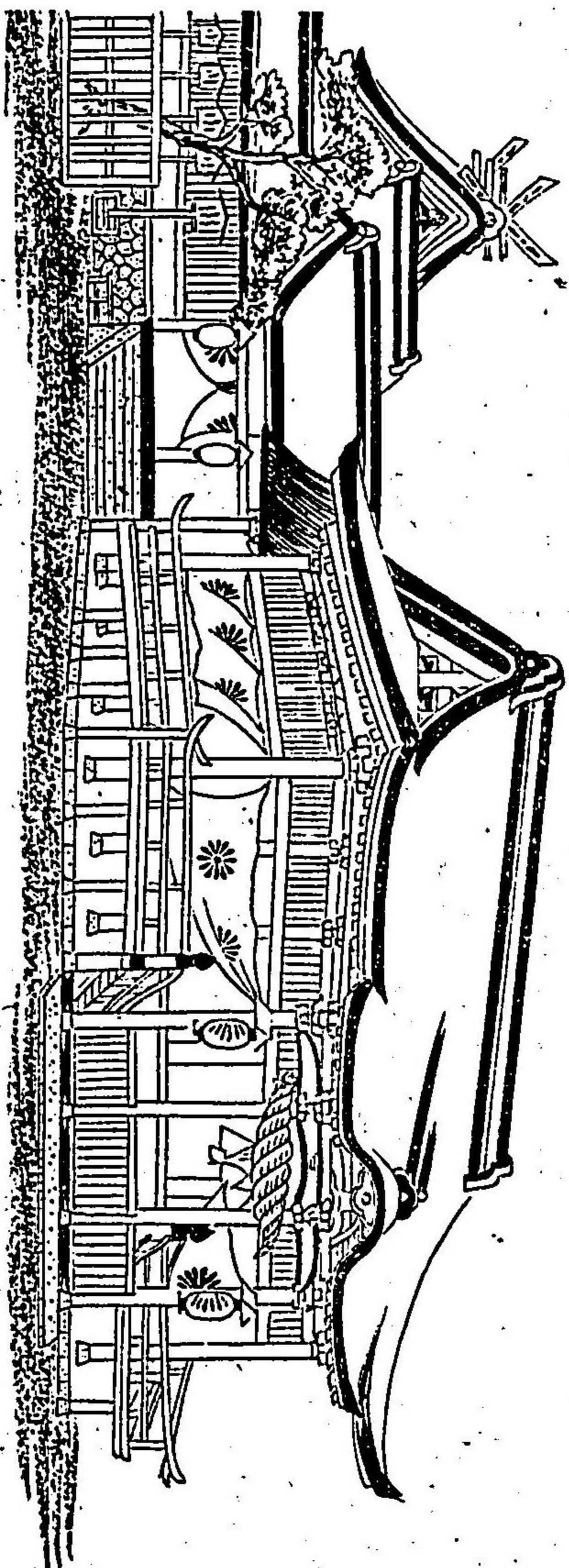
田寛の説に宮殿は少く異あれども出雲の大社は古代建築の名残りを残したるものなりと此穴居せしものが即ち漁族獵族なり稼族は益々勢力を得殊に多く西國に在りし故支那朝鮮とも交通し漸々東に向て移住し漁族と獵族とは漸々北に向て去る此三族は追々區別を嚴にして互に結婚せざると幕府時代の士農工商の如し此三族年序を経て大和民族アイヌコロボクウシクルの三種となりコロボクウシクルは大和民族とアイヌに追はれて遂にグリーンランドに至りエスキモーの名稱を受くるに至るアイヌは又大和民族に追れて北海の一部に棲息し今や將に絶滅に歸せんとせり考古學者の説に石器時代と稱する人種とアイヌ若くは大和民族とは其躰格及び意匠が相違せりと言ふ者あれども是れは前に説く如く數千年の間に氣候と食物との關係に因て漸々に相違せしものならん今其例を擧ぐれば韃靼人の支那に近き土地に住む者は支那人に類し魯斯亞に近き土地に住む者は魯斯亞人に類するとは何人も知る所なり其最も近き例を取らば幕府時代の商人と農人とは躰格言語は相異あり京都人と江戸人との意匠も相異あり貴族の令嬢と百姓の娘とは實に別人種の如く見へたり生理學者の説に因れば肉を多く食ふ人は鬚髯多く魚類及び野菜を多く食ふ人は鬚髯



武藏國豊島郡下石神井村石神社にある石劍



武藏國葛飾郡下千葉村熊野三社にある石劍



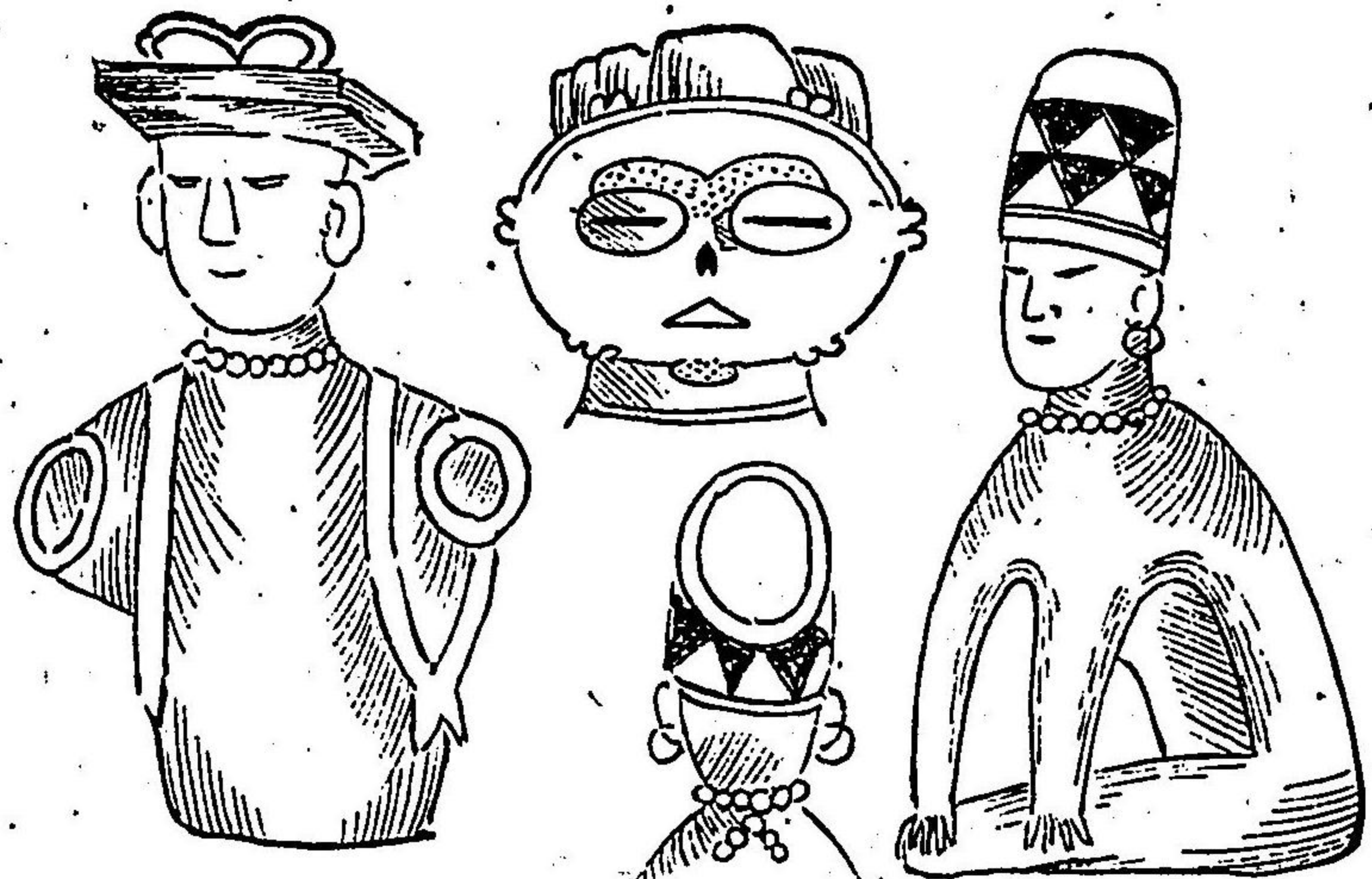
出雲大社之圖



少しと云へり又黒川真頼が日本古代の婦人は丸顔にして兩頬に黛の如きものを附したるを説きしが此黛の如きものはヨーロッパ即ちオーストリアの口鈕アイヌの入墨の進歩したるものからん口紐の如きは米國土人にも其習慣ありといふ又前帝國大學教師モールスは大森介墟篇に食人種の證として日本古代に食人の風ありしとを説きしが八木井三郎は之に就て食人の風は現今と雖も世界の或地方には行はれつゝあれば我石器時代の人民中に其迹存せりとするも別に珍らしからぬ譯なれどモールス氏の發見後諸地方より出る貝塚中の人骨には未だ骨髓を收め或は鍋に投せんが爲めに推折せられたる痕ある者を見出さざれば姑く疑を存し置く方然るべしと云へり博學多識の人と雖も僅に一二の例を以て其他を推すとは難かるべし何となれば大森介墟篇にも誤謬なしとせず現に高坏の底を倒に畫きて完全の土器と爲せど其後諸處に於て掘出せる高坏に因て其底部のみありしことを知るに至れり世人西洋人の言と云へば一も二もなく信ずれど西洋人の言にも誤謬少からず人種を言語の上より觀察を下したるに就ては田口卯吉が「古代の研究」に於て西洋博言博士の説の誤謬を駁し又外人中には我言語の朝鮮暹羅の言語に類するものあるを以て

朝鮮又は暹羅より移住したるものなりと云ふ者あれど我神代と稱する時は既に開明の域に達し外交も頻繁なりしとは疑ひなし何となれば天日槍等が歸化し久米邦武の説に依れば少彦名命は支那人ならんと云へり果して然らば是又我邦を慕ふて支那より來りたるものならん林道春の本朝通鑑に依れば懿德天皇の御宇大聖孔子も我邦に來らんとすどあり然らば太古我邦よりも外國より赴きたる者も少からざるべし隨て我が言語器物等の彼れに傳ひじやも知るべからず素盞鳴尊は朝鮮の牛頭山に居りたるとは歴史家の既に認むる所にして暹羅の如きも中世我邦より山田長政が到りて彼れに王たるとあり支那の如きも現今の皇帝は義經の子孫ありとの説あり明朝の亡びんとせし時明の遺臣援を日本に乞へり此時清朝は竊に欸を我れに通じ清の皇帝の祖先は源義經なれば姓を源と云ひ國を清と云ふは清和源氏に因て名けしなりと其證として義經の遺物を徳川幕府に贈り越したることありと云へり又偶然相似たるどの事に就ては上古の埴輪を見るに衣服は筒袖細袴にして履物も靴なれば現今の歐米人に似て居れり其帶ふる所の劔も歐米の劔に似たるものあり帽子の如きは常陸國行方郡秋津村及び下總國北相馬郡岡村等より掘出したる埴輪の中には佛蘭





村谷大郡企比國碓武  
輪壇るたし出掘りよ

村岡館郡輕津西國奥陸  
輪壇るたし出掘りよ

齊村津秋郡方行國陸常  
輪壇るたし出掘りよ



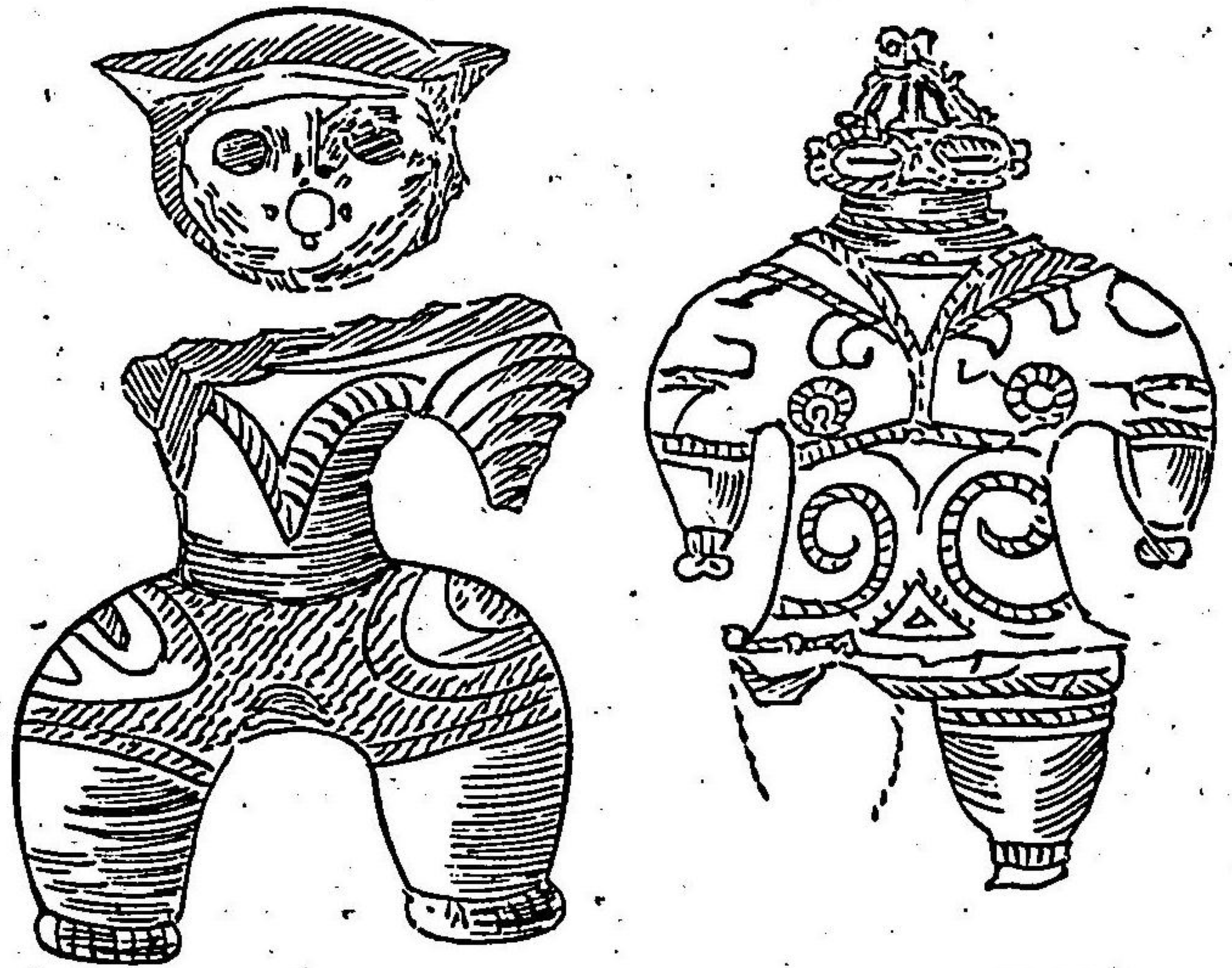
村岡郡馬相北國總下  
輪壇るたし出掘りよ

村宮雀郡内河國野下  
輪壇るたし出掘りよ

村谷大郡企比國碓武  
輪壇るたし出掘りよ

首は下總國北相馬郡小文間  
より掘出したるものなり

肩は陸奥國龜ヶ岡より  
掘出したるものなり



掘りよ岡ヶ全國奥陸  
りなのもるたし出



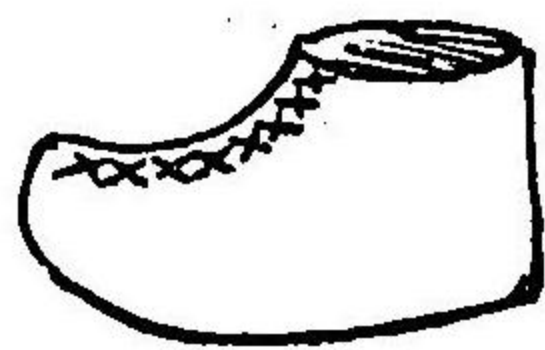
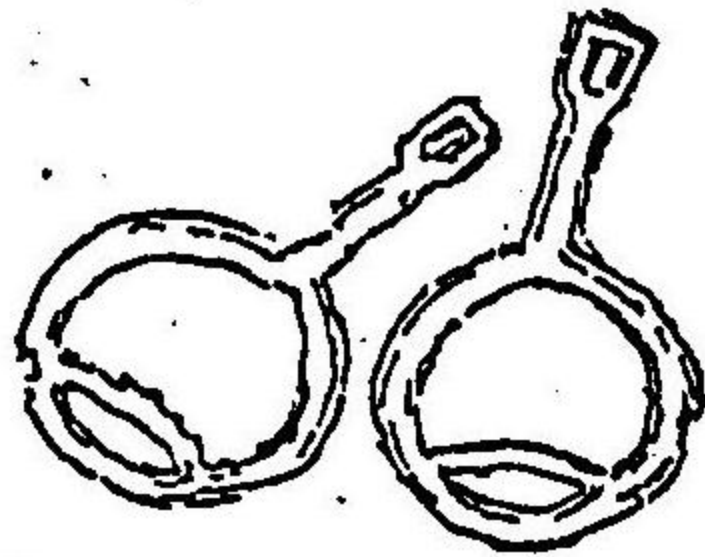
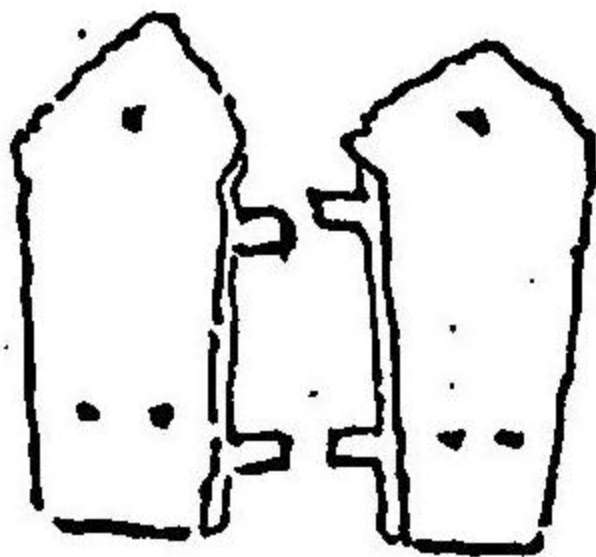
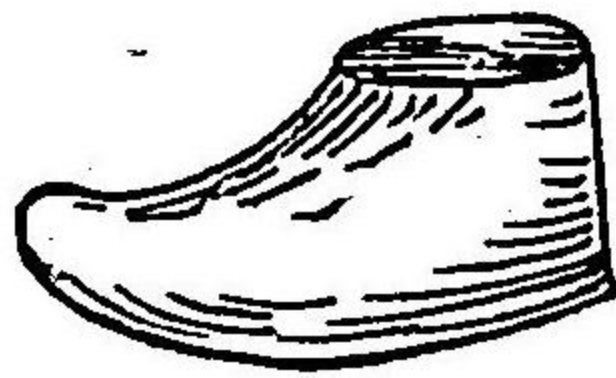
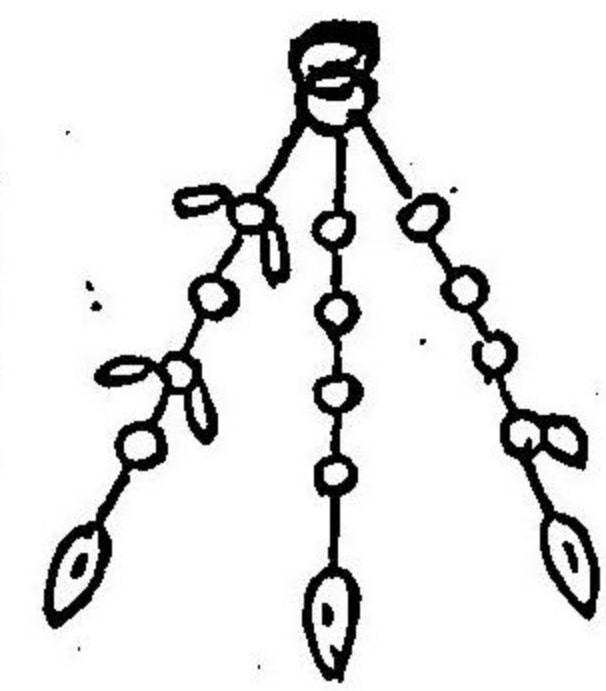
掘りよ郡那伊上國渡信  
部頭の子るたし出

りよ村曲大郡鹿平國後羽  
輪壇の子るたし出掘

よ塚貝田福郡敷稻國陸常  
輪壇の子るたし出掘り

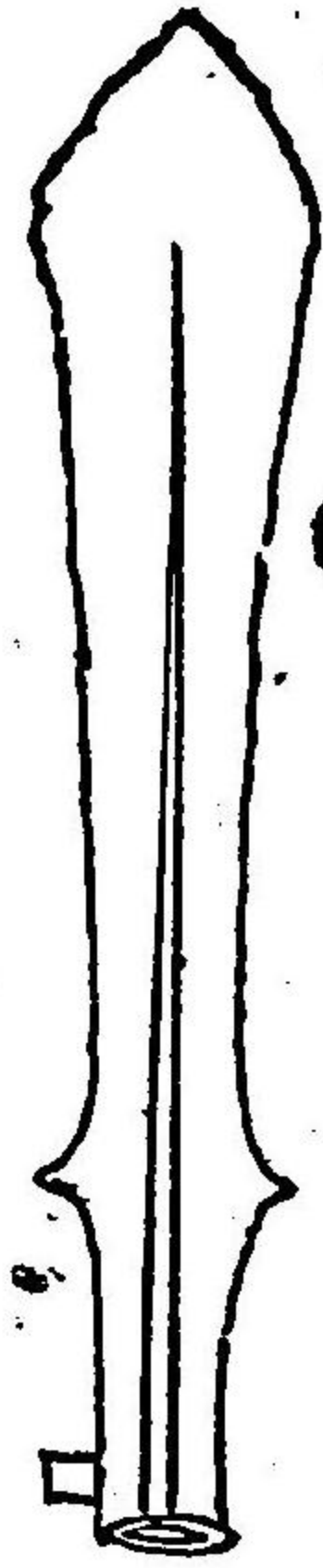


肥後國玉名郡江田村より掘出したる耳環たる鍍金の履  
同所より掘出したる鍍金の履  
山城國乙訓郡大原野村より掘出したる石下駄  
肥後國玉名郡江田村より掘出したる籠

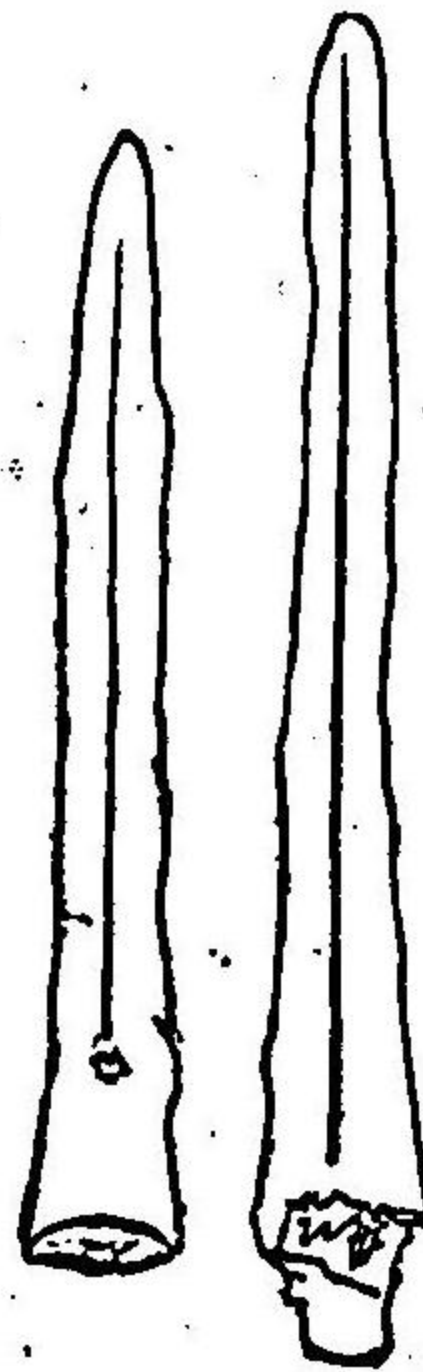


越後國彌彦神社に  
ある鍍金日命の履

對馬國下縣郡佐賀村より掘出したる銅鉢



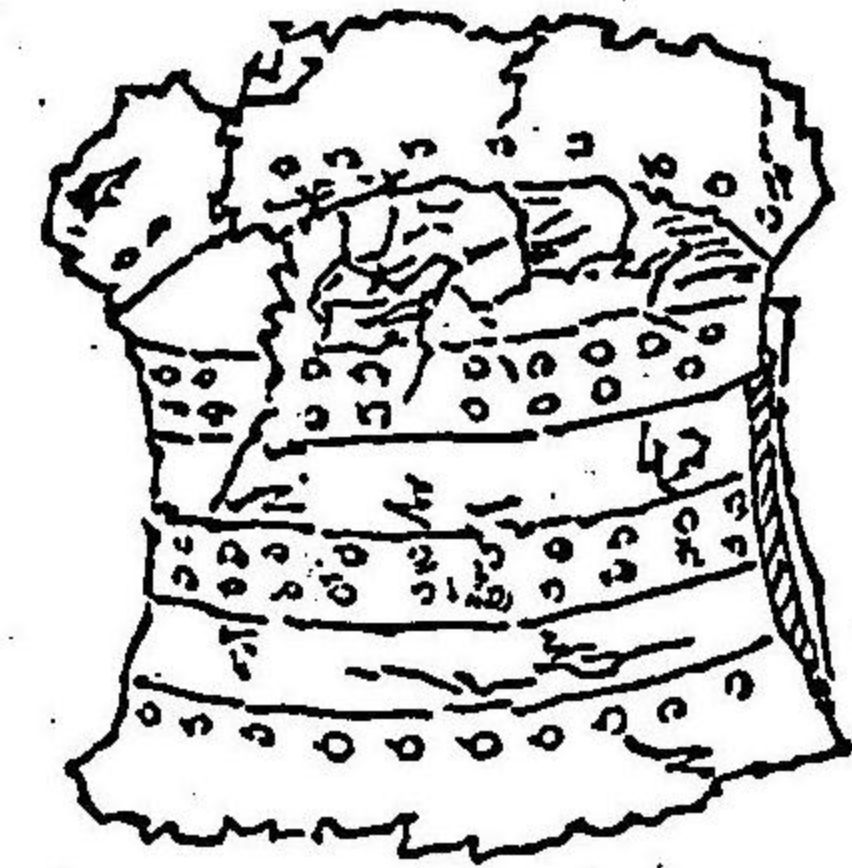
尾張國神戸村より掘出したる銅鉢



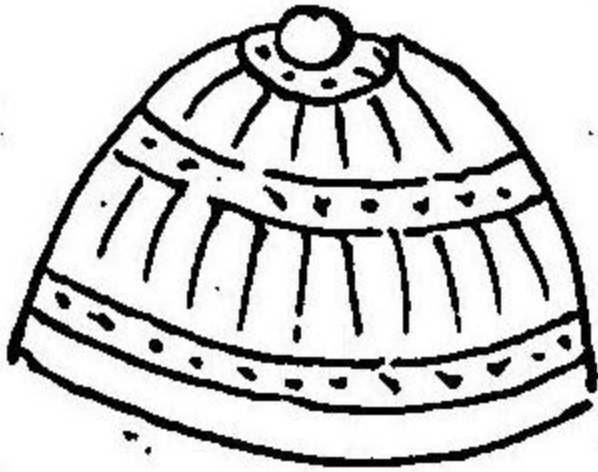
上野國碓氷郡若田村より掘出したる鉄冑



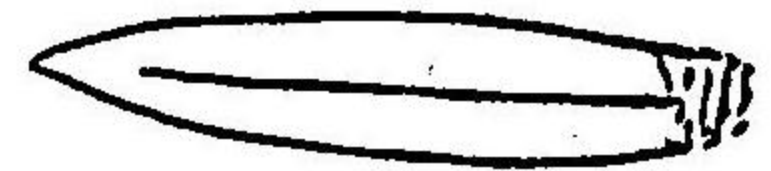
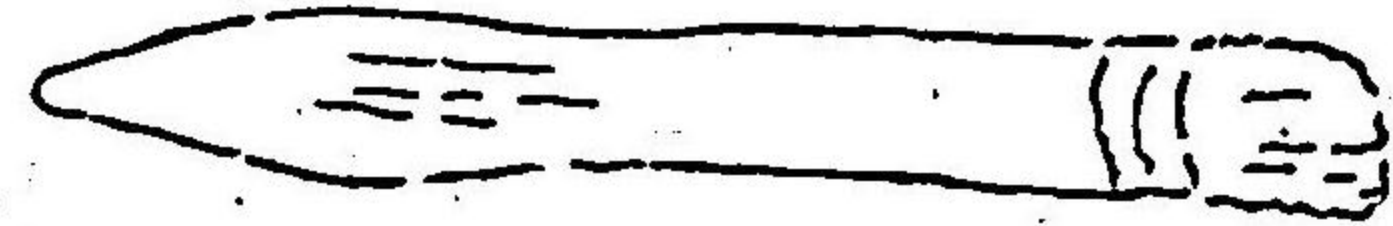
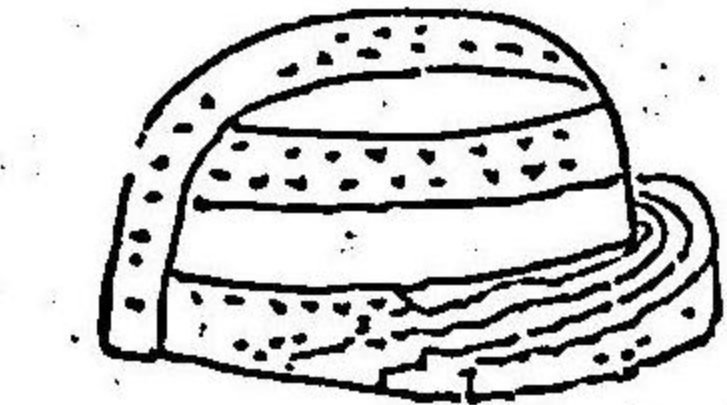
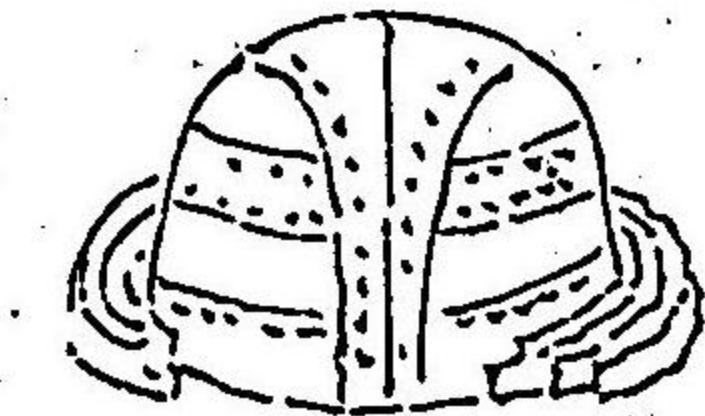
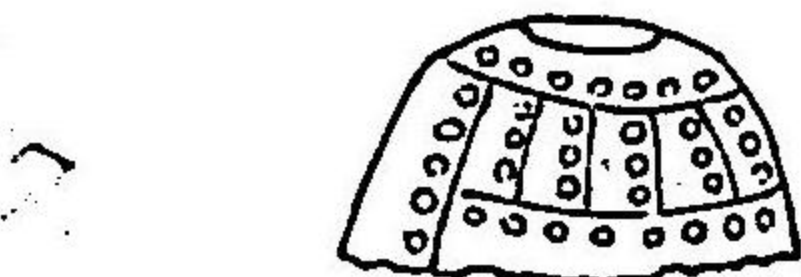
上總國寧陀郡清川村より掘出したる鍍金の兜



武藏國秩父郡大宮郷より掘出したる鉄兜



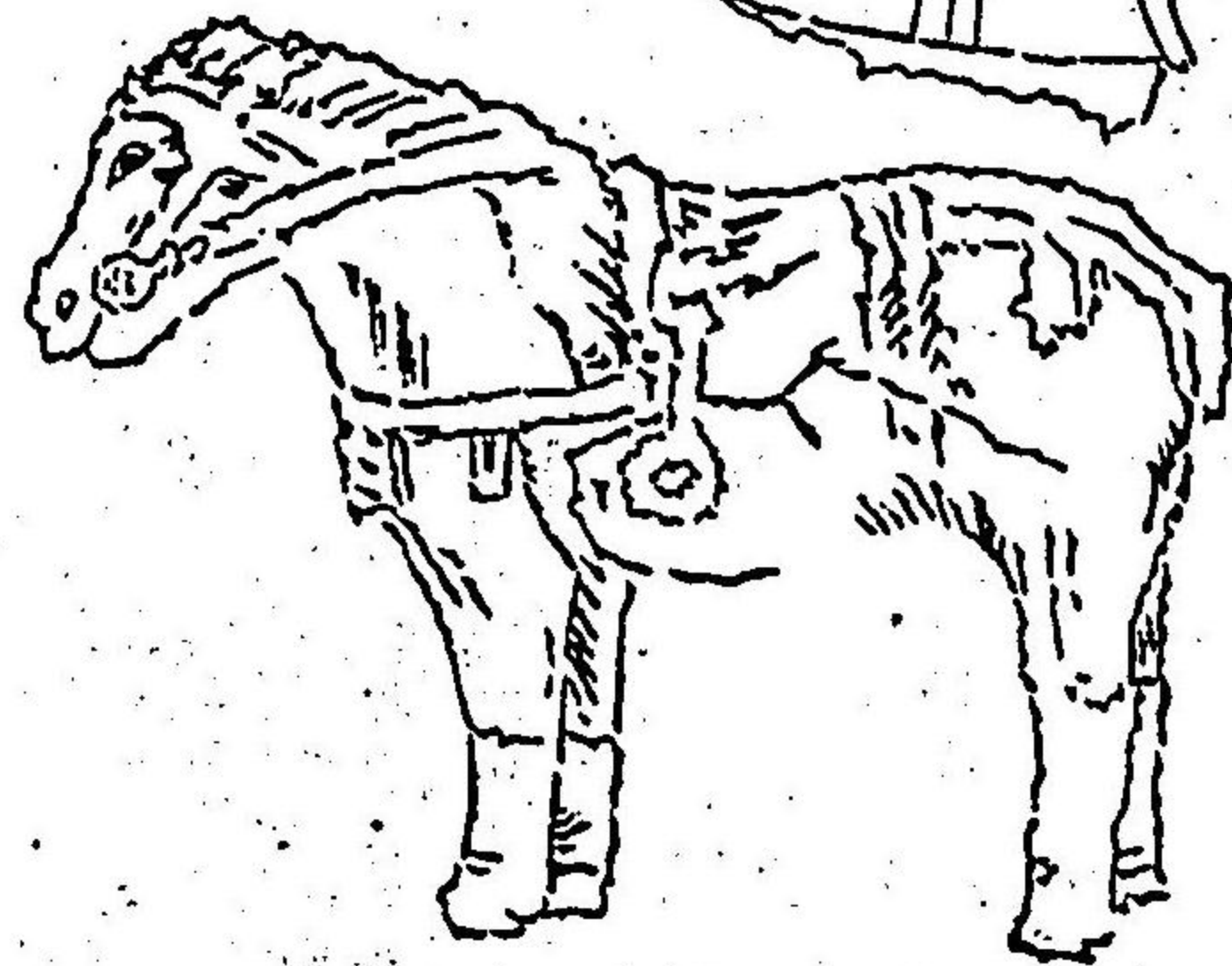
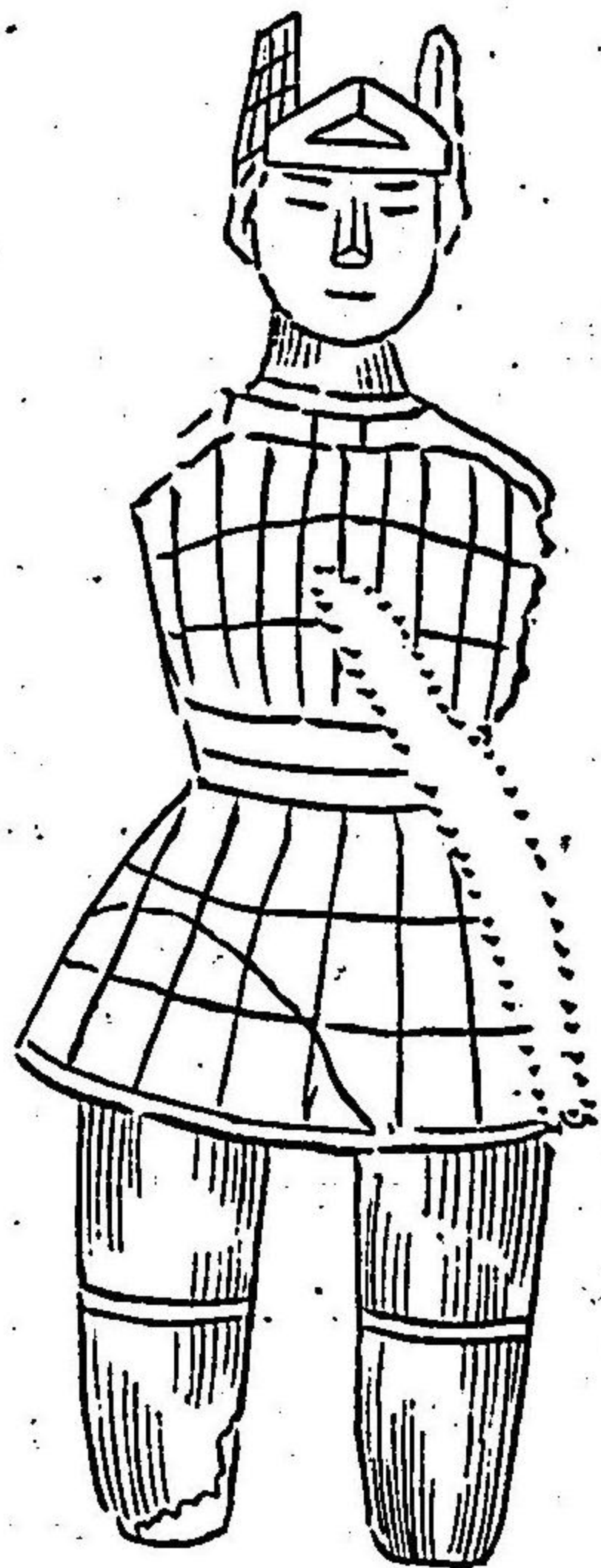
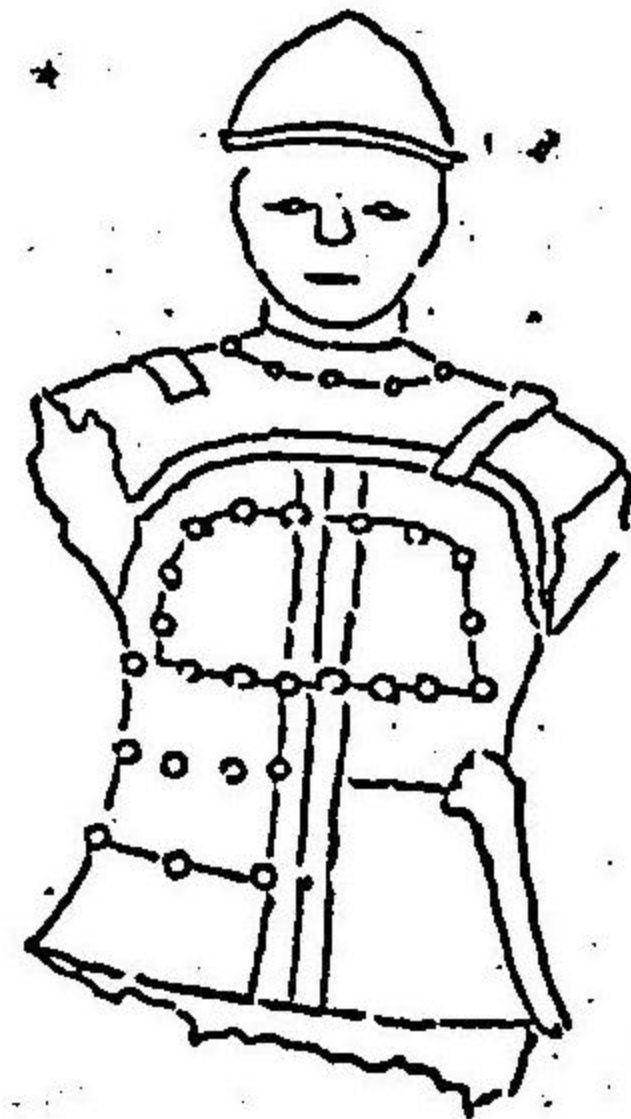
肥後國玉名郡江田村より掘出したる鉄兜



シラロモ國振贖は下  
銚石るたし出掘りよ

ツコシヤチ國路銅は中  
銚石るたし出掘りよ

見小郡玉崎北國藏武は上  
飯古るたし出掘りよ村寺



武藏國比企郡大谷村より掘出したるもの

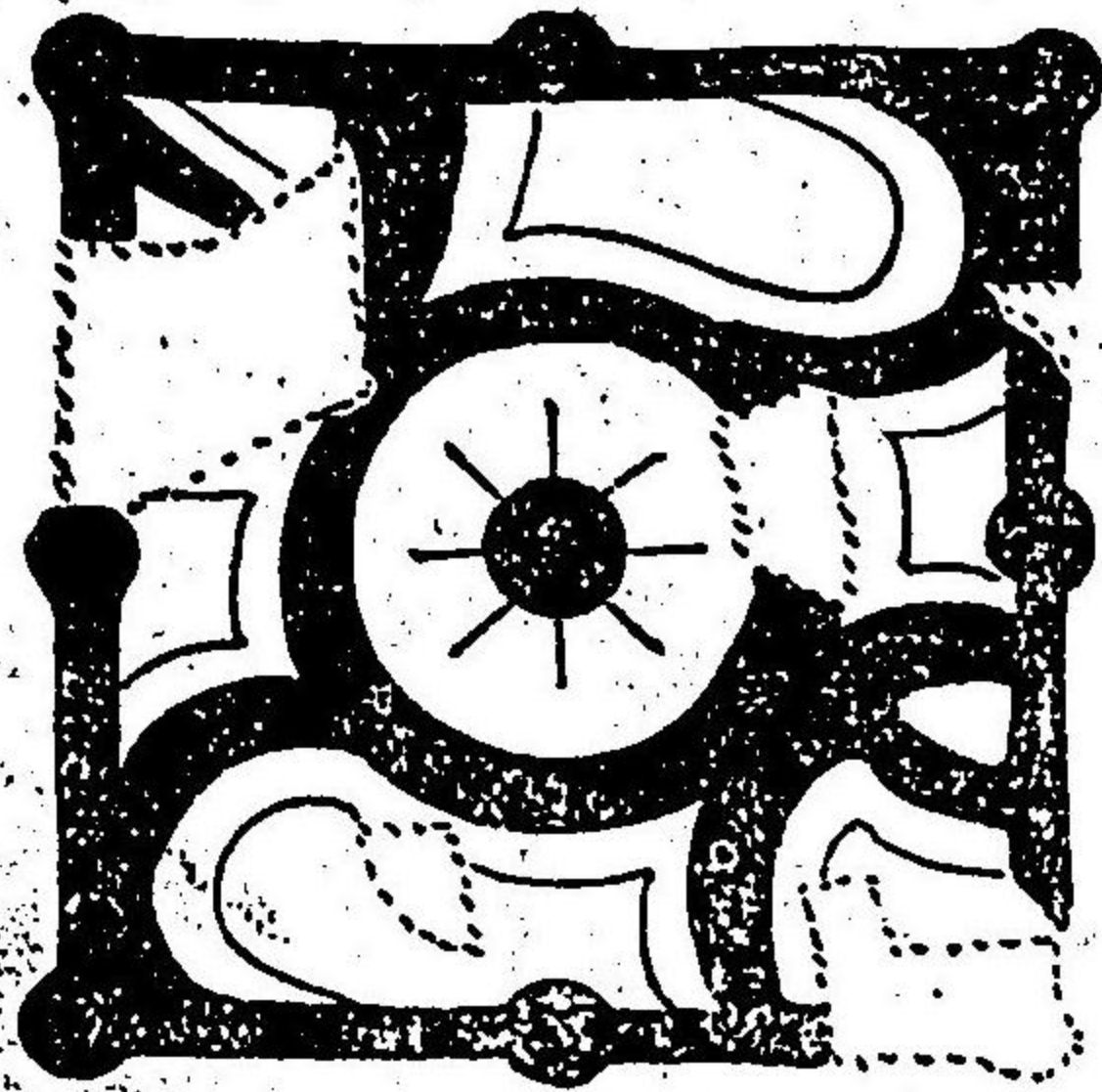
中人物と馬を武は武藏國玉崎より掘出したるもの

常陸國方郡秋津村青  
輪壇るたし出掘りよ

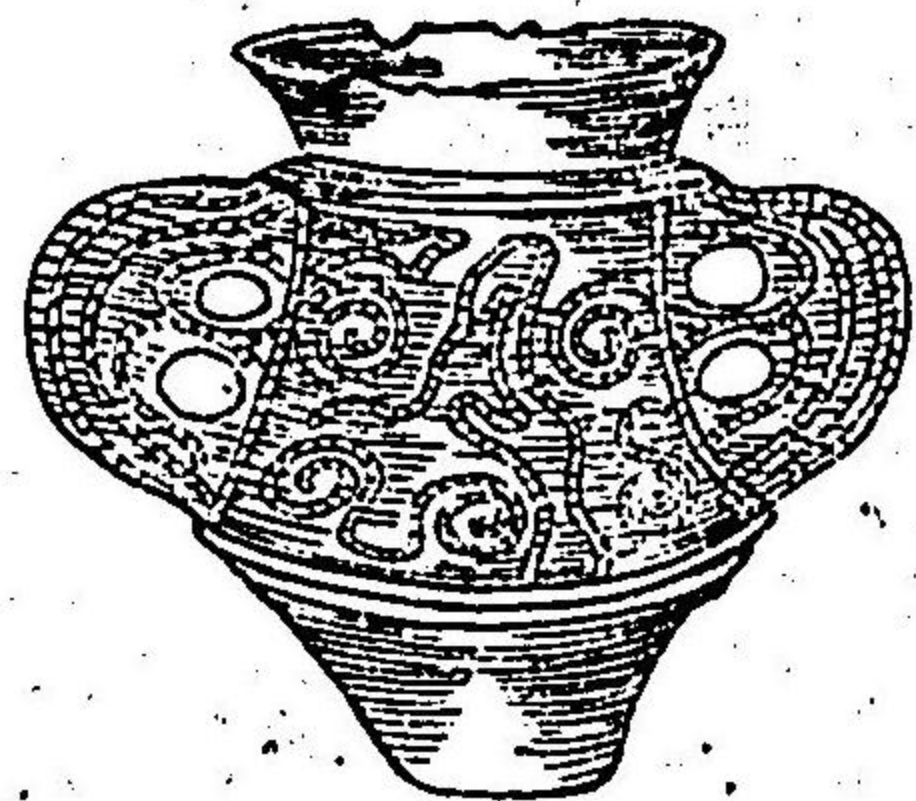




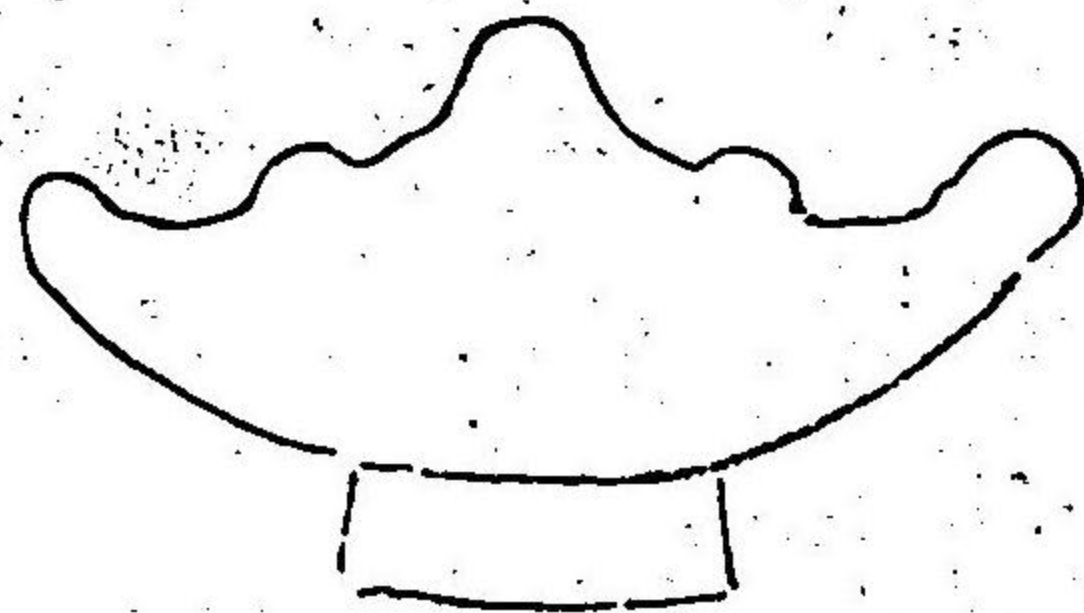
形髪の人婦代古るたべ調取の頼眞川黒士博學文



面中の杯高右

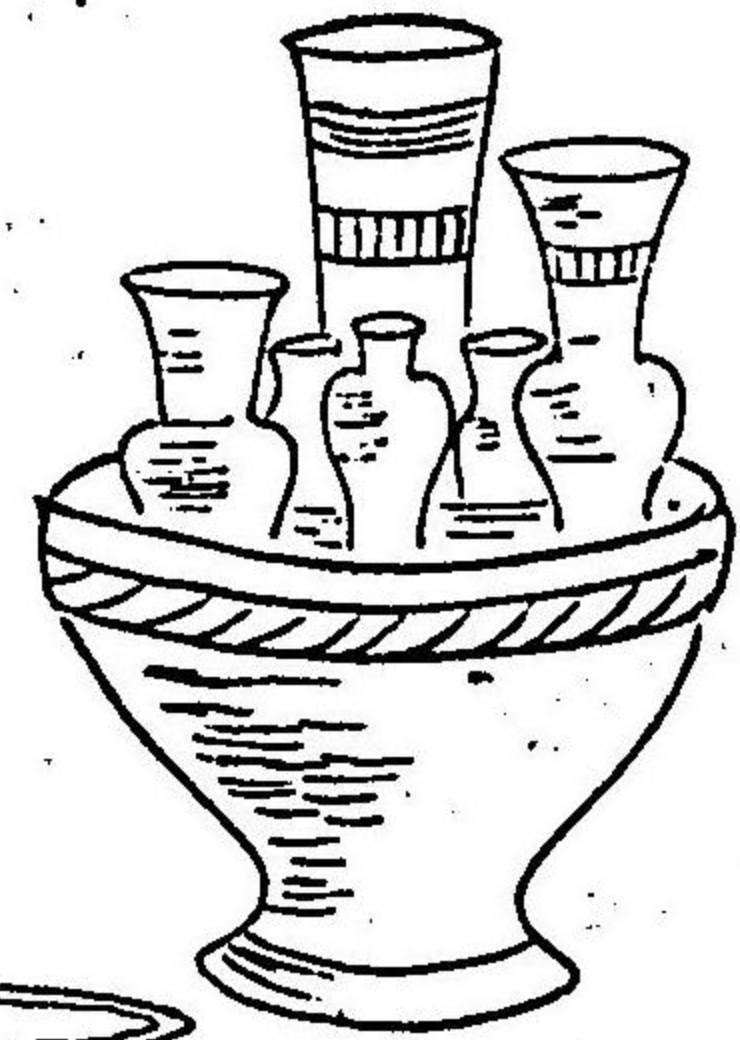
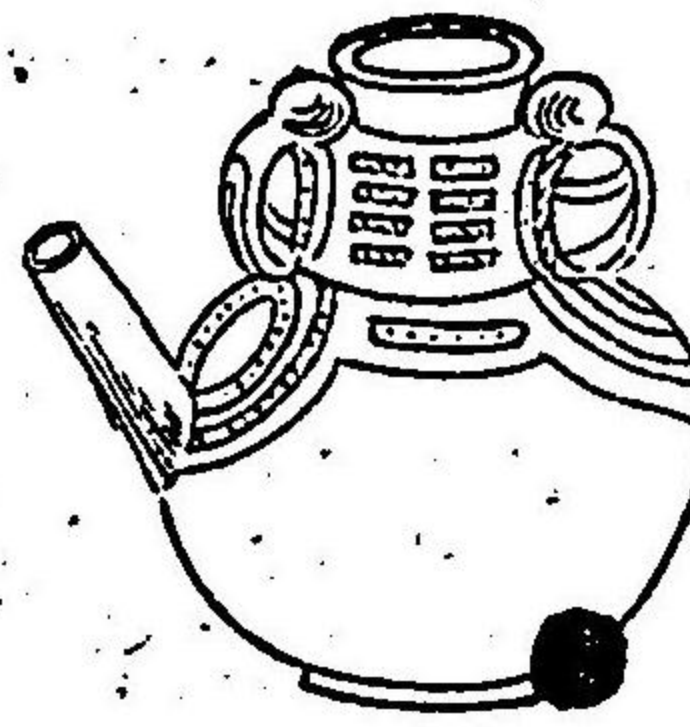


福村賀須大郡敷和國陸常は下  
杯高の塗朱るたし出掘りよ田

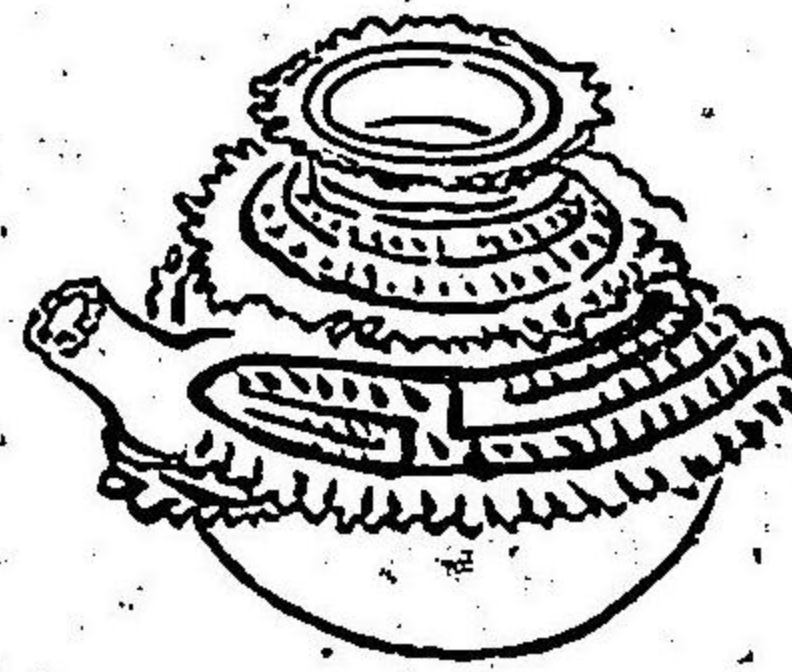


郡那伊上國渡信は上  
器土るたし出掘りよ

常陸國福田貝塚より掘出したる土器

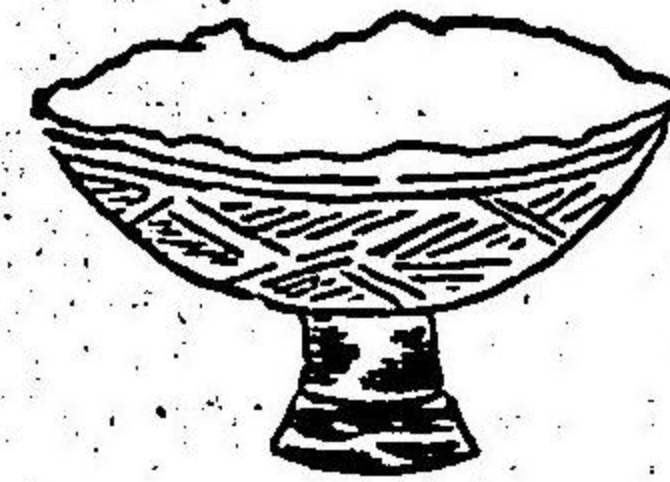


陸奥國龜ヶ岡より掘出したる土器



美濃國不破郡市尾村より掘出したる石製の壺  
登能國谷郡ノタ崎より掘出したる壺

陸奥國龜ヶ岡より掘出したる高杯



大和國高市郡より掘出したる高杯の類



越前國朝賀郡松原村より掘出したる土器



山城國木幡山より掘出したる壺





西形又は獨逸形の帽子に似たるものあり馬の鏡も環形にして西洋鏡に似て居れり又埴輪中の婦人には西洋風の束髪に爲したるものもあり歐米人の裝飾とせる耳環指環腕環の如きも上古既に使用し居たれば芝公園を始め肥後國玉名郡江田村三河國寶飯郡豊秋村伊豫國温泉郡東中嶋村其他諸所に於て掘出せり又埃及に於ては高貴の人の屍を永く存せんが爲め樹脂香料等にて詰め木伊乃と爲し其棺には人首獸身の像を彫刻し我邦にては高貴の人の屍を朱を以て詰め永く腐敗せざらんとを欲したるのみならず狗首人身の像を陵墓に樹たるとは何人も知る所あり又風俗に就て言はゞ神代にはあらざれと千數百年前の遺物として正倉院に在る散樂の圖を見るに其過半は近頃西洋より來り好評を博したるチャリネの曲藝に似たるものもあり又延喜時代の唐櫃にある散樂の中には今の玉乘りに類したるものもあり其他内外の宗教を研究するに大同小異なれば人類は皆天御中主尊の造り給ひしところにして愈々益々其根原の一なるを信す

又曰く世に大國主尊時代の遺物と稱す鐘は博古に載する周の大編鐘狹耳鐘に相似たるを以て或は支那より渡來したるものにはあらざるかと曰ふ者あれど

アフリカ土人の持する鐵鈴も鱒ありて其形を同うせは偶然相似たるものからん祭器も大和國高市郡及び陸奥國龜ヶ岡等より掘出したる土器中に孔子所謂鐘豆と其形を同うするものあり考古學者中には龜ヶ岡より出づる土器を石器時代の遺物ありと曰ふ者あれと龜ヶ岡は神代より人皇代に至る迄甕を製造したる所なるを以て甕ヶ岡と稱せしを後に龜ヶ岡と改めしものなりといふ説あり尾張の儒臣冢田大峰は龜ヶ岡より出づる甕及び朱器を神武天皇東征の時の遺物と云へり

二尊天浮橋に立て天沼矛を指下し礮取盧島を生成し其島に天降して天御柱を立て八尋殿を造り夫婦の道を行ひ水蛭子を生み葦船に入れて流し次に淡島を生み給ふも子の例に入れす

新井君美曰く天浮橋といひしは海に連るの戦艦をいふなるべし國土を生成すといふは土地を開拓といふか如し

久米邦武曰く蛭兒は薩南より島嶼星羅して琉球臺灣澎湖に連り西は福州と對峙し南は呂宋聯島(ヒリッピン)より廣東に控ゆ是れ皆三土(日韓閩)へ往來舟路の連紅とありたるものなれば支那の東南岸より南洋群島まで日本人の遺したる



蹤跡は必ず所々に存し他日探檢に上るならんと信ず憶ふに諾尊の時彼島嶼中に立脚地を定めんとの計畫ありければ便要の地を得ざるを以て艦隊を仕立て、適宜に任せられし譬喩あるべしといふ余が蛭兒の見解あり此説を發表してより幾程もあくして臺灣も我版圖に屬し而して浙江福建地方に日本人の遺跡を發見するに至れり

利之曰く古事記に二尊天降りて天の御柱を見立て八尋殿を見立て給ひきとあるより子水蛭子を生給ひき此の子葦船に入れて流し去るとあるに至る迄の大意を考ふるに天の御柱を見立てとは大本營を立て汝身はいかに成れる吾身は此くあれば云々して國土を生成さんとは互に其足らざる所を補ひ助け即ち協心同力してタッヨヘル國即ち騷擾せる人民を鎮撫せんとの事なりミトノマゲハヒあせと契りしは一は大本營の右より出發し一は左より出發して鎮撫に赴き再び大本營にて出會せんとの約あり此時冊尊先きに歸り諾尊後ちに歸るを以て冊尊先づアナニヤシエヲトコヲと言ひ諾尊後ちにアナニヤシエヲトメヲと言ひしは今日俗語を以て言はゞ噫嬉しかつた夫が無事で噫嬉しかつた妻が無事では調子に同じ即ち互に萬歳を唱へたるものあらん何事も男が先きだつべ

きに女が先きだちしゆる不祥とせり然れどもクミドを興して子水蛭子を生給ひきとは今回は夫婦同道して海上の鎮撫に赴きしも好結果を得ざるを以て更に天神に白し男女尊卑の別を明かにし再び六島八州を鎮撫したるものならん又曰く天浮橋は即ち船を指したるものあり橋は是地より彼地に渡る爲め水上に架するものにして浮橋は即ち船にして是地より彼地に渡る具あり一説に船は水上をウキテハシルゆる浮橋と記したりともいふ

二尊相議し今吾生みし所良らず天神に白し天神の命を請ふへしと天神の意をトへて更に伊弉諾尊は左より伊弉冊尊は右より天御柱を廻り伊弉諾尊先づアナニヤシエヲトメヲと唱へ伊弉冊尊後にアナニヤシエヲトコヲと和し男女の大道を修め給ふ

林道春曰く二尊の唱和は和歌の嚆矢にして定家卿は歌道秘中の秘と云へり新井君美曰く我邦禮儀の始は伊弉諾伊弉冊二尊が天御柱を左右より廻り男先きに唱へ女後に和し男女尊卑の別を序つるに因る

岡本監輔曰く二尊唱和の言は是れ我邦歌謠の權輿と爲す一書に言へるあり曰く陰神便ち陽神の手を握ると手を握るは蓋し古俗なり後世約を立て變せざる



をチキル(契)と曰ふ即ち手握るなりヲとチと音相通す

小中村清矩曰く拜禮するを古くヲロガムと云ひ略してヲガムとのみ云へり釋  
日本記に公望私記云拜は是乎禮加々無也是可折屈身体而敬禮也と見ゆるに  
て語釋明らかし今世俗にヲガムと云は只掌を合す事と心得たるは佛法の拜よ  
り云へるひか事なり古き祝詞や萬葉集の歌に鹿自物膝折伏とあるは鹿の如く  
兩足を折屈むるを云ひ鶴自物頸根突抜とあるは鶴の頸を水中に突入るゝ如し  
首地に至るを云たる者にて何れも敬禮の狀あれば今世俗の兩手を突て脆伏す  
る拜禮は上古の儘に傳はりたる遺風と云べし

本居豊穎曰く禮は我國でイヤと云ひイヤとはウヤと云ふと同じでウヤマフと  
云ふ意味で日本紀などに禮と云ふ字を書てウヤと假名の附てある所がありま  
すウヤマフはイヤマフとも云ふて兩様用ゐます我國の禮の種類を分ては神よ  
奉仕する事祖先を尊ぶ事結婚の事葬式の事次に衣食住の事又送迎の禮と人を  
敬ふて侍者を定むる禮が有て大概完備して居ります然るに我國は野蠻で禮義  
も何にも無かつた支那人から教られたものであると思ふ人があるは誤りであ  
る神に奉仕する爲めには神社といふものを建てノット(祓)を上げ又初穂を上げ

るといふは今日でも行はれますが稻の穂の一番初めの分を奉つたものである  
夫れから何品でも先さに上げるものをお初穂といひます祖先を尊ぶ事は神  
武天皇が祖先を祭りて大孝を申ふと日本紀に書てある結婚の事は伊弉諾尊が  
伊弉册尊をお迎になつた時宮殿を建てにあり是れが根源で次に素盞鳴尊が  
稻田姫をお迎になつた時も八重垣といふ宮をお造りになりました總て嫁を娶  
るには新に家を造るといふが上古の禮で後世嫁の事を御新造といふ尤も東京  
あぞでは若い女を新造といひますが是れは新造にある人といふ所から變じた  
ものでありませう夫れから結婚に物を贈るといふとがあつて後世では是れを  
結納といふ此古例は瓊々杵尊が木花姫をね迎にある時百人持の品物を贈られ  
たといふとがあります百人から人足の掛る程澤山な品物を贈られたのであ  
ります葬式の事は天若彦が死したる時喪屋を造りて其内に入れ置き其れから  
葬式の役人を定めて持傾頭者といふて死者の食物を載きて行く者あり哭女と  
いふて哀慕を表する爲め泣く者あり持幣といふて葬所を掃除する者あり其外  
死者を喪屋に入れて八日其所に置いて音楽などで慰めをするのである垂仁天皇  
の時土人形を造りて死者に供へたも禮の一つであります衣食住の事は天照大



神が機を織り祭服をお拵いになつたことがあり大國主尊が瓊々杵尊を御饗應なさる時櫛八玉神を膳夫として態々筑紫の海の底を掘つて清き土を取り器物を造り燧白にて火を鑽出し煮焼して奉り後世にても貴人に對し食を供ける時に必ず其例にて共に食に與かるとがあります上古は稀しい家を建つるとが一つの禮でありましたゆゑ神武天皇が九州に御出でにあつた時一本の柱の家を建て、天皇を迎ひました夫れから客を迎ふ時に居所を三つ設けて迎ふ禮があります又拜をする時拍手の禮に就ては面白き話もありませんが他日に譲ります田口卯吉曰く舊事紀は天祖伊弉諾伊弉册二尊に詔して曰く豊葦原千五百秋瑞穂の地あり汝往きて之を修むべしと舊事紀に所謂天祖とは天祖天禰日天狹露國禰月國狹霧尊と云へる長名を有する神なり神皇正統記は此天神を解して天御中主尊とも申し又國常立尊とも申す神ありと云へり故に余は古事記の所謂天神はタカミムスビに非ずカミムスビにも非ずして一種の靈妙ある天神ありと認むるもの至當なるを信するあり蓋しイザナギイザナミ以下の尊達の中には一種の純粹なる天神の信仰ありしと思はるゝ日本書紀が之を削りたりたる宣長の所謂漢意にて正しからず然ども宣長が此天神をタカミムスビ、カミム

スビに歸するは更に非あるとなり

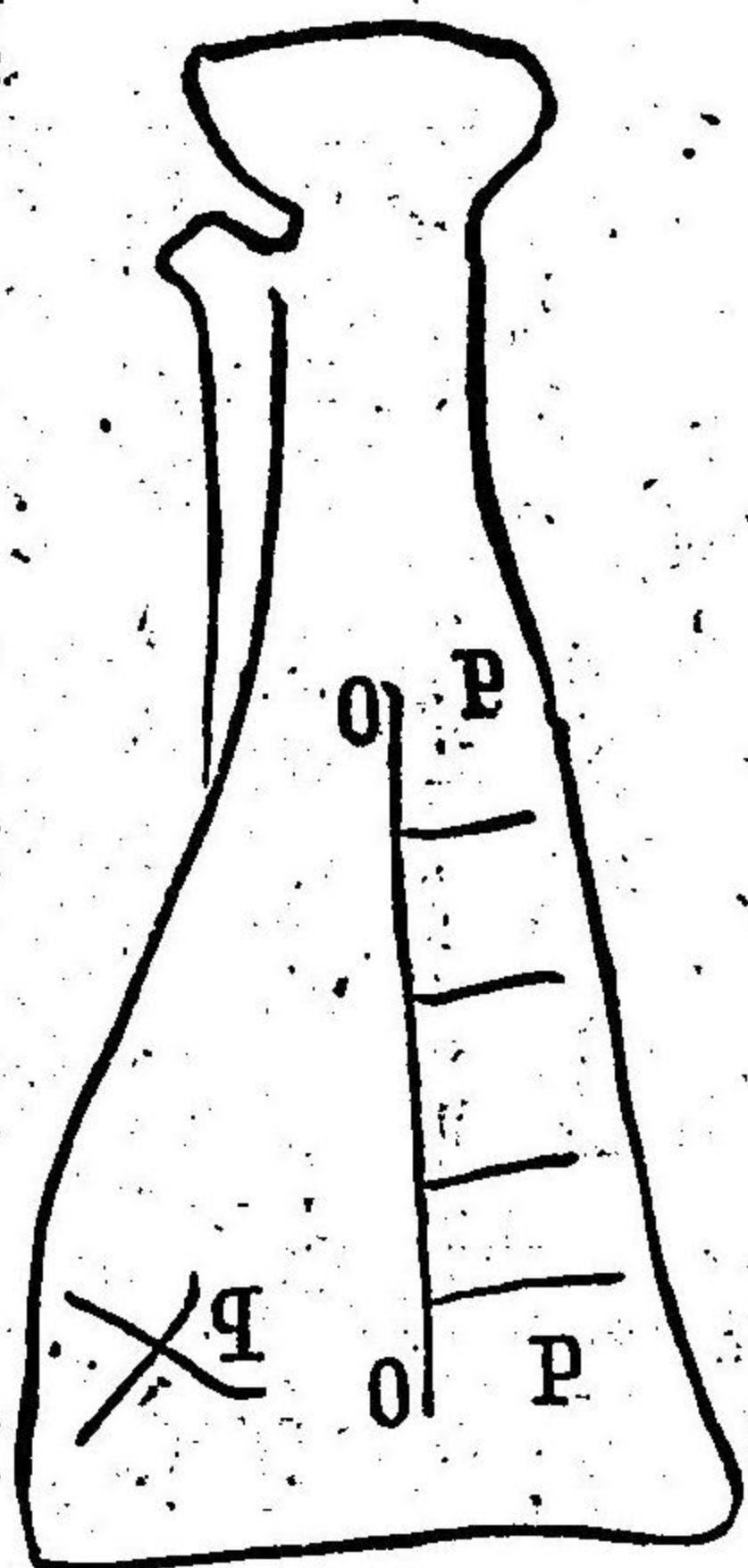
又曰く余は嘗て米人ロツクヒル氏の西藏紀行を讀み私に蒙古肩骨占法の我が邦太古の太占ホウシに類するあるを思ひ考證せんと心掛け居たりしに去月喇麻教の貫主阿嘉氏が東京に來たられしときは是れ幸機ありと思ひ同書を齎らして氏を淺草本願寺に訪ひたりしが幸にも阿嘉氏は蒙古西寧の人にして同行の諸氏も皆蒙古人なりければロツクヒル氏の紀行に示せる地方の事實の證人としては最も適當なる人にてありしなり余は此紀行書中の圖書を示して其實否を質したりしに蒙古には今日も尙ほ此の占法の行はるゝことを答へたり因りて左に譯出して江湖諸彦の參考に供することゝあせり次に記する所はゼルマンのクレム氏の著書より採萃せしものなれども余が實驗せし所に符合するものあり但し骨に於ける火折カハカの解説は其の事情若くは目的に従ひて變すべきものあれば必ずしも此に記する言辭に限るものにあらず

第一圖は右肩の上面を示すものにして其の表示する所左の如し

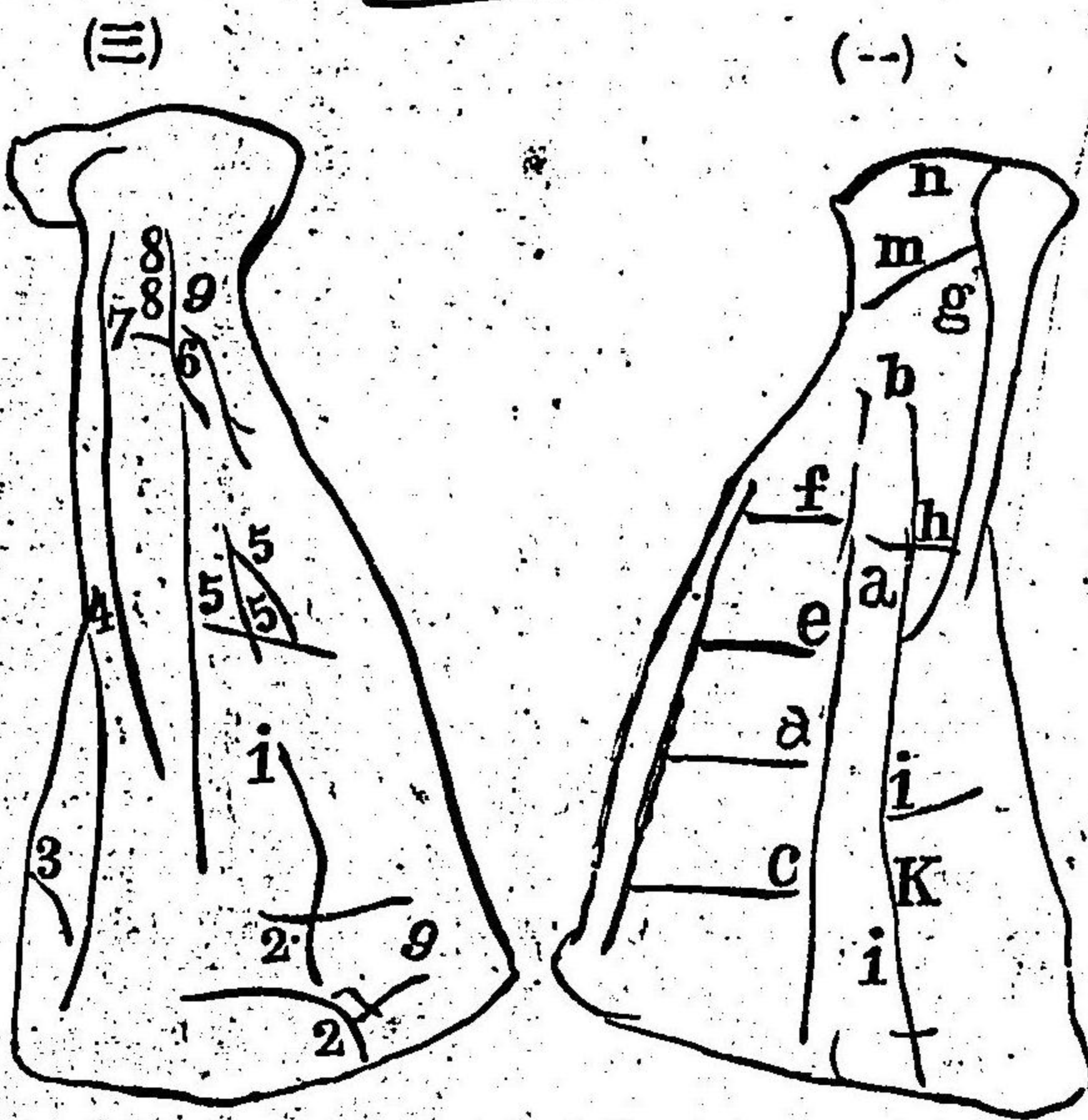
(A)「生命安全」生業の針路にして次に記するが如き障礙及び事件を伴ふものあり



骨占火折の圖



(二)



(一)

(三)

(b) 特別の障礙若くは災厄 (c) 王の薨去 (d) サイサンの死 (e) 平民の死 (f) 奴婢の死

(g) 急速なる幸運

(h) 緩慢なる幸運

(i) 極めて緩慢なる必す来るべき幸運

(k) 鞍の下尾帶、障礙及び遅延

(l) 戦争及び狩獵の線若し火折が兩側の隆起に於て合するか若くは合

せざるときは分隊の會合若くは分離狩獵の多獲若くは不獲を示すなり

(m) 孔、病人の死者、は失亡せる家畜の歸來

(n) 藥罐、連續せる腔、其の中の符號により貧富を示す

第二圖は肩骨の下面側を示す茲にも火折の注意すべきあり即ち左の如し

(oo) 惡魔、災害

(PP) 善靈の援助

(g) 新事件なり火折單一なるときは來る遅く交叉するときは來る早し

第三圖は他の肩骨にして火折は病牀の變化を示すなり

(1) 生命安全、

(2) 生に導く路、

(3) 襲撃の兆、

(4) 幸運及び生命の繼續、

(5) 近傍に惡魔の在立せる兆證

(6) 此等の惡魔に反抗するの兆證



(7)病人の至急の全快

(8)病症危篤ならざれども急に全快せざる兆證

(9)善靈の火折

以上はロツクヘル氏の紀行の解説を譯せしなり日本書紀、古事記等に因るに太古伊弉諾、伊弉冊の二尊を始め太占を下へ玉ふこと多し殊に天の石屋戸の段には天の香山の眞男鹿の肩を抜きて天香山の波々迦ヒカを取りて占へまかなはしめ玉へることあり太古に卜部と云へるは太占を行へるものなるべし中古支那龜卜の法傳はりて後其の法全く滅して傳へざるもの、如し伴信友の正卜考に曰く太古の卜事は男鹿の肩骨を灼きてものする卜事になむありけるさて其の布斗麻邇と云ふ義は布斗は稱辭麻邇は尋常に麻々と云ふと同じほどの言にて此にては神慮に任せ神の慮に隨ふ意なり(中略)さて布力麻邇に卜へてとは鹿肩を灼きて神慮を下へ問ふに——かく體を畫きて其れに繋れる火折に依りて神慮問決むるによりてやがて其の體を神の麻邇の顯はるゝ處と定めて布刀麻邇に卜へてといへるなり伴信友の正卜考の考證は例の如く精密なりと雖も後世龜卜に行れたるものを以て太古も斯くあらんと想像して定めたるものなるべければ果して此の如き火折なりけんかは疑問に屬す或は蒙古に現存せる肩骨占法の却て太占に合するやも知るべからざるなり余は世の此の點に知識を有し趣味を有する人の考究を希望して斯くは掲載せり

湯本武比古曰く太卜は意見心証の明ならず如何に行爲して可ならんかを疑惑する時に當り敢て忝まゝに憶斷せず神教を仰て之を決せんとする誠意に出でたるなり

利之曰く二尊の尊信せし天神とは天御中主尊なり本居宣長は別神五柱となし殊に高産靈、神産靈とせるは少しく誤れり又二尊は國家を治むるには禮より先なるはなきことを覺知し二尊既に水上と淡島を治むるも禮の盡さるる所あるを以て好結果を得ず故に更に禮を修めたるものなり世人二

尊の柱の左右より廻るを以て夫婦の禮の如くのみ思意する者あれど此時禮の最も大なるは敬神、結婚、出産、死亡、禊等あり而して夫婦の禮は陰陽の大道にして男女、老少、貴賤、貧富、上下、尊卑、強弱の別皆此中に在り故に國家の經營は是より始まるものなり

又曰く一書に二尊天の浮橋に立てる時鶴鶴來り男女の道も教へたりとあるは二尊大船に乗し海上を航せし時茫々として目的とすべき所なきも偶々鶴鶴の來るを見て近く島嶼のあるを悟り遂に國土を發見したるものならん又考古學者中には我邦古代の歴史を見て生殖器崇拜の風ありといふ者あれども此は新奇を衒ふ者と謂ふへし何となれば歴史は善惡を交々載するものなれば其一部を指摘して云々する時は何なる議論も涌出するを得べし譬へば人の一身を捉來つて之を檢せば美麗清潔なる所もあれは醜惡汚穢なる所もあるへし其醜惡又は汚穢なる一部を指して人身は醜惡又は汚穢なりといふは群盲相象と同日の論なり

又曰く世に博士田口卯吉の書を見て直に我太卜は彼れより傳はりしもの、如く思ふ者あれど是れは大なる誤りなり或は我が太卜か彼れに傳はりしやも知れず何となれば本に亡ひて末に弘まりしもの尠からず現に佛法の如きは印度に亡ひて支那、日本に弘まり儒教の孝經の如きも支那に亡ひて日本に存在したり故に歐陽修の日本刀の詩に經籍の彼れに亡ひて日本に存するものあることを言へり

二尊生給ふは淡道穗之狹別島、次に伊豫之二名島、次に隱岐之三子島、次に筑紫島、次に伊岐島、次に津島、次に佐渡島、次に大倭豊秋津島以上を大八洲と曰ふ然る後に兒島、小豆島、大島、女島、智訶島、而兒島を生給ふ之を六島と曰ふ

久米邦武曰く諸冊二尊の大八洲を生給ふとは日本書紀の一書に循とも書れて二尊の親しく循撫さるりし比喩なるのみ



利之曰く此生み給ふは治め給ふ意なり古事記に島は身一にして面四つあり面毎に名ありとほ面は  
飯字にて重なる所即ち都會なり又大八嶋の中大倭豊秋津島を最後に生給ふ如くあるは國廣くして  
治むるに最も後れたるものならんとの説あれと紀には豊秋津島を第二に生み給ふとあり紀の方正  
なるべし

既に國を生竟て更に神を生す其名は大事忍男命、石土彦命、石巢姫、大戸日別命、天吹男命、大屋彦命、  
風木津別忍男命、次に生す大綿津見命は海を司り速秋津彦命、速秋津姫は河海を司り志那津彦命は風  
を司り久々能智命は木を司り大山津見命は山を司り野推姫は野を司る次に生すは天鳥船命、大宜都  
姫、火迦具土命、金山彦命、金山姫、埴安彦命、埴安姫、彌都波能賣命、和久産巢日命なり伊弉册尊、火迦  
具土命を生む時爰て遂に神避りましぬ故に比波山に葬し奉りき是に於て伊弉册尊大に怒り天の尾  
羽振と稱す十拳劍を抜き迦具土命を斬り給ふ其血に因て成生せるを石拆命、根拆命、石筒男命、建速  
日命、建速日尊、建御雷男命、開游加美命、開御津羽命と曰ふ迦具土命の屍に因て成生せるを正鹿山  
津見命、游藤山津見命、奥山津見命、開山津見命、志藝山津見命、羽山津見命、原山津見命、戸山津見命  
と曰ふ

利之曰く火迦具土命を生む時爰て遂に神避りましぬとあるは册尊火迦具土命を鎮撫せし時彼れ  
抗したる爲め苦戦して重傷を負ひたるを誤て崩御せしものとなしたるにはあらざるか諸尊大に怒  
り火迦具土命を斬り其血に因て成生せるを石拆命以下と爲すとは諸尊の勇武に恐れて服従せしも  
のなるべし火迦具土命の屍を八斷(紀の一書には三斷又は五斷とあり)し其屍に因て成生せるとあ  
る正鹿山津見命以下は火迦具土命の部下に八人の勇士ありしも是又諸尊の勇武に恐れて服従した  
るものならん

伊弉册尊は伊弉册尊を慕ひ相見んと欲し喪屋の在る所に至り見れば既に死せしと思ひし后未だ死せ

されは大は喜び喪屋の隔より之を見て我が愛する所の后よ吾と汝と治めし國未だ治め竟へすわれは  
還り來れと詔給ふ伊弉册尊答給ふに悔しや君には速く來給はす然れども我が愛する所の君か來給ふ  
事畏ければ還るへけれと一度喪屋に入れば穢ある故從者と議り其穢を清むる間暫く待給へと室内に  
入り坐せる間甚久くして伊弉册尊待つ間に雷鳴り來りたれば畏れて逃返れり伊弉册尊病後の醜体  
を見られ且耻ぢ且恨み侍女及び從者をして之を追はしむるも伊弉册尊は黄泉比良坂に到り之を追返  
せり是に於て伊弉册尊自ら追來りたれば伊弉册尊は大石を障へて相對立し事戸を度す后は我が愛す  
る所の君なるも此くの如き事をなさば吾は君の治める國の民草を一日に千人つゝ殺さんと詔給へは  
伊弉册尊は汝千人を殺さば吾れは一日千五百人を生みなさんと詔給へり此黄泉比良坂は今の出雲の  
伊吹坂なりと云ふ

利之曰く事戸を度すとの事に就ては種々の議論あり夫婦の交を絶つと云ひ或は然らずと云ふもの  
あり余は紀の一書并に其他の書を參考するに夫婦の交を絶つ者にあらざることを斷言す事戸を度  
すとは曩きに誓ひたる言を取消すとの意味ならん曩きに誓ひたる言とは「吾と汝と共に國を生成  
さん」との約束を謂ふ何となれば二尊國を治むる中途にして火迦具土命の災に逢ひたれと此時既  
に國は十の七八は治まりしものならん然れども諸尊は尙ほ册尊と共に國を治めんと念甚だ深け  
れば遂に黄泉に赴き册尊を見て吾と汝と治めし國未だ治め畢らされば速に歸り來れと詔給ふも此  
時册尊は到底回復の見込なきを以て諸尊は遂に「吾と汝と共に國を生成さん」との誓を取消し諸尊  
獨りにて國を治めんと意を示したるものならん是に於て册尊は君か一人にて國を治むるならば  
吾は君の治むる所の民草を一日千人つゝ殺さんと云ひ諸尊は汝千人を殺さば吾は千五百人を生せ  
んと答へたりと此一段は臆言と見て可なり何となれば紀の一書に諸尊か泉津平坂に册尊と相闘時  
册尊は泉津守道といふ者をして吾と汝と既に國を生みにき奈何と更に生むとを求めん吾は此國に



留り共に去るへからすと云ひ是時窮理緩をしても亦白す言ありしかは諸尊は聞て之を嘉みし乃ち散去りぬとあり又紀の本文に據れば二尊は既に大八洲及び山川草木を生み畢りたれば天下に主たる者を生まさるへけんやとて相共に議し大日靈尊月讀尊素盞鳴尊の三貴子を生むとあり之に因て之を見れば二尊の相別るゝや決して夫婦の交を絶つか如き不快の感情を懷き別れたるものにはあらざるへし

伊弉諾尊は穢き國即ち喪屋の在る所に到りたりとて身の禊を爲さんと日向の橘の小門の阿波岐原に到り御衣、御禪、御冠、及び手纏等を脱し禊を爲し給ふ其時の從者は衝立船戸命、道長乳齒命、時置師命、和豆良比能宇斯能命、道候命、駒作宇斯能命、與疎命、與津那藝佐彦命、與津甲斐辨羅命、邊疎命、邊津那藝佐彦命、邊津甲斐辨羅命、の十二柱なり

栗田寛曰く上古忌部連あり其屬に忌部あり以て神祭に仕奉る其齊戒沐浴すへて清潔ならざるとなし故に忌部と號せり後世巫祝の禊事を修むるも亦其一端なり清淨の習慣は神事を重んずるより起ると知るへし

湯本武比古曰く被禊は汚穢のものを拂ひ去り身を滌きて清淨潔白の身となし心となるとの所爲なり即ち改過遷善の法なり

チャムパーレン曰く現時日本人は亞細亞大陸の隣邦人と殊にして身体を清潔にすることの美き習慣あり其上代に於ては現時の如くならずと雖も既に此習慣は上代に胚胎せりと見たりそは屢々河水に浴せしと又皇子に侍して浴湯の事を司とる湯母のありしと其他禊を行ふを以て宗教儀式の一とせると是等によりて上代早く身を清潔にする慣習ありしと明かなり

利之曰く上古は一人にして數名を有せし者多し大國主尊が八千矛、顯國玉、葦原醜男と云ひ神武天皇が若御毛沼、豊御毛沼、神倭磐禮彦と云ふか如く實名もあれば或は他人より對する尊稱もあり或

は地名若くは勳功を代稱したるものもあらん博士小中村清矩か上古はカバネ、ウヂ、ミヤウシの三あるとを論し其内職名を三の一に爲したる者もありと云へり今歴史に在る以上の神々の名は最も世に廣く行はれたる所を記したるもの多かるべければ一考すべし事なり

伊弉諾尊は水上に立ち上瀬は迅し下瀬は弱しとて遂に中瀬に入り滌き給ふ此時洗ひたる汚垢に因て成生せるは八十禍津日命、大禍津日命、神直日命、大直日命、伊豆能賣命、底津綿津見命、底筒男命、中津綿津見命、中筒男命、上津綿津見命、上筒男命、此三柱の綿津見命の子孫を阿曇連と曰ふ

利之曰く古事記に汚垢に因て成生せるとあるは惡神なるを謂ふ此八十禍津日以下も前項に説く如く征討に因て歸順し又は征討の際の從者ならん

### 地神五代

大日靈尊は伊弉諾尊の長子なり始め伊弉諾伊弉冊二尊國を生み既にして二尊相議りて曰く何ぞ天下に主たる者を生まさるべけんやとて遂に大日靈尊を生み次に月讀尊を生み次に素盞鳴尊を生めり伊弉諾尊大に歡喜して御頸に掛給ふ所の珠を大日靈尊に賜ひて汝は高天原を治めよと詔給ひ月讀尊は夜食國を治めよと詔給ひ素盞鳴尊には海原を治めよと詔給ふ素盞鳴尊泣て母の國根の堅洲に居らんとを願ふ伊弉諾尊大に怒り然らば汝は此國に住せし海外に行けと詔給ふ伊弉諾尊は淡海の多賀に坐ませり

伊勢貞丈曰く神道者の説に高天原と云は虚空を云なり天津神は天上に住し給ひし故に天神と云といへり是れ非なり高天原は本より天を指て云ふ何れの國にてもあれ我國の君のおはします都をは天になぞらへて高天原と云ふなり後世禁中々雲の上と云に同じ大和國葛上郡に高天山高天社あり此山野ともにおしなべて天照太神のおはしませし都にて此所をすべて高天原といひしなるへしこれはいかにといふに同國十市郡に天香山あり高天原も天香山も同國なる故天照太神の御時は天香山



山の産物を採り用ひられしなり天香山の眞坂樹天香山の婆々迦天香山の眞男鹿天香山の金天香山の銅天香山の柁木等是なり又天照太神天磐戸に入ませし時八十万神を天高市に會して之を問ふと日本紀一書に見えたり大和國に高市郡あり是其所なるべし此等を以て合せ考るに天照太神の都高天原は大和國高天山高天社なること疑ふべからず

吉見幸和曰く高天原は地名にして大和國高市郡に在り後世伽藍を建て、高天寺と號す是地名を以て稱する所なり蓋上古皇居を高市郡に建つ天照太神斯に即位し玉ふ故に天に比して其地を高天原といふ後世皇居を天帝の紫微宮に象り紫宸殿と稱し公卿を月卿雲客といふか如し

新井君美曰く舊説に根國は黄泉の名なり地下をいふ由見えたり心得られず根の堅洲國とは出雲國をさしいふに似たり伊弉册尊彼國におはしませし事は彼國の風土記にも見えたり古語に山を根といひけり上世の時に根の國といひしを後に山陽山陰の國といふ古今の言同しからねとさしいふ所異れるにはあらず

栗田寛曰く古へ黄泉國といへるは伯耆出雲の二國に跨れる夜見島の地なる事いよく明なれば死人の往て居る國にあらざる事を知るべし斯く知られたるを以てよく思へは妣國根之堅洲國と云へる妣國は伯耆國にて根國は即出雲の島根郡を云へるにはあらしかと思はる、斯く思ひよれるは吾がさどりの至れるにはあらず本居翁か記傳の註文に其よしをさし示されたるによるものなり

久米邦武曰く古事記に神武天皇の御兄弟を記して御毛沼命者は跳波穗渡坐于常世國稻氷命者爲妣國而入坐于海原とあり常世は即ち夜國なり海原は妣國にて即ち新良貴なりまた東の蝦夷を日高見國といふにて考へ合すれば高天原は中國にて常世は西方日没の地をいひ海の向岸を海原といひたるにて皆國土の名稱にはあらず天照太神の中國に君臨し給ふを日神に喩へ月夜見尊の西土に君臨し給ふを月神に喩へたり是れも詩想的に其光景を抽象したるにて渴仰の意念を深くすれと

歴史としては事實を聞となしたるを憾む常世國總て西方の大陸地を指す新撰姓氏錄の右京蕃別に常世連燕國王公孫淵の後とあるは遼東地方の人なれとも固より泥む足らす余は田道間守か非時香菓を求めたる常世と同地にて福州又は廣東地方ならんと斷定す海原は同書左京皇別に新良貴稻飯命之後也云々とあり新羅國をいへる鉄案となすべし

高木敏雄曰く余は素戔嗚尊の名稱を説かざるべからず尊の完全なる名稱は多氣波夜須佐之男にして多氣とは勇健の義なり波夜とは迅速の義なり而して須佐とは蓋し進み躍くの義なり一書に進雄と書して須佐之男と訓したるか如き此神の名義中進むの義あるを示すものと見るも恐くは不當の推測に非ざるべし高橋殘夢の言靈神名考は尊の御名に關して建は猛なり速は早なり須佐はすゝあの約すゝは進なり進み顯はるゝと云ふ義なるをさと約めて擴り騒くの義とす進むは一方に進むなりすさは四方に進むなり手すさみ口すさみ等のすさは是なり此神、物にすさみ事業にすさみて猛く速き御神なれば此神號を奉りしなり天に升り玉ひし時の形勢八俣蛇を斬り玉ひし時の形勢根の國にしつもありまして後大己貴神に仰せし事のさま實に猛速須佐之男と號し奉るべき神なり書紀に素戔嗚と書てそそのの尊と訓したるはわろし素はすの仮字なり鼻によりて成ませるの義は人面に顯はれ進みて四方に擴り躍きたるものなればなるへしとの説明をなせり尊の名稱の意義中進むの義あるを愈々以て疑ふべからざるに似たり

是に於て素戔嗚尊は大日靈尊に請ふ所あらんと欲し大日靈尊の許に行かんとせしかは皆其異心あるを慮り國內爲めに動搖せり大日靈尊之を聞き大に驚き戒心して男裝を爲し甲冑を以て身を固め弓矢を以て之を待つ素戔嗚尊其異心なきを明にする爲め女子三人を残し男子五人を大日靈尊に献す故に大日靈尊は素戔嗚尊の佩ける十拳劔を三段に打折りて女子三人即ち多紀理姬命、市寸島姬命、多岐都姫命に一個宛を與へ父子共に永世叛く可からざる事を盟はしめ又男子五人には左髪に纏せる珠を正



勝吾勝々速日天忍穗耳尊に右髪に纏せる珠を天菩比命に懸に纏せる珠を天津彦根命に左の手に纏せる珠を活津彦根命に右の手に纏せる珠を熊野久須毘命に賜ひて己の子と爲し給ふ天菩比命の子建比良鳥命は出雲國造の祖なり

森三溪曰く素尊の子にして其母の明なる者は大年神と稻倉魂神の大市姫、大己貴神の奇稻田姫のみ他に田心姫、市杵島姫、湍津姫(三神實は同神なり)なる三子あり天照太神が尊の劔より化生せし所と云ふと雖も實は尊が大市姫との間に設けし女なるが如し其証とすべきは山城葛野郡梅宮は酒解神即ち大山津見と其子酒解子神即ち大市姫とを祀れるなり而して其攝社に市杵島姫の社あるは即市杵島姫か大市姫の所生なるを想像せしむるなり

又曰く熊野樟日命は素尊か日神の珠を嚼みて化生せし所と云ふと雖も是亦實は素尊か大市姫との間に設けたる子なるか如し凡て化生など云へるとは信し難き事なり其証とすべきは遠州横須賀の熊野社の社傳に祭神三坐高松社、小金社、横須賀社、大寶元年九月奉遷此所也、高松社者大市姫命、小金社者素盞鳴尊也、横須賀社者即熊野樟日命也とありて樟日命と其父母を祀たる者なるべければ樟日の母か大市姫なることを推知するに足れり素尊の子にして母の不明なるは唯事八十神と須勢理姫神とのみなり

黒川真頼曰く上古の衣服は其製貴賤異ならずして其織物に隨て貴賤の別あり又玉は常の衣服にも若くれと後世は常に玉を着くると稀なり此圖は(圖畧す)本邦上古の衣服の制の大畧なり此着用次第は古事記の神代卷に因て作る所のものなれば我が神代は此の如くなりしとはいふも更なることに神武天皇以後應神天皇の御代の頃迄は此制にて大畧同しとなり其徴は垂仁天皇以來出來たる埴輪の人形往々土中より出づるものあるを見るに大畧此制に違はず然れば此制は神代に起りて久しきと見るべし方今流行の西洋服と大畧異ならざれば西洋服を以て文明の衣服とせば我が神代の

衣服は文明の衣服と云ふべし

又曰く應神天皇の大嘗會の時服し給ふ玉冠は漢土の冕冠に倣へるものにはあらずして本邦の創意のものなり上古は天皇のみならず貴人も玉を飾れる冠を服せしとは明治六年四月肥後國玉名郡江田村にて掘獲たる玉冠を見ても上古の貴人の玉冠を服せしと明瞭なれば應神天皇の玉冠を服し給ひしは疑ひなきとなり然るに古事記傳に應神天皇の時玉冠は有るまじきさまに云へるは上古の開化を知らして云へるなるべし

木村正辞曰く出雲風土記神門部に冠山といふを記して太神の御冠なりとあり此大神は大己貴尊と申すなり是等は古傳と見ゆといへり本居先生は少し疑れたるやふなれども既に古事記の本文にかくあるか上に風土記の冠山の事もあれに太古冠ありしとは決なし

栗田寛曰く星羅碁布の國各其風俗を異にせるは云ふまでもなけれど衣服の衽に左右の差別あるはいかなる事にか支那にて古へより右衽をよきものとして左衽を夷狄と卑しめ云へれど衽の左右に華夷の別あるにはあらて其俗を異にせるより孔子も彼髮左衽の語ありしなるべしかれば西洋諸國の左衽をよしと思へる國にては右衽をあやしむべき理りなれど衽の左右に善惡華夷の別を云は無用の辨なり我皇國も古へは左衽なりける事續日本紀養老三年二月壬戌初令天下百姓右襟とあるにて知るべし是れ書を讀む程の人は皆信して疑はざる所なるが新撰龜相記(此書は天長七年八月十一日卜部長上從八位下卜部遠繼の記とあり)に伊弉諾尊詔云々欲生國土汝命者御柱自右廻之吾者自左廻會とある條の注文に男女の服の左右は此由也と見ゆ此趣を考ふるに女神は右より廻り男神は左より廻り會ひ給ふ謂に就て男は左衽を用ひ女は右衽を用ふる由なり之を以て之を見れば我神聖は孰れを善とも惡とも定め給はずたゞ男女の別を見別つ爲めに此制を設け給ひし者と見えたり然らば我上古の時には男子は左衽にして女子は右衽なりしを養老に至りて支那



の風俗を善として男女共に右衽に改めたるにやあらん安齋隨筆に河内石川郡山中の古墳に墳立たる石人の衣服の体は是我國上古の体ならん歟袖口窄くして衽は右を土重ねたり右石人を見るに我國上古は衣服左衽に若たると見えたり支那の書には左衽を夷狄の風也とて賤しむるは其國右衽にして我と異なるが故に夷狄と見るなり左衽の國より右衽を見れば我と異なるが故に右衽を夷狄と見るなり天道は左旋し地道は右旋す右の衽を上にするは天道に叶へり左の衽を上にするは地道に叶へり左衽右衽は貴賤あるへからず我國の上古右の衽を上にして着たりとて耻へきにあらすと云へるはいとをもしろし此説も龜相記の説を見れば左衽の事をのみいひたるも皇國の左衽右衽と共に用ふるは天道は左旋し地道は右旋するの義に叶へるにやあらん

チャムバーレン曰く上代の日本人は衣服に一種の制ありしと又其用法ありしを見れば昔時既に服制の大に進歩したるを知る既に上代の傳説中に上衣、裳、褌、帶、被衣及冠などの事を見たり又男女共に當時寶石を貴重し是を以て造れりし頸飾、腕飾、頭飾などを以て装へるをも記せり此事に於ては其子孫たる現時の日本人は大に異なりて絶て寶石などを飾るとなきは全く反對の風なり又櫛の事も古書に數多記されたりされば頭髪は飾ひに就ては當時殊に注意せしと知るべし此頭髪は男兒は頭の頂に於て結び成人の男は二束に分ちて頭部の左右に結び女兒は垂髪にして頸に下げ其既に嫁したる婦人は此若き男女の二方を合せたる如き状になせり頭髪を載りまた髻を剃る杯とのとは懲戒法の外古書になきことなり又此頭髪は男女異なれども服飾の風は別あるを見ず利之曰く諸處にて掘出せる金環は頭髪飾りなりとの説多く又耳環なりといふ者もあれど帝國博物館に在る金環の中には徑三四寸のものもあれば是等は腕環に爲したるものによ

御衣を織らしめ給ふ時に素盞鳴尊天斑馬の皮を剥きて投入したれば織女驚き誤て梭にて身を貫き死したり

富田鐵之助曰く天祖高天原に御坐して五穀の種を得給ひ是は現しき青人草食て活へきと詔て其種を天の狭田長田に殖し給ひ其後大嘗の殿に御座して新嘗開食し給ひき大嘗の名此に始まる凡そ天皇位に即き給ひて天神地祇を祀らせらるる之を大嘗と云ふ後世に及び世毎に行はせらるるを大嘗と云ひ年毎に行はせらるるを新嘗と云へり

栗田寛曰く天照太神光花明彩の徳を以て高天原を御するや先づ蒼生を生活する事を專にし肇めて万民衣食の原を開き御田の稻、織殿の繭を天下に布き大嘗さこしめし又神衣を織らしむ是に於て大嘗、神衣の稱見ゆ蓋天祖の天神を祀て衣食の恩を報ゆる所以は乃ち報本反始の義此に起れり神武中州を平け都を橿原に奠め皇祖天神を鳥見山に祭て大孝を申るは即ち天祖の行玉へる報本反始の道なり列聖相承けて祝典を重んじ誠敬を盡す而して踐祚大嘗の祀尤重しとす大嘗とは新穀を嘗て天祖及天神に薦むるを云ふ穀は天祖の種る所皇孫の下土に降る時に齋庭の穂を授るは民に食を尤重すべきを知らしめせはなり

又曰く伊勢神宮の祭儀に古代の風を傳へたる日祈の神事あり此祭は旱損の患あきことを祈るにつけて籩笠を神に献るあり天祖天照太神尤も意を農桑に用ゐる玉へり故に現今に至て其故事を存せりと見ゆ

伊藤圭介曰く我邦に現存する植物中には固有の品と支那朝鮮其他異邦より舶齎したる品とあり而して稻は古代より有しと明かなり稻は日向の高千穂三田村宇三橋と云へる地に自生すと友人豊前の人賀來飛霞氏親から其地に至り土人に之を問ひしに三橋の巖石上に小池の狀を爲したる凹處あり常に水を湛へたり之を不蒔の田又は彌勒の田とも云ひ此池中に自生の稻あれども必しも毎年之



れあるにあらず時として自生するところあり生する時は之を探て其地の神社に献すと其池は同氏も亦之を目撃せりと云へり

六十四

湯本武比古曰く天祖は粟稗麥豆を陸田種とし稻を以て水田種とし又養蚕の道をも始め給ひたり大久保利通曰く天祖瑞穂を以て蒸庶を恵む而して我神州は農を以て國を爲す我民は實に耒耜に閑へり泰西の我國事を記する者言へるあり曰く經驗の久き能く國民が瘠を變して沃と爲すの術を知り山谷氷雪の間にも尺寸の遺地無からしむと蓋し過辭に非ざるなり増田于信曰く天照太神高天原を治む頃には皇都の近邊は大に開化の度を進め素盞鳴尊大國主尊の地方を開拓するに及ては邊土に至る迄人民大に利澤を蒙れり其土地は今の畿内を本として紀伊伊勢より東は信濃尾張邊北は三越西南は山陰山陽及四國九州邊より琉球朝鮮へかけ既に開化したる而して衣食住耕織漁獵船車器具より冠婚葬祭醫卜音樂歌舞に至る迄一として備はらざるはなかりき衣服は天照太神桑を植へ蚕を養ひて以來絹布の織物あり又穀麻栲布等の類あり其横條を織り成せるを倭文布といふ色は赤あり青あり黒あり多くは草木の汁を以て染めたり食は五穀を旨として鳥獸魚介の内より野菜に至る迄何れも烹炙せり又酒あり其器具は多く陶器を用ひて之を葉盤、平瓮、甕、手扶瓮など稱す皆机を以て基とせり其盛饌を供ふるを百取りの机代物の饗といふ住には宮室あり木造にて柱梁戸窓の類迄備はれり但し柱には礎石を用ひすして直に地を掘りて之を立つ屋は茅葺にして上に横木を置く之をチキといふ今の伊勢太廟の構造の如し古語に其宏大なるを稱し「底つ磐根に宮柱太しく立て高天原に千木高しり」といふ即ち是れなり下民に至りては或は茅屋に住み又石室を作りて住むもあり耕織漁獵の治は早く開けたるものにて高天原に天狹田長田を以て御料の御田と爲し太神は齋服殿を立て、自から神衣を織り給へり邊土の人民は専ら漁獵を事とし漁撈はは船網あり遊獵には弓矢を用ひたり車には天羽車あり船には二枝船椽樟船の製あり又馬あ

りて乗駄に用ひる器具には鏡玉あり玉は曲玉とて之を糸に統へて飾りと爲す兵器には銅鉄又は石扁を用ひる弓矢の外十握劔、頭槌劔あり瓊矛、廣矛、鞞、楯あり

鈴木真年曰く杵は神世より之を造る越後國彌彦神社の神實は神饒連日命の著用せし杵なりといふ(圖別項にあり)

宮地嚴夫曰く或人の話に往年仁徳天皇の陵より古代の甲冑及び硝子の皿の如き物の出し事か有りて親く之を目撃せしに固より千數百年を経過し來れる者なれば甲冑などは朽損したるは申す迄もなけれど其精工なりしものと見ゆるには實に驚きたりとの事でありました又橋春暉か北窓瑣談卷の四に安閑天皇の陵を掘きし時其中より取出せし玉碗今に西琳寺の什物として傳へたり余先年はを見しに三合許りも入る可き碗なり飯水精の潔白なるものにて造りたるなり硝子玉の潔白にて眞に水精の如くなるは此四五十年許り以來紅毛國にて新に造り初めし物にて日本にて器物に持はやすも澤山なるは近年の事なり唐土にても日本にても未だ白色の硝子玉は造る事能はず然るに安閑天皇の時分既に硝子玉ありしはいと不審なる事なり西域に通船ありて舶來の物なりや又は日本にて良工ありて其頃は造り得しや是にても時代に古今無き事知るべし人物の大きさも古今同く智慧情欲も同じ事古も今の如しと云てありますが是と合せ考ふべきは三輪田高房の話で明治八年同人が大和國石上神宮の少宮司にてありし時同神宮の裏手の山より夥く曲玉を出し事がありしに其中に正しく硝子の鑄物と見えて其鑄合せ目の能く分りてあるを親く見しとのとてありましたが此に限らず所々より出る曲玉の中には硝子製のものが随分多くあります彼玉碗と云ひ此曲玉と云ひ實に奇むべき事にて到底我國の上古には既に是等の發明は出來て居りしと見るの外は有ませぬ彼の南都の正倉院の三倉は聖武天皇の御遺物を納めて遺させ給ひし所なるは普く人の知る所であります然るに其種々の御物の中に硝子の鑄物の片成のもの及び硝子に製すべき石の細末等も遺りて居る



この事でありすが果して然る時は此御代には本邦に於て硝子を造りし事は更に疑ひの無き所と思はれず是に因て考へますに仁徳天皇の崩御の年より聖武天皇の御末年迄は凡三百五十八年を経安閑天皇の崩御より凡二百五十年を経て居りますれば聖武天皇の御代のもを以て仁徳天皇又は安閑天皇の御代の證據とはなりませんねど其御代に硝子の實物のありしとする時は強て多言を要せずして思ひ半ばに過るては有りませぬか況や古代の曲玉の中に既に硝子製のもの有るを見れば其製法極めて上代より有りさせされは事實は符合致しませぬ加之本邦の上古猶神代と稱せし時より玉作遠祖天火明玉命の玉を作れる事蹟を傳へ又其子孫後裔に玉祖宿禰及玉作連の姓を存し且攝津常陸出雲等の三國を始として諸國に玉造の地名の遺れるなどを思ふに唯玉石を琢磨きて玉を造れるのみならず硝子製の玉を作る法も極めて上代より之を傳へたりしを平城朝以後遂に其傳へを失ひたる譯てもありませうが之に思ひ合すへきは本邦にては古來其祖宗を尊ひ其事物を重んじ要するに我家を大切にすの餘り秘事口傳又は一子相傳など云ひて古代より其家々に傳ふる所は何によらず他人に傳習せるる風俗なりしを以て中には之か爲め誠に能く古實を世に傳へしものも無きにあらずと雖も亦美事良術等の世に漏ずして久敷年叙を経る間に何時となく其家其人と共に其傳へを失ひ之を世に絶しめしに至りしものか幾行あるかも知れませぬ實に遺憾の極めてはありませぬか今思ふに此硝子の製法の世に傳はらざる如きも定めし其一つてありませう又正倉院の三倉にはシヤボン等も現に遺存せしものありて固より既に千有餘年を経過し來れるものなれば黒く古ひてあるは申す迄もなれど是を湯に濡して摩擦を加ふれば泡を生し沾汁を出すと今のシヤボンに少しも異なる所なし然るに世人の中には或は自己の本國たるをも思はず古代の事とし云へば野蠻視して更に顧みるとなく唯々近來歐洲より舶來せしもののみ心得て居る向きもありませぬと本邦にては既に平城朝以前より之を用ゐし事か有りたり又應神天皇の陵に煉瓦製の埴輪の多く遺

存せるに就て思ひ合すへきは彼のセメントの事にて是れ亦近來歐米よりの舶來物とのみ心得て居りますれど我國にも古來是れに似たる一種の製法がありしと見て彼南都の興福寺を建築せし時には土に油を和して煮て製する法か有りて同寺の或所は其土にて塗固めてあるを以て既に千有餘年を経たりと雖も少しも動く事なきは全く之によるの事でありませぬ是等も其法の起原は何時とも分りこそ異なるれ實用を辨するに至りては更に殊なる所はありませぬ是等も其法の起原は何時とも分りませぬが定めし上古よりの傳來てありませう又大和國なる帶解の里より菩提山と云ふへ通る途中の所に於て農民共島地を開墾するとして土中より煉瓦造りの家屋を掘出せし事は世人の能く知る所てありませぬが今其實地を見て來し人の話を聞くに室の廣さ凡三間四面もありて其入口と見ゆる所には凡四尺幅位の所が五尺餘りも有りて又一室九尺四面程の所も有りて申す事でありませぬ其両室共高さも廣さに適ひたる寸尺と見えてあれども惜哉上方より掘崩して屋根の所は全く破壊し其隅の所僅に存して居るとの事でありませぬ煉瓦は至て硬質にて殆ど石の如く厚さ二寸五分幅六寸長さ一尺二寸位も有りて申せば今の煉瓦よりは全体が餘程大きな譯であります其煉瓦と煉瓦の間は凡三分位もありて規矩最も能く整頓し其疊積の方實に妙巧を極めたるものでありとの事で元より何の時代のものか何なる故にて土中に埋りしものか或は貴人の墳墓等の爲めに作りて始より土中に埋めたるものか之を知るに由なれど何の書にも其傳への無きを以て見れば實に古代のものなるには違ひ有りませぬ而して其煉瓦を疊積するには所謂セメントを用ゐて之を積きたると固より申す迄もありませぬ其セメントには必ず前に申し土に油を和し煮て製したるものを用ゐたる事でありませう斯る古代の遺跡實物正しく今日に現存するものに因て觀察を下さば我國の上古は中々後世の思ひもよらぬ程に進歩して有りしに違ひありませぬ

又曰く織物に就ては支那の杜子美の詩に「花羅封三蛺蝶一瑞錦送麒麟」と曰ふ句あり其註に蛺蝶麒麟



麟は羅罽之上文繡也とあり其解釋の續きに漢武帝時西域獻<sub>二</sub>眩蝶羅<sub>一</sub>日本國貢<sub>二</sub>麒麟錦<sub>一</sub>眩<sub>二</sub>人眼目<sub>一</sub>

六十八

とあり漢武帝は我開化天皇應神天皇より六代前の十八年に位に即て崇神天皇の十一年迄五十四年間國を治めし王なり此事は韻府續編にも漢武帝の時日本貢<sub>二</sub>麒麟錦十瑞<sub>一</sub>金光炫目とあれば支那にては明白に傳へあるものなり此麒麟は恐くは鹿の形ならん小中村清矩曰く織物の如きは漢土と交通の後に備はりし如く思ふ者あるは誤なり天照太神の時より既に備り居れり

福澤諭吉曰く今日土中より掘出す勾玉金環等の如きは當時に在て其時代の經濟理論に明なる書生の評に附したらば或は無用の物なりしならん雖も數千年の下今日に於て其勾玉細工と其金環の鍍金とを視察すれば我日本は數千年前既に鍍金の術ありしとを知て其文明の度を見るに足るべし又曰く日本の技藝に書畫、彫刻、劍術、槍術、馬術、弓術、柔術、相撲、水泳、諸禮式、音樂、能樂、園藝、將棋、插花、茶ノ湯、薰香等其他大工、左官、盆裁、植木、料理、割烹、蒔繪、塗物、織物、染物、陶器、銅器、刀劍、鍛冶等の術我輩は逐一之を記し能はず雖も其目甚だ多きとならん是等の諸藝術は日本固有の文明にして今日の勢既に大なる震動に逢ふて次第に衰へんとするものなれば之を未だ滅了せざるに救ふは實に焦眉の急と云ふべし如何となれば藝術は數學器械學化學等に異にして數と時とを以て計るべきものに非ず規則の書を以て傳ふべきものに非ず殊に日本古來の風にして仮令規則に據るべきものにて所謂人々家々の秘法に傳ふるもの多くして其人に存するか故に其人亡ふれば其藝術も共に亡ふべきは當然の數にして今日僅に其人を存し然かも其人は將に自然に亡ひんとする時なればなり

黒川眞頼曰く太古の事實を述へんに後世の人の思想と甚異なるは絹繩の類なり絹繩は蚕の繭より糸を得て織り成すものなれと最初は繭を煮ることを知らざる故に口中に合て糸を曳出せり故に其

糸に太き細きありて良糸を作ること難かりければ人民多く麻穀を用て便とせり日本紀神代卷一書に五穀及蚕の始て成れる條に口裏合<sub>二</sub>蚕便得<sub>一</sub>抽<sub>二</sub>絲<sub>一</sub>自此始有<sub>二</sub>養蚕之道<sub>一</sub>焉とあるを見るへし口中の暖を取て絲を曳きたらんには其曳くことも亦速かならず不便なりしと思ふへし此の如く養蚕の道は太古よりありしかと其繭絲を以て織る所の絹繩は甚粗製なりければ人多く布類を愛して絹繩を賤しとせり是後世の人の思想と甚異なる所なれば古典を讀まん人は此に注意すべきなり此他獸皮をも用ゐたりしにやと思ふ人もあるへけれど獸皮は唯敷物及び器財にのみ用ゐる貴人は勿論にて人民に至るまで衣服には用ゐざりしなり是も亦後世の人の思想とは甚違ふべきこと、をほゆれば驚かしくをくなり

又曰く予弱冠の頃延喜式祝詞式なる大殿祭の詞を讀みし毎に齋玉作等か造仕れる御吹きの五百都御統の玉とあるを見て思ひらく吹玉は即ち硝子玉なり硝子玉を製造せしを我國上古にはあるへからず外邦より舶來せしを用ゐられたる者なるべしと其後諸國より掘出つる硝子玉硝子器の類を博物館に在て度々見たれと是皆外邦輸入の品なるへしと思へり然るに明治十五年官命を奉して東大寺の正倉院の寶物を點檢する際彼の百唐櫃の中雜玉を收めたるを開き見たるに種々の玉を集めて收めたり其質は青瑯玕、翡翠石、瑪瑙、珊瑚、琥珀、出雲石、水晶、硝子の類にて之を升にて量らば二三斗も有るへし中に就て最も少きは珊瑚玉にて最も多きは硝子玉にて其色も製作も種々なり其れか中より玉の作り餘りと思はるゝ硝子の固まれるを數個見出し又出來をこねたる玉を見出し又硝子に爲へき原質の石をも見出したる予是に於て覺へす手を拍て是にて數十年の疑問は釋けたりとて喜ひたり其故は是等の物の出現したるによりて千百餘年の當時本邦にて硝子の製造せし事の能く知られたればなり

利之曰く三種の神器の一なる勾玉は玉屋命に科して造らしめたるものなりといへと紀の一書には



素尊か天照太神に謁せんとする時一神あり之を進めたるを直に太神に献したるものなりとあり劍は素尊か八岐蛇を誅したる時叢雲の立ちたる所に到り之を獲たるを以て叢雲の劍と稱し之を素尊が献したる事に就ては何れの歴史にも明かに記載しあり又神社の寶物とし或は古墳等より掘發したる勾玉に就ては多く外國より渡來したるものなりとの説あれと現今帝國博物館に出雲國八束郡玉造より出品せる勾玉を製造する砥石のあるを見れば強ち外國より渡來したる品のみにあらざるや明なり又帝國博物館にある美濃國稻葉郡鶴飼村より掘出したる鏡は八花形にして大和國廣瀨郡大塚村より掘出したる鏡は白銅なり是等は神代以後のものなるへけれと古代鏡及び勾玉の製造に熟練せしこと知るべし

大日靈尊は素盞鳴尊の暴を避け宮殿に入りて出給は是に於て政教を視すること久きに及へは兎徒四方に起り國亂れて恰も暗夜の如し群神之を憂ひ八百万神を天安河原に會し天香山の鉄を採り石疑姥命に科して八咫鏡を作らしめし玉祖命に科して八坂岐勾玉を作らしめ天兒屋命太玉命を召して天香山の鹿の肩骨を抜き天香山の木を以て之を燒きて天神の意を卜はしめ天香山の眞堅木を根抜きにして上枝には八坂岐勾玉を中枝に八咫鏡を下枝に楮、麻を繫ぎ太玉命は御幣を持し天兒屋命は禰詞を述べ天細女命は鬘を被ふり手次を繋ぎ小竹葉を持ちて歌舞したれば群神共に咲ひたり大日靈尊之を怪み戸を細目に開き見給ふ所を手力男命は其戸を排き大日靈尊を出し給ふ

黒川眞頼曰く天照太神の御怒によりて天石窟に幽居ましまし、時美術物を作りて幣物とし石窟を出て給はんとを祈り申し、事あり其時工藝に勝れたる神を撰て鏡、玉、矛、織物を作らしむ時に太玉命と云ふ神ありて其事を總督し諸工神に指揮して其美術を究め盡さしめしかは諸工神各々力を盡して美術品を製作せり是れ美術を勤むる始なり其製造品甚だ善美なりしかは天兒屋命と云ふ神か辨舌を振て其美術を賞賛し未曾有なる品物を進献すといふとを申し述べければ太神も不思議事

と思召して石窟の戸を細めに開けてのぞき見たまふ所を手力男命と云ふ大力の神か其戸を排開け大神を出し奉りぬ然て大神の御怒も此美術品を御覽して氷の解くる如く解けたまひぬ大神の美術を喜ひたまふは人民の工藝が進歩するを喜ひたまふにて詮する所人民の開化を喜ひたまふなり岡本監輔曰く天石窟に入るは是れ自から其身を責むるなり蓋し吾の弟を化すると能はざるは吾の不徳なりと謂ふ故に弟の傲慢を見ざるなり其己を修むるの心益々眞に弟の善に遷るを欲するの念益々切なり素尊暴と雖ども與に抗する所なし而して其心に耻づるあり安ぞ屈服せざるを得ん乎法を天下後世に爲す者至れりと謂ふ可し

又曰く此時に當て諸神位に在る者安ぞ一日も安居するを得ん乎相與に力を出し大祭に従事す其儀甚だ嚴なり先輩謂ふ此は天神を祭りて以て大神の心を慰すと蓋し大神本祖考を祭らんと欲し素尊の爲め中廢す故に今其意に本き以て之を行ふ保食神を祭るか如きも亦其中に在り知言と謂ふ可し當時諸神各々擅長なり工藝に器械に言辭に各々其長する所を執り合議以て一君に奉す汲々唯々及はざるを恐る一家の子弟一堂上に會し以て家政を議するに類たるあり思兼命(平田篤胤は曰く思兼命は即ち天兒屋報命なり)を推して會長と爲し以て其籌畧を仰ぐ

石川義形曰く八百万神を會すと曰ふは八百万神を盡く會したるにあらす此神の字は仮字にして上古は凡て上に在る者をカミと稱し一國若くは一部の上に在る者を指してカミといひたるを漢字の渡來に及び神の字を用ひ後世は一國人民の上に武藏の守、大和の守、又は主殿の頭、兵衛の督、采女の正と稱する長官を置けり故に政府を御カミと云ふも上古の習慣より來るものなり神道は八の數を尊ぶゆゑ上古戸籍の不完全の時其總數詳ならされは八百万と爲し其八百万の上に在る首長を會したるものにて中世六十餘國に守を置きたるとき六十餘國の守を會すと云ふ意と同一なり

チャムパーレン曰く天照太神石窟隱の傳記をさかば人或は日本人の祖先は上代斯の如き岩窟に住



居せしと想ふべしとありしにもあれ日本古傳記の整頓したる頃にはさる有様は過ぎ去りてあるとなかりき

栗田寛曰く畏くも我天祖天照太神のます高御座をも野蠻の穴居ならんと想像せる殊におかし彼時は平常のまし處にあらざるなり故に古語拾遺に十峽小峽の木をきりて瑞殿を造りたる事も見ゆるなり殿門を守衛せしめたる事もあり然るにチャムパーレンの書に岩窟に住居せしを想ふへしとあることありしにもあれなと其詞を迂遠にしたるは蝦夷と同一の看を爲したること著し惡むべき口つさなり

利之曰く博士黒川真頼の説によれば太神は美術品を見て喜ひ給ふと此時美術品を献上すると共に音楽を奏せり音楽も美術の一として西洋諸國に於ては殊に之を貴重せり儒教に於ても六藝の内に樂を加ひ孔子は音楽を論するに韶は美を盡せり善を盡せり武は美を盡せり未だ善を盡さざるなりと韶と武とは樂の名なり佛教に於ても大乘を擴張せんが爲め起信論を著したる馬鳴菩薩が囉吒囉と云ふ音楽を作り一國を風靡せしと佛經に見たり大神は鏡、玉、矛等の美術品を見又美術の一なる音楽も聞き臣民の技藝が斯くも進歩したるかと思召し御怒も自然に解け給ふものなるべし群神相議し素盞鳴尊に贖罪として物品を出さしめ又鬚と手足の爪とを切りて之を罰す

利之曰く古事記に尊を罰するに千位置戸を負せとあり日本紀には千位は千座と書けり或説に千人座し得る場所に並へる丈けの物を出さしむとも云ふ  
素盞鳴尊嘗て保食命に食物を乞給ふ保食命種々の食物を作り鼻口等を以て其味を嘗め其香を嗅ぎて進めたれば素盞鳴尊は竊に其態を伺見て己の喰餘せる汚物を進むと爲し怒りて保食命を殺す此命一身を農桑に委ね稻粟小豆麥大豆等を改良せり

岡木監輔曰く保食神の身動植物を生すと云ふは訛傳なり此神物産に精通し平常諸物の餌食すべき

者を収集し五穀の如きは最も其珍重する所にして常に懷中若くは袖中に入れ置き殺さるゝに及び其身邊に散乱したるものなり化して牛馬と爲ると云ふに至ては殊に甚し

利之曰く後世五穀を此命の耳目鼻口等より出でたりと云ふは我國に於て人體と草木と異質にして同名のものあり即ち目と茅、鼻と花、齒と葉、身と實等あり又博士金澤庄三郎の説に因れば韓國に於ても耳目鼻口と同名の穀類ありと云ふ此時既に韓國と交通し居りたれば此等の比喩か轉訛したるものならん

素盞鳴尊出雲國氷河上ひのかはがみに在る時老夫と老女と一女子を中に置きて泣く者あり素盞鳴尊其泣く所以を問ふ老夫は足名椎、老女は手名椎、女子は奇稻田姫と稱し大山津見命の子孫なれと彼の檜楹の生繁れる谿間に跨りて住居し七人の強悍なる部下を有す兇賊八岐大蛇といふ者此女を掠拐せんとす故に泣くと云へり素盞鳴尊之を聞き吾は大日靈尊の弟なれば之を討平けんと老夫老女に命し酒を大蛇に送らしむ大蛇等其酒を飲み酔て寝たるを窺ひ之を殺し此時名劍を得て大日靈尊に献す

川田剛曰く明治の初年文部省の命を奉して始めて小學讀本を編纂したる田中義慶の説に入岐大蛇は土豪の首長にして七人の部下を有せりと云ひしか余も往年或人よりも此説を聞きたるとあり久米邦武曰く八岐蛇は無論譬喩なり此事は神武天皇の八十梟帥を誅し日本武尊の熊襲梟帥を誅せられしと例にて當時は宴會に於て饒勇の者を斬斃すを武勇の名譽となしたり尾に至り及鉦るとは最後の一人か防鬪の強かりしにて其者の佩たるか天叢雲劍にてありしなり脚摩乳手摩乳は大山津見の一族なれば雲伯の地を領したる縣主なるべし然るに冊尊の比より北國より高志人侵入し八岐蛇は其高志人の魁帥にて篠川の谿谷は其占領と爲り篠川の下流なる縣主の勢力弱くして毎々采女を要求さるゝに至りたるに素尊これを援けて高志人の魁帥を斬夷して雲伯の地を鎮定し給ひたる武烈とす



素盞鳴尊須賀に宮殿を建設し奇稻田姫を娶り共に住み給ふ其時の歌に「八雲立つ、出雲八重垣、つまこみに、八重垣つくる、其の八重垣を」と尊と奇稻田姫との間に生るは八島士奴美命にして大山津見命の女大市姫を娶て大年命と宇加御魂命を生む又奇稻田姫との間に大國主尊を生むと云ひ一説には刺國若姫を娶て大國主尊を生むともあり

小中村清矩曰く上古の官名めきたる稱呼の起原を尋ねんには遠く紀元前の所謂神代に遡りて其一二を言はざるを得ず其は上古に人に長たる者を指して首と云へりオビトは大人の義にして尊稱なり素盞鳴尊の稻田姫を娶り須賀の宮を造りて住み玉ひける時足名稚を召して汝は我が宮の首たれとのたまひたるは後世の後宮春宮等の長官の如くなるを云ふ又神事を行ふ者を統領するを齋主と云へりイハヒとは祭祀を行ふより諸事を忌慎む義にして則後世の神職の長なり又膳の食の事を執行ふ者を膳夫と云ふカシヘとは饗を盛る木葉の名にしてテとは物を造るを云ふ櫛八玉神大國主尊の膳夫とされる事あり此等は共に古事記日本紀に見えて紀元前より自らなる職名なり

石川義形曰く古事記には木花知流姫、日河姫、布帝耳姫、刺國若姫等の生む所の御子を尊の子孫、曾孫、玄孫の如く順次に記しあれど此神某の女を娶り云々の此神とは何れも素盞鳴尊を指したるものなれば何れも素盞鳴尊の御子なり故に大國主尊は兄弟八十神ありと云ふ

森三溪曰く神大市姫は素尊に配して何神と何神を生みたる乎素尊に數子あり而して其后妃の名の物に見わたるは奇稻田姫と神大市姫なり此二后は同神か否か今輒く決し難しと雖も或は稻田姫と大市姫と刺國稚姫と皆同神なるやも測り難きなり又古事記は八島士奴美神を以て大國主と同神となさす之を素尊か刺國大神の女刺國稚姫を娶りて生む所となせると他書に所見なき傳なり刺國大神てふ貴重なる名を負へる以上は高德なる神の別名には相違なきも誰の別名なるや未考の問題なりしか余は之を大山津見の別名にして刺國稚姫は奇稻田姫なるへく考ふ其は八島士奴美は大國主

なれば其母は奇稻田姫なると論なし從て其母の父は足名稚にして即ち大山津見と刺國大神とは同神なることを知るに足らん斯の如くんば則

刺國大神

刺國稚姫

八島士奴美神

足名稚

稻田姫

大國主神

大山津見

大市姫

大年神

の三種の傳流は皆同一の事實の轉派したるものにして素尊の總ての子は悉く大市姫の出ならざるは無きに歸着せん然れども以上の論大市姫を説くに當り思ひ當りしことを記せし迄にて余敢て之を主張するにあらざるなり

利之曰く日本書紀には大國主尊は素盞鳴尊の御子とあり古事記には六世の孫とあれど大國主尊の嫡后は素盞鳴尊の女須勢理姫とあり妃は天照太神の養女多紀理姫とあり又天祖の命を奉して國土の視察に赴き大國主尊に仕て復命せざりし天菩比命は天照太神の養子なりとあり且藤田東湖の説に三種の神器の一なる叢雲劔は素盞鳴尊か其子大國主尊をして之を天照太神に献したるものなりと云へり彼是此時代を參照するに素盞鳴尊の御子なる方が信に近し又上古の結婚は概ね妻を男子の家に娶らす男子か女子の家に通ふものなれば其子は皆女子の家に養はる故に兄弟姉妹互に相知らざる者多く因て同母の兄弟姉妹の結婚は嚴に禁しあれど異母の兄弟姉妹の結婚は自然行はれりといふ舊約全書創世記第二十章にアブラハムか其妻サラは同父異母の妹なるを我れ娶て妻と爲せり云々と記しあるを見れば外國に於ても此習慣ありしものと思はる又大國主尊に就き嫡后の外數妃あるを以て西洋學者は種々の非難を爲す者あれどアブラハムは嫡妻サラの外妾ハガルを納れアブラハムの兄ナホルは嫡妻ミルカの外妾ルマを納れ釋迦もヤスタラ妃の外にゴータマとロクヤの二妃ありしといふ然らば上古に在て一夫數婦は敢て咎むべきものにあらざ又上古と方今の如く







爲めなり堯か舜を登庸する時山澤に入らしめ烈風雷雨にも迷はざるを見て聖と爲し其二女を妻すに似たる所あり

七十八

素盞鳴尊は又大國主尊を野に誘ひ之に火を放ちたれば鼠來り火を避くる法を誨へ且素盞鳴尊の賜ふ所の鏑矢を火中より持出して大國主尊に與ふ須勢理姬は大國主尊か既に焼死したるものと思ひ哭しつゝ來り見れば大國主尊は野に立ち鏑矢を持し居て素盞鳴尊に其矢を返し奉る

加藤高文曰く蛇といひ吳公といひ蜂といひ此野を燒廻すといひ種々に苦しめ給ふ所以は彼八十神の如く實に害はんの御心には非ず此神の勇怯又は智愚を試み給はんとなるべし

岡本監輔曰く鼠は穴居の賤民を謂ふ猶ほ土蜘蛛と曰ふか如し景行天皇紀に鼠の石窟の如き是なり素盞鳴尊は大國主尊を八間の大室に喚入れて種々の難行を爲さしむるも須勢理姬の内助に因て恙なく爲し得たれば素盞鳴尊も心中に愛く思ひて寝ねたり大國主尊は須勢理姬を携ひ生大刀生弓矢及び天詔琴を持て竊に逃出す時に天詔琴樹に拂れて鳴りたれば素盞鳴尊驚き寤め追ひて黄泉比良坂に至り遙に望みて大國主尊を呼て曰く汝其生大刀生弓矢を以て八十神等を坂の御尾に追伏せ河の瀬に追接ひて大國主尊爲り亦宇都志國玉と爲り須勢理姬を嫡妻として宇迦山の麓に底津石根に宮柱太しり高天原に氷椽高斯理て居れと詔給ふ

黒川真頼曰く建築の次第を云は、先づ中央に大柱を掘立つ是を天の御柱と云ふ古事記上卷に見立天之御柱一見立八尋殿と見わたる天之御柱即是なり其の御柱は地下の大盤石のある處を認め掘りて其大盤石を礎として柱を埋め立つるなり故に其宮處を擇みしなり支那にても其處を擇みしことは我が邦と同じさまにて宅の字意は處を擇みて建つる意なり釋名に云はく宅擇也言擇吉處而營之也と見わたるにて知るべし其柱を深く埋めたつると云ふ徵は古事記上卷なる大國主神の事の條に於宇迦能山之山本於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而居と見わたるにて

知るべし高天原氷椽多迦斯理とは宮殿の高さを云ふ其高きことは後世の人の思想とは大に異にて驚かるゝはかりなり大社志に齊明天皇五年の大社の建築の制とて記したるを見るに云はく日隅宮(大社を云ふ)社高八丈濶六間四方と見わ又其仮殿は本殿高六丈方五間云々と見わたり其高きこと了知すべし

小中村清矩曰く太古に天御量と云ふ器ありて手置帆負神彦狹知神其れを以て宮殿を營造したると古語拾遺出雲風土記等に見われば尺度の具も備りたるか如くなれど其製作詳ならず但し上古の俗手を以て物を度りたりし習慣の一般なりしを古書に見ゆる所多し尋は両手を延したる廣さにて千尋繩千尋鰐の類あり咫は両手の先を並べて横の經りを以て度る八咫鏡八咫鳥の類なり握は長き物は手にて握み四指の廣さの程に度る十握劍七握腰の類なり

姉崎正治曰く大國主の冒險奇行は古史中の間曲にして紀及拾遺は國土經營の事のみを記して談此に及はす此筋書の説話は世界中殆ど行はれざる所なし希臘にて壯年ヤーンソンか王エーテスより金毛皮を求めんとして幾多虐待を受けし後其女メデアと共に之を遁れたるといふ説話あり南洋のサモアにては壯年シアチか能く歌ふ爲に歌神に惡まれ種々危難に遭はされて後其女プアペーと共に之を遁るゝ説話あり東亞弗利加のヅル人の中にはウトラカヌヤネが毛髮の巨人を縛して之を遁れしあり米洲の土人アルゴンキンの間にも同くバニグウンか咒術王ミシヨシヤの女と共に其父を遁るゝあり其外同筋の説話至る所に存し其筋書の同じきのみならず其虐待冒險の細點に至るまで驚くべく一致せる者多し余は大國主須勢理姬の説話に就ては世界中に驚くべき傳播を有せる説話なりといふに止め今は其解釋を加へざるべし只此に依りて吾人の見得る所は此一段の説話は古史中の一問曲に過ぎずして歴史上神話上宗教上重要な關係なき一説話お伽噺に外ならずといふ一事



田口卯吉曰く誠に素盞鳴尊の寛大なる御言は大國主神に取りては難有かりしならん  
大國主尊は其生太刀生弓矢を以て八十神等を平け終に稻羽に至り八上姫を納れ御井命を生みたれど  
八上姫は嫡妻を畏みて其子を木股に挟み父の許に歸れり

利之曰く子を木の股に挟むは當時離縁の習慣なり御井命は是に因て木股姫とも云ふ

大國主尊更に進て高志國に到り沼河姫を納る是に於て嫡妻須勢理姫甚く妬嫉し給へは大國主尊詔ひ  
て出雲より倭に上らんとて束装して立ち一手を馬の鞍に掛け一足を鏡に踏入れて歌ひ給ふ曰く「鳥  
玉の黒き御衣を、眞具に、取装ひ、奥津鳥、胸見る時、踏たゞぎも、此れは宜はす、邊津波、磯に脱ぎ棄  
て、鳩鳥の、青き御衣を、眞具に、取装ひ、奥津鳥、胸見る時、踏たゞぎも、此も宜はす、邊津波、磯に脱ぎ棄  
棄て、山縣に、求ぎし、茜春き、染木か汁に、染衣を、眞具に、取装ひ、奥津鳥、胸見る時、踏たゞぎも、此し  
宜し、いとこやの、妹の命、群鳥の、吾か群往は、引け鳥の、吾か引け往は泣じとは、汝は言ふとも、山處  
の、一木薄、頂傾し、汝か泣かさまく、朝雨の、狭霧に、起む、若草の、妻の命ことこの、語りことも、こを  
ば」と是に於て須勢理姫大酒盃を取り奉けて歌ひ給ふ曰く「八千矛の、神の命や、吾か大國、主こそは、  
男に坐せば、打見る、鳥の、極々、極々見る、磯の、崎落ちす、若草の、妻持たせらめ、吾はもよ、女にしあれ  
は、汝除て、男はなし、汝除て、夫はなし、文垣の、ふはやが下に、蒸被、柔か下に、袴被さやくが下に、沫  
雪の、弱女胸を、袴綱の、白き腕き、曹叩き、叩き拱がり、眞玉手、玉手差し極き、股長に、寐をしなせ豊御  
酒、献つらむ」と盞結し給ふ

元良勇次郎曰く太古に於ける夫婦の状態は大國主神と須勢理姫との關係に就て其一斑を窺ふとを  
得ん大國主神沼河姫を幸し嫡后の嫉妬を受けられしかは倭に避けんとし給へるに須勢理姫一首歌  
を詠して悔悟の情を抒へ以て其行を止め給へり此歌に由て之を見れば男子の婚娶は無制限なるも

女子に在ては一夫に限れるものなりとの思想此時に存したるを見るなり

岡本盛輔曰く須勢理姫の歌に言ふ男は多妻あるも女は二夫あるを得すと固に千古婦人の大訓なり  
チャムパーレン曰く此風斯の如く無狀なれども一の感賞すべき情ありそは夫婦暫時別れんとする  
時は互に其下紐を結び交付す慣習是れなり此は夫婦相別れ居る時の間其貞節を守らんととなり  
大國主尊出雲の三穗の時に在る時海上より小舟に乗て來る者あり其名を少彦名命と曰ふ大國主尊其  
賢者なるを見て之を優待し共に農工商の事を改良し又醫藥禁厭の事を弘めて共に國土を經營す

菅原道真曰く勅を奉し大國主尊の事蹟を審にせんと欲し舊記を搜り古圖を索ね最も信と爲すへき  
者を得たり其像は則直身正視顔色怡々として何に曲玉を以て鏡を掛け腰に一劔を帯ひ右手に槌を  
有ち左手に裏布を有ち兩足苞に跨かる古史に載す尊は教を設け醫を創むと按するに直身正視は則  
上を仰かす下を臨ます其意高きに媚ひす卑きを蔑らすして以て分を守る所謂身を修むる表なり顔  
色怡々たるは則一家和樂して以て九族を睦ふし所謂家を齊ふ表なり而して槌は工の要具妙巧の工  
と雖も槌なれば作を爲す能はず故に槌を有つは工を勤むるの表なり裏布は商の要具往古未に通  
幣あらざる代貨を荷ひ市に至り交易を爲す時布を以て貨を裏む故に裏布を有つは商を勤むるの表  
なり苞は農の要具五穀の収藏には必苞を用ふ故に苞に跨かるは農を勤むるの表なり既に身を修め  
家を齊ひ且農商工を勤むる時は國治むるに足らざるなり況んや國を天孫に譲り身を教と業とに委  
ね且醫を弘め又其子事代主命をして民に漁獵を教へしめて万民幸福の實を擧ぐるに於てをや嗚呼  
尊は國朝己を修め人を治むるの道を立つる者なり

僧空海曰く大黒尊は諸法實相と治生産業とを俱に共に修むる故に福祉無量なり

僧日蓮曰く大黒天は福神として我邦の家々に之を祭る今此圖を見此書(菅公筆を指す)を讀むに實  
に福德圓滿の神なり



菅原道真の眞像を山崎開道が模写したるものなりと相傳ふ大國主尊の像



山崎嘉曰く孔子曰く人の己を知らざるを患へず人を知らざるを患ふ又曰く己の欲せざる所を人に施す勿れ釋氏曰く惟我獨尊又曰く衆生を濟度すと蓋ふに其意皆己を修め人を治むるに在り而して予嘗て聞く大黒天は我万業の祖なりと其教を立つるや亦己を修め人を治むると儒佛と異なる所なし宜なる哉昔公は其教を贊し日蓮は其徳を稱するや

千家尊福曰く大國主神の國土を經營して万業を創始し醫藥温泉の法を教へて人民養息の道を開き給ひしとは古史に見わたるか如しされは此世に生れたらん者は誰し人か此大恩願を蒙らざらん何れの人か此御功に報はん務を爲さるべき

石黒忠憲曰く夫れ本朝の醫術は大己貴命少彦名命の兩神に權與するとは舊史に明にして皆人の知る所なれど其方法に至ては之を傳ふるもの少なり稀に其遺方なるもの無きに非されと唯奇古と稱すべくして之を實地に用ふ可らず徒に古に遡り奇古の方法を探らんよりは寧ろ疾苦を救ふに醫藥を用ゐると云ふ一事こそ二神の恩資なりとし其遺徳を敬欽するに若かず

成島弘曰く大黒は世人の皆知る如く大己貴神なり其像亦舊事記云ふ所の語に合せり然るに大黒天神經に云ふ世尊大黒天神と爲り大福徳圓滿を説くと陀羅尼に云ふ薩摩河羅邪莎賀又一切經音義に云ふ摩訶迦羅唐に云ふ大黒天神なりと而して両森芳洲翁亦云ふ莫河頭羅は即ち大黒神なりと然れとも予嘗て莫河頭羅の像を見るに卷毛裸体手に金囊を持てり想ふに印度の福神なるへし俗呼て摩迦羅神を稱す而して其小牀に踞し一脚地に垂るゝの形芳洲云ふ所に符合せり是れ一個の胡神にして今世間に畫く七福神の大黒とは別物なると明白なり七福神中の大黒は純然たる日本人と見ゆれば大己貴神たると疑ふ可らず

桃陰迂叟曰く支那に堯舜なる二聖あり垂拱して四海を治め天下無爲にして化し億兆に不平の色なく黎元に怨苦の弊なく蒼生は唯々忻々然と謳歌朝現して其温顔和辞に相接するを無二の歡樂とせ



るのみ是を以て後世治を謂ふ者は必ず唐虞を指し仁を語る者は必ず堯舜を以てす嗚呼堯舜は聖にして且大なる者と謂ふべきなり然れども余か曾て耳にする所を以てすれば此二聖の威徳を輝し功績を擲めたる者あり乃ち周の孔夫子是なりと今周孔の道を釋ぬれば實に夫子は堯舜を祖述し且堯舜の道を以て道とせし所の文武を憲章したるものにして別に夫子自から之か創意發作せし所のものにはあらざるなり然らば孔子ありて初て堯舜の威徳と功績は顯揚せられたるものにして若し孔子微せば此德行圓滿なる二聖も亦万古の埋木とや成果てぬらん又彼猶太人か其國祖として且信仰の父として敬重する所の一人物あり即ち天神に對して敬虔の念甚だ盛りなりし所のアブラハム是なり其天神を崇信し神命是れ順ひ居常寡欲と義勇とを以て其生涯を送り意中自から未來永遠の喜樂と希望とを持有せし所の者は實に古今の宗教家か其安心立命の鼻祖として欽慕するの價値を有する者とすべきなり然れども是又其後世にしてモゼスなる人傑の出るに非ざれば恐くは此一念圓滿なる信仰の父を其國人に顯はし又之を世界に紹介するを得べけんや抑モゼスか此人を顯揚したるは恰も孔子か堯舜を發揮したるに同うして孔子ありて而して後に堯舜ありモゼスなくんは則アブラハムなしと謂て可なるか如し嗚呼後世の人士か古人を顯揚發揮すると實に忠にして且義なる者と謂ふべきなり今茲に葦原民族の末裔にして其高祖なる大國主尊を顯揚したりし所の者は誰そや余は夙に我國人か古來此尊を崇敬し來りし事蹟を認むるも未だ其威徳と功績とを發揮したる者あるを聞ざるは千古の遺憾とする所なり抑も是れ誰か罪ぞや夫れ我か皇典と稱せらるゝ所の古史乘を以て其道の基礎とせる神道家諸士の罪には非ざる乎何となれば其皇典中最も主要たる古事記日本紀等に就き尊の聖生涯を探討するに實に天神を崇信し百事神命の在る所に依て進退せらるゝの体度は已に彼のアブラハムに劣らずして又温容忍耐以て諸人を迎へ其仁禽獸に及ぶものは又彼の堯舜に譲らざるものあるも彼等は吾邦は言擧げせぬ國との通辭の下に之を見過し徒らに古

語の穿鑿に力を極めて此くの如き大功なる國祖の偉業鴻徳を顯揚することを忘れたるか故なればなり茲に葦原民族の頭領神道の鼻祖帝者の良範たる所の大國主尊に一の贊辭を捧げんとす夫れ堯舜は天を信して疑はず又アブラハムは神を敬ふて餘念なし今や尊は天神を畏みて無邪氣なり此無邪氣なる所即ち國人の欽慕する因由にして又天孫の崇敬せらるゝ所以なり是を以て尊か接連の後も天孫の方にては厚く之を待遇し其子孫に至る迄所領の安堵を得させられ殊に尊か崩御の時に國君の大禮を以て葬送せられ其神靈を出雲の杵築に静め奉り天菩比命を齋主として之に仕へさせ爾後今日に至る迄朝廷より大祭典を執行し給へるは朝廷に於て如何に尊の高徳嚴威を敬慕し給へるかを知悉するに足るものとす而して又我國人の尊に對して如何なる感念を有し居りしかを察するに我六十餘州至る所の家々に於て尊の聖像を祀り之を大黒天として之に配するに惠比須として事代主命を以てし而して之を幸福の與へ主として崇拝し來れる所に由て其敬慕の度の如何に盛大なるかを知りし得らるゝなり嗚呼大國主尊の徳たる之を仰げは愈々高く之を鑽れば愈々堅し万葉集にも「大己貴少彦名の在しけん静か石屋は幾世經ぬらん」とあり古人も何に尊を欽慕せしか知るに足らん(史海抄録)

少彦名命此國を去るに及び大國主尊大息して曰く吾誰と共に此國を治めんと此時海を光して來る神あり曰く能く我と共に相作らされは國成り難しと尊問て曰く然らば則汝は是れ誰なるかと對て曰く汝の幸魂奇魂なりと

岡本監輔曰く神光海を照すは本心一覺し靈智發徹するに喩ふ蓋し至誠國を愛ふるの餘り遂に物に應じて昏からざるを致す天神之を祐け新に靈魂を降す如き者あり吾と曰ひ汝と曰ふは自ら問ひ自ら答ふなり幸魂奇魂は善處に就て説くに幸は慶なり物に應し迷ふとなき者を謂ふ奇は靈なり内に省み自ら覺る者を謂ふ幸魂は外に照す乃幸福の我を道くあり奇魂は内に省み智識の自ら護るあり



神后紀に載す和魂は玉身に服し壽命を守り荒魂は前驅と爲り新羅を伏すと荒魂は粗く和魂は精し荒魂は氣を主とす和魂は神を重とす和魂は即ち幸魂奇魂なり和魂中に幸奇あり是れ心の動靜未だ嘗て其中正を失はざる者なり精となす所以故に心の事に觸れ發動して未だ省せざる者は荒魂なり退て自省し得失自ら明なる者は和魂なり荒魂は猶ほ人の怒りて戦ふか如き是れなり和魂は自ら省みて自ら修むるか如き是れなり荒魂は五官に屬す和魂は心思に屬す是れは同魂にして二名あり二者は相須て用を爲す荒和判然と二と爲るに非ず大國主神是に至り始て万化心に生し皆本體説行に由り吾心一物を留めす乃其万物を主宰する所以を知るなり

又曰く幸魂奇魂は情性を分折し神習人習は聖凡を差別するか如きも亦道德精微の談に非ざるは莫し信に心を正ふし身を修むるの極致國を治め民を安するの要訣たり學者宜く之を發揮し以て上下男女諸學科の大本と爲すべきなり  
利之曰く世に我神道には心理に關する説なしと云ふ者あるは大なる誤なり古事記日本紀等に幸魂奇魂和魂荒魂云々とあるは即ち精神の動靜を指したるものなり  
大日靈尊は豊葦原の瑞穂國は我子孫の治むべき國なるに大國主尊之を領し万民其恩德に服し天孫のあるを知らざるか如き有様なればとて群臣に命し相議せしめ天善比命を遣し國土奉還の詔を傳へしむ天善比命は大國主尊の威德を慕ひ詔を傳へす大國主尊に仕て三年を経るも復命せされは更に天若彦を遣したれと天若彦も亦其威德を慕ひ且其國を得んと欲し大國主尊の女下照姬を娶り八年を経るも復命せず

新井君美曰く天穗日命遂に復命せざるにはあらず其未だ還るに及はずして天雅彦をは遣されしなるべし國造大己貴神事遅はれし時に天穗日命をして其祭祀を主らしめられし事は舊事紀日本紀に觀えたり若し此神父子其國神に媚附て遂に復命の事ならんには其祭祀の事言依し給ふべき義にあ

らす國造の大神をも媚鎮しなりといふことによりて其神に媚附て復命せずなどは謬り傳へし事見えたり

久米邦武曰く天穗日の出雲稽留は優柔不斷か忍耐時機を養へるか倭媚の二字は談何ぞ容易ならん遂に事圓滿に局を結ひて建國の勳を立て出雲國造と爲り垂統今に連綿たるは美を以て之に歸せざるべからず

利之曰く天善比命三年復命せず天若彦は八年を経るも復命せずとあるは何れの曆に因るか詳ならされど細川潤次郎著の考古日本の序に或曰大國主作三甲曆云々とあり又世に傳ふる大國主尊の作と稱す神代文字中の左の十干十二支及數字あるを見れば上古既に曆のありしと明なり此文字中には支那上古の雲書籀篆等もあらん朝鮮の文字もあらん又日本にて作りたる文字もあらん素戔鳴尊が新羅に王たる時之を大國主尊に傳へしを後世大國主尊の作なりと思ひしものならんとの説もあり此文字解し難き所ありたれば平田篤胤は假名の音を付し沈文燧は左の如き解釋を爲し篤胤の音を付したる事を痛く罵詈したり又文學士熊谷五郎は神代文字論を著して文燧の憶説を攻撃せり余も文燧の解釋に就ては疑なき能はず且諸氏の説に就き共に取捨せねばならぬ所あるを以て文字の論は暫く措き余は神代既に文字のありしとは斷言して憚からざるなり又一般に行はれざるも大國主尊が文字を使用せしとあるは疑ふべからざるものなり

十干、十二支、及び數字





十京の 子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

鶴岡八幡宮の神庫にある古字

Handwritten characters in various styles, including wavy lines and stylized forms.

天地化人生抱陰陽仰載日月

俯履川谷汝形乃辰首趾耳鼻  
躬行印守天之君貼辟治民七  
正允又台分人之紀爾勿私比

出雲の杵築大社にある古字

井 井 井 井 井

非 且 井 且 弗 壺

出雲大社の邊なる書島の石窟の巖壁にある古字

井 井 井 井 井 井 井 井 井 井

井 井 井 井 井 井 井 井 井 井

井 井 井 井 井 井 井 井 井 井

井 井 井 井 井 井 井 井 井 井







子曰へり此は十干を母として十母と稱せるに由る余が嘗て英人の著書を見るに土耳其には十二「キ」と曰へるとあり之を十二年に配當し毎年各一獸を以て符號とす曰く鼠、犢、豹、兔、蛇、馬、羊、猿、鷄、狗、猪是れなり此國にも亦十二支を十二獸に配することを知れり此中犢、豹、蛇の三獸は牛虎龍に非されど大畧相近き者なり印度の古經には獅子ありて虎なし此も亦其類なるべし余が初め此説を見て之を怪みしか後漸く此説も印度の曆法に淵源せる者なるべしと思へり土耳其は回回教の國にして回回國の曆は常に印度の曆に本づける者なるべし

田中頼庸曰く和漢三才圖會に或書云天照太神告大己貴尊其靈句大己貴尊與三天八意命同意以此言造神代文字以是四十七字通連作三方言句今以秦字代於神字とあり籙中抄に母假字の事を出雲假字と云ひ五十音圖を彼國に傳へて出雲音と云ふを以て神代文字の製の事は専ら大己貴尊に係れるを知るべきなり神谷由道云ふ古來より國學者の苦心して文字を搜索し後代に傳へられたるは我々にとりては甚だ便利なることにて該諸氏に向て謝せざるを得ざる所なり然れども諸氏の述へたる所は何れも秘傳の文書とか社寺の秘庫にある簡籍とかにより重に證左を立て筑後壹岐出雲等の石窟を除くの外は未だ金石に鐫めたる物を發見せられざりしなり然るに神田孝平氏珍藏の石劔頭石に「山」の二文字を彫刻せるものあり又筑後國生葉郡星野村と同國上妻郡福島村近傍の諸村落には文字數多く彫付けたる石窟或は岩石夥多あり又同郡吉田村にある古代の石像には文字數個を彫刻せりと是等に因て見るも神代に文字ありしとは明かなり

湯本武比古曰く文字は太古の卜形より出てたりと云ふ日文文字ありと雖も之を用ひて普く事を記せざりしもの、如し是れ上古未だ文字あらずと廣成か斷言せし所以なりされど歴史上の出來事及び其他は貴賤老少口々に相傳へ又此職を世々せる一種の部屬あり之を語部と稱す延喜式に語部美濃八人、丹波二人、丹後二人、但馬七人、因幡三人、出雲四人、淡路二人とあり

チャムバーレン曰く神代文字の事に至りては神代の傳記及紀元第三世紀に至る迄の諸書を見るに文書を著作する術又其著作に用ゐるべき器具及文書類の事も更に記せし者なし亞細亞大陸と交際の開けし前の時迄は明かな書類のあるとなし始めて世に顯れし書は論語及千字文なりそは應神天皇の時に日本に來りし由年表によれば紀元後二百八十四年なり此事すら古めかして記されしものといふと知らる何となれば千字文は此時より二百年も後に出來せしものなりといへばなり此事に因ても日本史家の説は容易に信する人の注意すべきとあるを知るに足れり

本村正詳曰く二百年も後に出來しと云ふは周興嗣の次韻したるものと思ひ誤りたるよりの説なり應神天皇の御時百濟より貢りしは鐘鏝の原本にして周興嗣次韻前のものなると疑なし鐘鏝は魏志の本傳に大和五年薨とありて魏文帝の時の人なり魏の大和四年は日本神功皇后の三十年に當れり其薨年は百濟より千字文を貢りし年よりは五十六年前なり又鐘鏝は八十歳にて薨と云へば年五十年の時に作れるものとすれば其貢りし年よりは八十六年前に作れるなり古事記傳及其他の諸説皆此年代の調粗にして誤れり余文部省に於て著したる國史案に此事を詳にせり

因て更に雉鳴女を遣したる時雉鳴女の言語に無禮の事ありとて天若彦は怒て之を射たり雉鳴女胸に傷きたれど死せされは其矢を取り大日靈尊に獻す大日靈尊之を見て嘗て天若彦に賜ひたる矢なれば其叛心あるを憤り雉鳴女に命し其矢を以て返て天若彦を射殺さしむ天若彦の父天津國玉命其妻と共に來り大に悲み喪屋を作り八日八夜吊祭せり

チャムバーレン曰く歐州諸國にては七の數を貴き數としぬれど日本に於ては此數を貴重せずして却りて八の數を貴へり例へば大八州國八股蛇八拳鬚八千矛神八十神或は八百萬神の如き其八又は八十の語は註釋家の言に據はれば只數の多きをいへるものにして字義のまゝに解釋すべきものにあらずと云へり又古事記に八の數を載する外に九又は十と云へる數をあげたるあり但し大八州國



の如きは一々其數の島を列擧したるを見れば只數の多き形容にのみ用ゐたるばかりにもあらず正しく其員數をさしたる事もあるは疑なし  
栗田寛曰く景行天皇の朝に入男八女を大八州に象りし事も見ゆるは實數なりチャムパーレンの説真にいはれたり

利之曰く古事記に此時河鴈、鶯、翠鳥、雀、雉等を以て死者に供する米を舂かしめ又は墓地を掃除せしむると等を載せあるを後世小鳥の如く説く者あれど小鳥に非ずして賤族の人名なり神武天皇の御代にも土蜘蛛と云ふ者あり今世に至るも人名に熊、虎、牛、馬、鶴、龜、松、竹、梅等の動物植物の名を付する者あるか如し

此時阿遲敷高彥根命來り吊ふ其容貌甚だ天若彥に似たるを以て天津國玉命は天若彥と見誤り其手足に取懸りたれば阿遲敷高彥根命は穢れし死者と同一に見たるを以て大に怒りて去る  
岡本監輔曰く天若彥は叛臣にして其罪誅に容られず阿遲敷高彥根命は未だ其情を知らず且妹夫なる故に來り吊ふは朋友相接するの訓と爲すへきなり其父子妻子の爲す所を怒りて去るは豈に嫌を避けて然る乎

大日靈尊は更に建御雷命を正使と爲し經津主命を副使と爲して大國主尊の許に遣し汝の宇志波禰る葦原中國は我子の所知國と言依し給へり故に汝の心は如何と詔給ひたれば大國主尊素より天孫に抗する意なきを以て我は國土奉還の事に異議なければ我子事代主命三種の碕に獵漁し居れば之に問給ひと云へり因て天鳥船命を遣し事代主命を徵來て之を問ふに事代主命も即時異議なき意を表したれど大國主尊の第二子建御名方命は血氣盛なるゆゑ格闘の上にて決せんと云ひ之に抗したるも建御名方命は勝つ能はずして諏訪に逃れ遂に天孫には抗すべからざるを悟り異議なき意を述べたり  
井上毅曰く古事記に建御雷命を下し玉ひて大國主神に問へらくの條に汝のウシハクる葦原中國は

我子のシラス國と言依賜とあるウシハクと云ひシラスと云ふ二の言葉か御國の大昔の國土人民に對する働きを名けたる國語であつたものと見えける而して一つはウシハクと云ひ他の一つはシラスと稱へたるには必此二つの間に差別があつたに相違ない大國主神には汝かウシハクると宣ひ御子の爲めにはシラスと宣ひたるは此二つの言葉の間に雲泥水火の意味の違つたところあるに相違ないウシハクと云ふ言葉は本居氏の解釋に従つて今の言葉に直して領すると云ふとてあつて即ち歐羅巴人の「フッキューバード」と稱し支那の富有奄有と稱したる意義と見わたる此ウシハクと稱へたるは一の土豪の所作であつて土地人民を勝手に我が私有財産に取入れ居た所の大國主神のしわざを書いたものである正統の皇孫として御國に照し臨み玉ふ所の大御業はウシハクではない是をシラスと稱へられた其後神日本磐余彥尊の御稱名をハツクニシラス天皇と稱へ奉り世々の大御則に大八洲國シロシメス天皇と稱へ奉るをは公文式とは爲されたり即ち御國の御先祖傳來の御家法は國をシラスと云ふ言葉に存在して居ると云ふとを考へなければならぬ此國を知り國をシラスと云ふとは各國に例のないと各國に比較を取る見合せにする言葉かない今國を知る國をシラスと云ふとを本語の儘に支那の人西洋の人に聞かせたならば支那の人西洋の人は其意味を了解するとは出来ない何となれば支那の人西洋の人には國を知り國をシラスと云ふとの意欲か初めより其腦髓の中に存しないからである

三島毅曰く諏訪の勝海内に名あり而して其土神を諏訪大神と爲す實に大己貴尊の第二子なり其土豪を諏訪氏と爲す出る所詳にせざるも鎌倉府の時始めて著れ後徳川氏に屬し其遺族永存す土人相傳ふ其系實に大神に出つと想ふに或は然らん然らば則ち民の舊君を慕ふは即ち大神を敬する所以なる歟

栗田寛曰く神功皇后の新羅を征する時も田村麿の蝦夷を討する時も諏訪神社現出したりと新羅の



如きは雲霞の如く神兵のあるを見て大に恐れ故に戦はずして降ると云ふ  
爰に國土奉還の議一決し大國主尊は其子事代主命を始め其子孫百八十神をして天孫を守護せは敢て  
違ふ者あらしと云へり

久米邦武曰く大國主命の子凡有一百八十一神また庶兄弟八十神などいふは必ずしも數字に泥ま  
すして其多きをいふと見る子といふは其門族の汎稱にして猶子分といふか如し姓尸なき時代の語  
と見るべし

千家尊福曰く大國主神の種々の辛苦を積み重ねて漸く國を開き民を治めなされたるのも皇祖の需  
によりて故障をいはず速に政權を奉りなされたるは御遺徳の然らしむる所にて若しも其時に大國  
主神の日本國万世の爲に上を犯すものなき忠君の國風を作り置かんとおの思召かないならば國民の  
尊上の心もかくの如くはありやなしや何とも申し難き事である大國主神の吾若し防かは國內の神  
皆防かん今吾去り奉れば誰か服せぬ者あらんと仰せられたる通り全國舉りて服従したるを以て見  
れば若し其時に防ぎなされたらは輩下の者は皆大國主神と共に矛を持ちしかも知れず大國主神の  
大功ありて仁愛の徳は國民を懐け武勇は服さぬ者なくして全國の人心は大國主神の向背によりて  
定まるといふ所なるに大功を以て傲らす武勇を以て争はず速に天勅に應じなされたるは天子様の  
万世の大幸福のみならず國民の永遠に國を誤らざる大恩徳と申すべきものである然れば日本國の  
精神は忠君の精神なれば國民たる者は大は國家の爲小は一身一家の爲になす事の上にては假初に  
も此精神に恃ることありては天子様の罪人のみならず國民一般の罪人にて皇祖又大國主神に對し  
ても罪を免るゝとならぬものなり

成島弘曰く惠比須は俗傳久しく素盞鳴尊の兄蛭見なりとす攝州西宮祠傳に云ふ夷子は即ち神代紀  
載する所の蛭見なり生れて三歳脚痿て立たざるを以て船に乗せて之を放ち棄つ漂ふて攝州武庫の

浦に寄れり土人之を祀る頗る靈驗ありと云ふ然れども其大己貴神に配する所を以て考ふれば蛭見  
には非ずして事代主命たると疑なし日本紀に曰事代主神遊行在<sub>ニ</sub>於出雲國三穗之崎<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>釣魚爲<sub>レ</sub>  
樂と以て證すへし蛭見に至ては釣魚のと無く又彼の支離の人を福神とするの理なからん且大己貴  
神と事代主神とは父子此葦原中國の首長なりしか天孫の威徳を尊崇し國を譲り避け隠れ富裕に世  
を送られし故に福神として祭りしと遠く想像すべし

石川義形曰く古史に大國主尊は國を天孫に譲るとあるも譲りたるにあらず奉還せたるものなり何  
となれば此時代は群雄割據又は封建制度類似の有様なれば天孫か統一の政を布き給ふ爲め各國首  
長に其領土を奉還せしめたるものにて神武天皇か統一の政を布き給ふ時に饒速日命か其領土を奉  
還したるも亦同じ

大國主尊は又吾治むる所の顯露の事は皇孫當に治むへし吾は將に退て幽事を治めんとすと云へり

山崎嘉曰く顯露の事とは人身を支配する政なり幽事とは人心を支配する政なり  
副島種臣曰く垂仁紀に曰ふ天照太神は高天を治め大國主神は大地を治め皇孫は葦原國八十魂神を  
治むと魂神とは何ぞ人民を謂ふなり何ぞ人民と謂はすして魂神と謂ふや蓋し皇孫の職掌人民の魂  
神を治めて人民の形体を治むるに非ず故に魂神と謂ふなりと

千家尊福曰く大國主神皇祖の勅に奉答して我治むる顯露の事は皇孫治め給へ我は幽冥の事を治む  
へしと建國の基礎如此なれば我國の國礎は即皇基にあること明かなり故に帝室は國の基礎にして  
向來君主專治を改めて立憲政體とし國民は參政の權を興へらるゝも倍皇基をして鞏固ならしむる  
の外ならず是建國の本義にして之を保全する政體變異して古今其制を同じくせざるも万古一貫動  
かすへからざる所なり神武天皇の詔に大人の制を立つ義必時に從ふ苟も民に利あらは何ぞ聖造を  
妨げんと又崇神天皇の我皇祖諸天皇の宸極に光臨するものは豈一人の爲ならん蓋し神人を司牧し天



下を經論する所以なりと勅し給ひ又仁德天皇の勅に君は民を以て本とす民の貧は朕の貧なり民の富は朕の富なりとあるは治國の本旨を勅し給へるものにて之を以て帝室は人民と利害を共にし給ふ者にて皇基の鞏固なる否とは國民の利害に關係の大なることを知るべし然れば帝室の鞏固を計るは日本國民の最大義務なるを知るべし試に思へ國土大造の功徳ありて此國に主たる大國主神は治國の大權を捨てず猶皇基の鞏固ならんことを希望して幽事を掌りて守護せんと勅し給へり利之曰く山崎と副島との説は反對の如く見ゆれと一は國土奉還の後を謂ひ一は國土奉還の前を謂ひしものならん

大國主尊は櫛八玉命を膳夫と爲し八十平食を作り燧白と燧杵を以て火を鑽出し出雲國多藝志の小濱にて千尋の繩を打延へて釣たる鱧を料理し之を献らんと云へり建御雷命は進んで東國を鎮撫し葦原中國の平定を奏す

高木敏雄曰く鑽火の式は祭祀の式中にて最も重要なものとして今日迄傳れり世界何れの國民に於ても火に關して或る説話を傳へざるものなく太古時代に於ては至る所火の神聖視せられし形跡あり希臘羅馬の火の神の殿堂に火の消滅せしと云ふ迄もなく印度に於ては今日迄太古の火を傳へて絶たず我國俗亦古來火を神聖視して之を粗忽にするを謹む終歲火を相繼て新にするを忌む者今日尙諸國に少からず出雲に於て神火の繼承は國造の第一の務なりし而して其因て來る所を詳にするもの獨り古事記の彼の記事あるのみ唯此一事によりても彼の記事の貴重すへきとは知るべきなり國造の職務として神火相續の重要な事なりとは大社志に見ゆ  
千家尊福曰く神火と云ふものは代々保存して今日迄傳つてあり古代の燧板といふものか一家の重寶として傳へてあります此燧板は石の様に爲て今では毎年新嘗祭の時は熊野神社より燧板と燧杵とを持參し其れを以て火を鑽出し新穀を煮て神前に供する式であります是れは古い所では國造が

今の國幣中社意宇郡熊野村の熊野神社に參向して式を行ひ後には同郡大庭村の神魂神社にて祭式を執行しました燧板は何なる形かと云へは槍を以て造り長さ三尺位にて其板に杵即ち丸い棒の様な小木をあてゝ操出し新嘗祭には國造か必奉仕せねばならぬとて他の祭事の如く名代で済むといふ様なとはありませぬ又百番舞とて國造が左右の手に櫛を持ち琴板の拍子に合せて舞ふとかあります

大日靈尊は太子正勝吾勝々速日天忍穗耳尊を君臨せしめんとして天忍穗耳尊の爲め高木命の女万幡豊秋津姫を娶りたれば天火明命と彦火邇邇杵尊とを生む因て大日靈尊は邇邇杵尊をして君臨せしめんとし思金命、手力男命、天石門別命を副給へ手つから三種の神器を皇孫に授け豊葦原瑞穗國は我子孫の王たるへき地なれば汝就て治むへし此鏡を以て我を見る如くせよと詔給へ思金命を以て大政を總理せしむ後大日靈尊及び思金命を伊須受宮に拜祭る今の伊勢大神宮是れなり

北畠親房曰く天照太神皇孫を下し給ふ八百万神勅を承けて御供に仕へ奉る諸神の上首三十二神あり其中に五部の神と云ふは天兒屋命(中臣の祖)天太玉命(忌部の祖)天細女命(媛女の祖)石凝姥命(鏡作の祖)玉屋命(玉作の祖)なり此中にも中臣忌部の二神はむねと神勅を受けて皇孫を扶け守り給ふ亦三種の神寶を授けまします先づ豫め皇孫に勅して宣はく葦原の千五百秋の瑞穗の國は是吾子孫可爲王地也爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣又大神御手に寶鏡を持給ひ皇孫に授け祝ひて吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡と宣ひき八坂瓊の曲玉天の叢雲の劍を加へて三種とす又此鏡の如くに分明なるを以て天下に照臨し給へ八坂瓊のひろかれるか如く曲妙を以て天下を知しめせ神劍を提げて順はぬ者を平け給へと勅まししけるぞ此國の神靈として皇統一種たしくまします事誠に是等の勅に見たり三種の神器世に傳ふる事月日星の天に在るに同じ鏡は日の體なり玉は月の精なり劍は星の氣なり深きならひあるべきにや



抑かの寶鏡は先きに記せる石凝姥命の作り給ひし八咫の御鏡、玉は八坂瓊の曲玉、玉屋命の作り給へるなり、劍は素盞鳴尊の得給て太神に奉られし叢雲の劍なり、此三種に就きたる神勅はましく國を保ちますべき道なるべし、鏡は一物をたくはへず私の心なくして萬象を照らすには非善惡の姿あらはれずといふ事なし其姿に従ひて感應するを徳とす、是れ正直の本源なり、玉は柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり、劍は剛利決斷を徳とす、智慧の本源なり、此三徳を禽はせ受けすして天下の治まらむこと誠に難かるへし、神勅明にして詞約かにむね廣し、刺神器にあらはし給へりいと忝なき事にや中に鏡を本とし、宗廟の正体とあふかれ給ふ鏡は明を形とせり、心性明らかなれば慈悲決斷は其中に在り又まさしく御影をうつし給ひしかは深き御心を留め給ひけむかし

又曰く内侍所は神鏡なる八咫の鏡と申す正体は皇太神宮といはひ奉れり、内侍所にましますは崇神の御代に録かへられし御鏡なり、村上の御時天徳年中に火事にあひ給ひき、それまでは圓規かけましまさへりき、後朱雀の御時長久年中重ねて火ありしに灰燼の中より光をさへせ給ひけるを納めてそ崇め奉られけるされと正体は恙なく、万代の宗廟にまします寶劍も正体は天の叢雲の劍と申す、熱田の神宮にはひ奉れり、西海に沈みしは崇神の御代に同じく造りかへられし劍なり、失せぬことは末世のしるしにやと恨めしけれと熱田神あらたなる御事なり、物知らぬ類は上古の神鏡は天徳長久の災にあひ草薙の寶劍は海に沈みけりと申し傳ふることあるにやかへすくひかことなり

源頼朝曰く凡そ我朝六十餘州は立錐の地たりと雖も伊勢太神宮の御領ならぬ所あるへからず、頼朝曰く大日靈尊の徳は窺測るへからざる、雖も之を神器に徴するに得て言ふべきものあり、夫れ鏡は明なり、劍は武なり、璽は仁なり、信なり、仁信明武天に繼ぎ、民に君たるの道盡せり、故を以て子孫に遺して曰く此を視ると猶我を視る如くすべし、國祚の隆當に天壤と窮り無かるへしと其言の後に驗あるに因て其徳の前に基くと知るべきのみ

藤田彪曰く赫々たる神州は天祖の天孫に命し給ひしより皇統一姓にして諸れを無窮に傳へ天位の尊きこと猶ほ日月の踰ゆへからざるか如し、万世の下徳、舜禹に匹ひ、湯武に伴しき者あると雖も亦唯、一意上を奉し以て天功を亮にすることあるのみ、万一禪讓の説を唱ふる者あらば凡そ大八洲の臣民たる者は鼓を鳴らし之を攻めて可なり、況んや口に籍き名に託するの徒は豈に種を神州に遺さしむべけんや

土方久元曰く天壤無窮の勅、寶鏡の誠、實に忠孝の基く所にして秩序の根する所なり、故に此忠孝の大義に則りて以て秩序を誤らざらんとを勉むるあらは庶幾は太平を天地の悠久に傳へ後昆をして幾回の紅花綠柳に逢はしめ、天漢雨露の恩に沐浴せしむるを得べし、是れ即ち人生の常務國民の本分なり

東久世通禧曰く皇祖神勅を奉し降りて大八洲に君臨し給ふや大義嚴正、彝倫分明、万世臣子の遵奉すべき大道寔に爰に確定し爾來上下之によりて緝睦、人心之によりて忠誠、海内安寧にして國威四方に振暢せり

千家尊福曰く天壤無窮の神勅は君臣の大義を教示し給ふ所にして皇基の由て以て定まる所國體の由て以て起る所なり、故に此神勅を敬戴して皇基を万世に奉護し國體を無窮に保持するは臣民の義務にして神明に敬事するの一大要旨なるを知り至誠以て其道を履行すべし

元田永孚曰く我邦の一系万世の君たるは天祖天孫の至仁至明の誠より出て天下の爲め万世不易の道を立て玉ひし者なり、毫も王家に利する私心あるとなし蓋も天に二日なく地に二王なし、天日に替りなければ人君に易りあるべからず、一度此國の君と爲りては万世易るべからざるは天地日月不易の道なり、若し此道理に違ひ君を易ふる時は上下紛乱天下人民の困苦言ふべからざるなり、我天祖天孫此道理を見ると誠に至明にして其天下人民の爲めに慮る實に至仁なりと謂ふへし、堯舜至公至平



の心と我天祖天孫の至明至仁の心と同一の盛徳なりと雖も其國体君道に於ては我邦を以て優れると遠しとす

谷干城曰く自家の白飯より隣家の麥飯とかいふ様に變た物か貴い様に思ふ隨て完全無缺なる自然の道か何時しか他物の爲めに蔽はれ漢學に耽り佛學に耽り種々雜多のものに蔽はれて來ましたか世の中には自然の眼力の有る者が存して居るに就て愈々我道の貴いと云ふと分ります今を距ると五百七八十年前僧に師練と云ふ者が出家てありながら日本は古今無類なる道が存して居る日本と云ふ國は奇体な國である云ふとを申れたが元享釋書之王臣傳論に詳に掲げてあります此人の論は支那四百州に於ても種々様々に世か變り君か變り親を殺すなど種々様々なる無道なるとがある又彌陀の本國なる印度に於ても種々様々の不都合のとある然るに日本に於ては天道自然の道三種の神寶に存して天壤無窮と云ふ教を立てさせられたるに因て國家を治めさせられた譯で少くも外國より侮を受けたとは無いところか支那は猘猶獯粥匈奴等を初め散々に困められ府庫の金を傾け皇室の淑女を與へ甚敷垢辱を蒙れり印度は閻浮の本邦なれども制を遠夷に承け八千里疾象の事があつた如來の在世てさへ斯の如くてあつたから滅後は尙更の事である實に我が日本は大乗之國閻浮界至治之域であると申ました我輩も八千里疾象のとは調へんと分りませぬか大藏の奈女者域經と云ふ書物にありますと何しろひと目にあつて早い象にても乗て逃げた云ふ様なる不体裁のとて有りませう此師練と云ふ人は出家であるが日本程立派な國は無い貴い教は無大乗國であると言ひました佛者にして斯の如く我國の立派なことを知て居るに我國の立派な諸先生は何なる積りて居られるか外國の君を弑し父を無みするを殊の外信仰しました今日は餘程恢復しましたかまた父母は輕い者に爲て居り君は殆ど無いもの様に思て居る者かあります兎角人間は自尊の心かなければ身を有つと出来ませぬ況んや一國を有つに自尊の心か無くてはなりませ

ぬところから近來事物の開けるに従ひ奇なるを好む様になり佛道儒道か道入て來た時の様に善惡の差別なく西洋のものなれば一も二も其れか宜ひ様な考になり甚敷に至ると自から稱して夷狄野蠻と言ふ者かあるに至りました恰も支那學の盛になつて孔子の道を取違ひたる時即ち貞享元祿享保の頃物徂徠太宰春臺などの出ました時か其通てあつて徂徠の如きは自ら稱して東夷物茂卿と云ふと掲げる様に爲りました近來の歐化主義、外人尊拜主義は物茂卿杯か自から東夷と言つたと同じ事でありませら

前田正名曰く歐羅巴人は我國民は多神教にして又切腹するを以て野蠻なりと爲し我國の人をも亦然りとする者あり是れ大なる誤りなり人自から侮つて然る後に人之を侮る故に余は多神教とは己の祖先を祭り又は國家に功勞ある人を欽慕するものにして切腹は國家の爲め一命を擲ち又は廉耻を重んずる爲めにするを辨明し嘗て佛國に在る時我國の忠孝節義を知らしめんと欲し一の演劇を設けて彼等に見せし所大に感賞し是より多神教と切腹の野蠻にあらすして反て賞賛すべきことを知る者あるに至れり

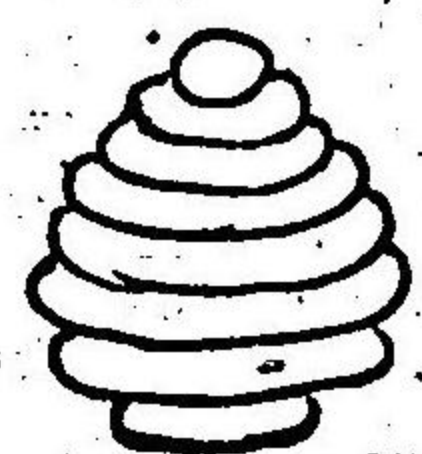
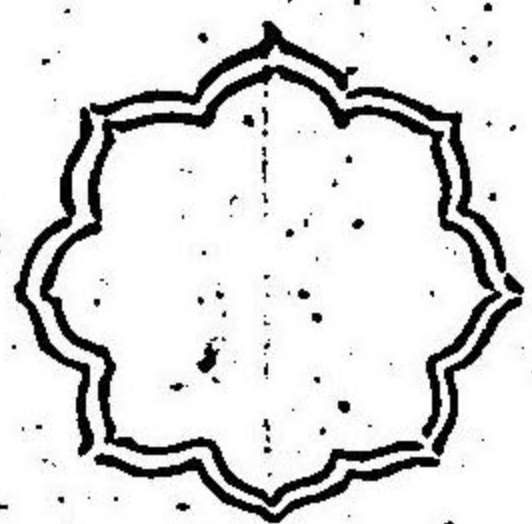
田中芳男曰く天孫降臨の時既に五穀畜禽蚕等も備はり又餅酒盞等の物もあり又柵欄姫の織るとも見ゆれば人民の生活に必需の物を耕作畜養し若くは製造して其用に充てたりならん次て神武天皇の朝には埴土を以て器物を造るとあり又牛肉、酒、飴、韭、菘、穀、麻等の事も見へたり

小中村清矩曰く中臣壽詞の中に天孫降臨の時「皇御孫尊の御膳都の水は宇都志國の水に天都水を加へて奉む」とあり是れ見ると飲水に心を注げるとは神代にも有つたと見えます

利之曰く耶蘇教にも回教にも豫言者を崇ひあれと凡そ世界中に最も大なる豫言者は我が天照太神に如くは無し何となれば皇祚の隆なるは常に天壤と窮り無かるへしとの豫言は二千五百餘年後の今日に至る迄少しも易ることなし此の如き豫言者は決して天下にあらざるへし又今を距ると七百



餘年前高倉天皇の御宇安元二年神祇權大副大中臣親俊なる者神寶圖形神祕書を著し三種の神器を  
掲載せり該書は久しく日野家の秘藏として世に公にせられざりしか三種の神器は我邦人の最も知  
らんと欲して知る能はざりしものなれば其形は果して然るや否やは判らざれども参考の爲め爰に  
掲ぐ又本書に掲ぐる所の古物の圖は何れも参考の爲めに載せたるものにして神代の器物のみにあ  
らざれば讀者宜しく判別せらるへし



大日靈尊高木命に命し天細女命を召し諸國に案内すへき者を選はしむ此時猿田彦命自から進んで教  
導の任に當らんとを乞ふ邇々杵尊は天兒屋命、木玉命、天細女命、石凝姥命、玉祖命等を従へ高天原の  
大殿を出て天八重雲を押排き天浮橋に立ち諸國を巡行し遂に日向に至り朝日の直刺國夕日の日照國  
なれば美地なりと詔給ひて底津石根に宮柱太しり高天原に水椽高しりて都を高千穂に奠め給ふ天忍  
日命、天津久米命等頭槌の刀を佩き弓矢を以て之を護衛せり

新井君美曰く天下を治むる大臣の中に婦人のあるを彼是と云は事理を解さざる者なり武王は手に  
乱臣十人ありと云はれたるを孔子は婦人あり九人のみと云へり五部の臣に婦人があるも決して怪  
むに足らず

久米邦武曰く排天八重雲稜威之道別といふは道すから不順の者を打拂はれたる替語なるべし  
細川潤次郎曰く天孫の西徧を治めて中州に據らざるとは深く怪むに足らず蓋天孫は猿田彦命の導  
くに任せ猿田彦命は當時に在て最も美地とすへき日向に導きたり日向は神代の所謂筑紫にして筑

紫は美の字の義なりと謂へば日向は神代の美地にして天孫其居を美地に定む故ら邊鄙の地を擇て  
之に都すに非ず又日向の義を取るにも非ず

田口卯吉曰く古事記に據るに天孫瓊々杵尊か筑紫日向の高千穂に降り玉ふや此國は韓國に向ひ  
(中畧)朝日の直刺國夕日の日照國なり是れ吉き地なりと宣はせ玉へり(本居宣長は之を空國と同  
義なりと述べたれども久米邦武氏の史學雜誌第一號に於て論したる所を正當とす舊事記に於て明証  
あり是れ皇孫は此地の韓國半島に向へるとを逆觀し玉へるなり又姓氏錄に據るに新良貴氏は彦波  
瀲武鸕草葺不合尊の男稻飯命の後にして是れは新良貴國に於て即ち國王たり稻飯命は新羅國王  
の祖なりと書せり是れ古事記に於て稻水命は妣の國として海原に入りませりと云ふに暗合するも  
のにして稻水命も亦新羅を經營し玉へるなり又新羅王の子天日槍の我が邦に歸化せしは日本書紀  
に垂仁の三年と記すれども天日槍の玄孫多遲摩毛理等か垂仁の朝に仕へし有様を思へば彼れの  
新羅より來りしも亦神代ならざるを得ず又延喜式神名帳に據るに出雲國に韓國伊太氏神社と稱す  
るもの六座あり伊太氏は即五十猛命にして之に韓國の冠詞を添へたるは以て其因縁あるを証す  
へし又出雲風土記に據るに杵築の埜は素盞鳴尊の男臣津命か栲食志羅紀の國を引來て縫足し玉へ  
る所なりとの古文詞あり(伴信友の中外經緯傳)是れ當時出雲國は新羅と交通の街路なりしとを証  
するなるへし

松本愛重曰く出雲風土記意宇郡の條に國引の故事といふ面白い文がありますか其中に「國引坐し  
八束水臣津野命か栲食志羅紀の三埜を國の餘有ありやと見れば國の餘有ありと詔給ひて童女の  
胸鈕執らして大魚の支太衝わけて波多須々支穗振わけて三身の網打かけて霜葛來るや」に河船  
のもそろくに國來々々と引來て縫へる國は八穗爾杵築の御埜なりといふ一筋がある此大意は新  
羅には國の餘りがあるからそれを引來て出雲の國に縫合せたといふとでありますが如何に太古の



神様でも國を引ッて御出になる譯には行きませすまいからこれは人民を引連れて御出になつたので國引とは謂ゆる移民拓殖のことを意味するので何ふ海岸の新羅には人民が繁殖して國民の餘有があるから其幾分かを分割し來たつて出雲地方に移民拓殖したといふことを斯くの如く語り傳へたものであらうと思ひます

サトー曰く上代日本皇帝の宮殿は木造にして其柱は現時の築造の如く廣大なる平石の上に建てたるにあらすして直に地中に立たり其組立たる材料は柱、梁、桷、戸、窓、架等にしてこれを結構するに葛藤等の如き蔓草の長き纖維にて製りたる繩を以て結びたり又地床は低くありしなるべしされはこれに住する者其壘上に座臥する時往往蛇蝎の害を免かれす蓋し上代にありては現時の如く田野も開けされは昆蟲の敵も多かりしなるべし

チャムパーレン曰く當時家屋の周圍に垣を用ひしと又木製の戸ありて或は鉤を以て結へり此戸の製は現時の日本にて用ゐる屏風の如き引戸とは異なりて反て歐州風に似たり又家の牖戸は只穴の如きものにてありしと見ゆ又敷物には皮疊菅疊を用ひしのみならず富貴の人は絹疊を敷きたり栗田寛曰く古へに所謂八尋殿あり齋服殿あり殿疊も見へ出雲大神の爲めに建る天日隅宮の高大なる柱は高く太く板は廣く厚く云ふ後世迄其制を違へず數十丈の高きに及へり（今は少しくかはる事もあれど尙高狀なり）神武帝の橿原宮を宮柱太しりたて搦風高知りと云ふ豈矮陋の屋ならんや豈蛇蝎の登るべき低き地床ならんや神代の時に天皇の宮牆の語あり景行紀に搦風見へ神功紀に大殿あり應神仁徳に高臺あるもの合せ考へしサトーの書中往々皇帝の事も賤民の事も混して一つに云へるは校訂すべき事なり

猿田彦命海邊を巡視し漁夫等に諭し大小の魚類を聚めて天孫に貢獻せしむ此時漁夫等の貢獻したる魚類中に海鼠あり天細女命其貌の醜きを惡み小刀を以て口を拆く故に今に海鼠の口拆けたりと云ふ

岡本監輔曰く魚介を聚め其天孫に仕ふるや否やを問ふとあるは其性能く供御に適するや否やを檢するものなり

利之曰く上古未だ貨幣あらざる時人民己の業として得る所の五穀及び鳥獸魚介を貢獻す古史に鱒の廣物鱒の狹物とは大小の魚にして毛の鱗物毛の柔物とは大小の鳥獸なり  
邇々杵尊笠沙の碕に於て一の美人を見給ひ其身元を尋ねたるに大山津見命の女木花開姫と云ふ者なり之を納れ妃と爲さんと欲し其旨を詔給へば吾は父あり父の許を得されは從ひ難しと云へり因て其父に詔給へば父は大に喜び其姊石長姫も併せて百取の机代の物を持たしめて之を奉れり

釋雲照曰く皇孫瓊々杵尊か木花開姫命に會ふて吾か妻たらんとを宣らせ給ひしに木花開姫命曰く妾に父あり其許を得されは天つ神の詔なりとも從ひ難しとを以て其貞良節操の道の確然として動かすへからざるものありしは明らかである

岡本監輔曰く大山津見神姊を併せて之を納るゝも天孫二女を娶らざるは乃其徳の大に人に過ぎたる所以なり蓋し二女を納るゝは天照太神の意に非ず故に天忍穗耳尊以下大統相承け以て神祖に至るも未だ其二女を納るゝを聞かず

邇々杵尊は其姊を戻し木花開姫を納れて妃と爲し僅か一宿にして姪めるを以て邇々杵尊は我が子にあらずと詔給ふ妃は天孫の子なれば天神之を冥護する故に如何なる場合にも安産すべし若し他の子なれば安産せず故に之を以て判断せんと乞給ひへり是に於て出産の時一室に入れ之に火を放てり此時三人の皇子を安産し一を火照命一を火須勢理命一を火遠理命又の名は天津日高彥穗々出見尊と曰ふ是れは火の燃起る時、火の熾りの時、火の衰へたる時、に因て名つりたるものなり此三子長して火照命は海佐知毘古として鱒の廣物鱒の狹物を取給ひ彥穗々出見尊は山佐知毘古として毛の鱗物毛の柔物を取給ひき或日兄弟にて其獵漁を更へたる所彥穗々出見尊は一魚も得ざるのみならず鉤を失ひ



たる故佩く所の劍を破り五百の釣を造り償へど火照命は受けずして其失ふ所の本釣を乞ふて已ます  
彦穗々出見尊は之を愛ひて海邊に出て、彷徨せり時に塩推の老夫あり來り彦穗々出見尊を見て其愛  
ふる所を問ふ彦穗々出見尊は備に之に告げたれば老夫は彦穗々出見尊に向ひ是より海を隔て一の土  
地あり其土皆漁魚を以て業と爲す其土の長を綿津見命と曰ふ君往て其女に議れど老夫は己の船に載  
せ彼の地に到る彦穗々出見尊は綿津見命の門前に至り婢の出で水を酌むを見て水を乞ひ水を飲ます  
其器に頸に掛けたる玉を入れて返せり婢は其人の尋常の者に非ざるを見て主人の女豊玉姫に告ぐ豊  
玉姫出來り見て父綿津見命に白す綿津見命は天孫なることを知り家に入れ皮壘と絹壘とを八重に敷き  
其上に坐せしめ鄭重に之を待遇し遂に其女豊玉姫を奉れり三年を経て彦穗々出見尊は釣の事を思出し  
竊に歎き給ひければ綿津見命之を怪み彦穗々出見尊に向ひ我が女の語るに三年坐ませと恒に歎きた  
るとなきに今夜大に歎かせらるゝは何事をやと彦穗々出見尊は其釣を失せしことを語り給ふ綿  
津見命之を聞き領内の漁業者に命し若し魚にて釣を含むものを得たらば其釣を出せと言觸したる所  
果して鯛の口中より出てたりとて其釣を奉る者あり是に於て綿津見命は彦穗々出見尊に誨へ奉るに  
此釣は不幸の釣なりと稱して兄に與へ兄か高田を作らば君には下田を作り兄か下田を作らば君には  
高田を作り給へ吾は水を掌るゆる三年の間兄の田に水を灌かす兄若し恨怨て攻來らば潮水の満干を  
測り之を防ぐへし兄は水の事を知らざる故に窮すべし若し此時に充分兄を宥めなれば其曲れる心  
を改むへしと即ち船人を召集めて最も熟練にして最も迅速に船を操る者を選び之に命して彦穗々出  
見尊を送り奉りぬ此時其船人に小刀を授け之を賞す後世其船人を佐比持神と稱す彦穗々出見尊は綿  
津見命の謀を以て遂に其兄の曲れる心を改めしむ

岡本監輔曰く信濃國埴科郡に玉依姫の神社あり蓋し今の松代の近傍東條村の池田宮なりと其宮は  
明る玉を以て神体と爲す青紅白三種の數百顆あり光明透徹自然に分れて小粒と爲り漸々大に至る

と人造に似す正月七日神主村人と相會し石函を開て之を檢す其分れたる者を生れ石と曰ひ外より  
之を納る者を來たり石と曰ふ石の生長するとは古より之を傳ふ此事頗る異聞に屬す豈に一種の精  
靈の氣あり彼此相感して然る乎此等の事に據り之を言ふに未だ乾滿珠の潮汐を豫知する者無しと  
謂ふべからず

利之曰く古事記に火照命は海佐知昆古として鱧の廣物産の狹物を取給ひ火遠理命は山佐知昆古と  
して毛の柔物毛の麤物を取給ひきとあるより鹽盈珠と鹽乾玉とを出し或は溺し或は救ひ此の如く  
して火照命を惣苦給ふとあるに至る迄の大意を考ふるに火遠理命の取給ふ所は大山津見の族の支  
配せる所にして鳥獸の貢獻多き土地を云ひ火照命の取給ふ所は綿津見の族の支配せる所にして魚  
介の貢獻多き土地を云ふ此時縣主の如き者國內に多くありしも大山津見と綿津見との如く多くの  
土地を支配せし者はあらざるべし火遠理命か釣を失ひ火照命か其失ひし釣を得むといひけるは火  
遠理命の領内に一の變事の起りしに拘はらず火照命か非理を以て火遠理命を責め給ひしに依り火  
遠理命は其責めに耐へずして遂に綿津見に寄りて援を求めしかは綿津見は之を優待し且其女を薦  
めて妃と爲し又勸めて山海の交換をなさしめ火遠理命は曩きに領せし外戚大山津見の支配せる國  
土を回復し加之に綿津見か新に親戚と爲り援助を爲したれば山海の貢獻は盡く火遠理命に歸し兄  
か下田を作らば君には高田を作れ兄か高田を作らば君には下田を作れとは獵族漁族の貢獻が既に  
手裡にあれば稼族の貢獻する米穀の如きは大山津見の支配内あるものにて綿津見の支配内にあ  
るものにて火照命の意に任せよとの事にして想ふに此時農業も既に開けて稼族の貢獻も多かり  
しなるへけれと獵族漁族の貢獻か其大部分を占めたるものならん故に火照命は遂に困難して屈服  
せし比喩なるべし

又曰く古事記に鹽盈珠鹽乾珠を持つとは當時の者を服従せしむる方便にして新田義貞か潮の満干



を測り黄金作りの大刀を海に投し海神に祈り潮を退かしむると言傳ふるが如くなるべし

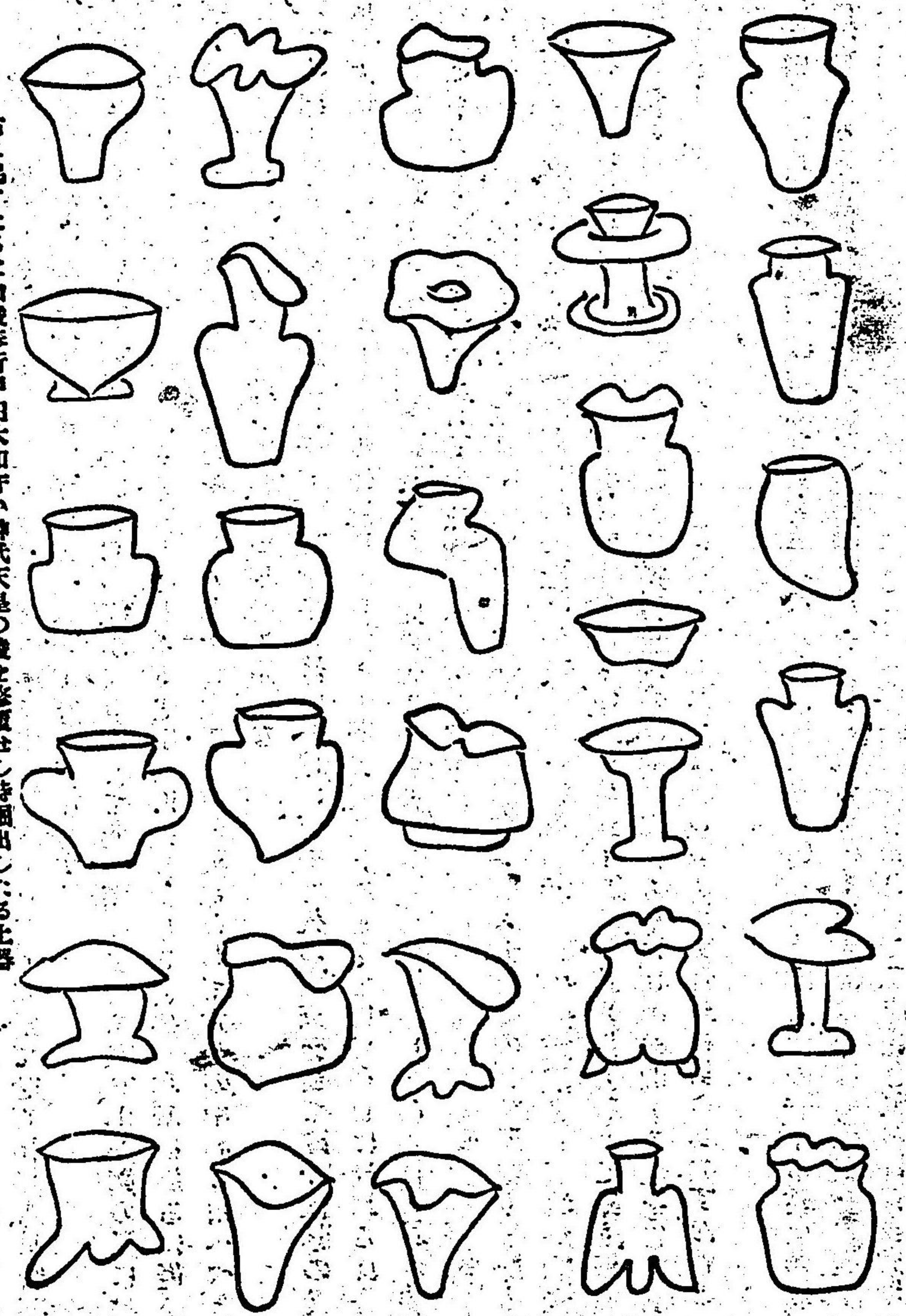
其後豊玉姫自から來り妾已に妊身せり天孫の子を海邊の僻地に産むべきにあらず故に來りたりと是に於て産屋を建て鞠茅を以て葺かんとし未だ葺合へぬに産氣を催し耐へかたく成給ひ産屋に入り將に出産せんとする時豊玉姫は彦穗々出見尊に向ひ他國の人は出産の時故郷の形に依て出産するが便利なれば妾も故郷の形に依て出産せん而して妾は海邊の僻地に生長し高貴の出産法を知らざれば出産の時は必見給ふ勿れと云へり彦穗々出見尊其言を奇として竊に伺見給へば豊玉姫は之を知り其醜体を顯したるを耻ち子を生置き父の許に逃れ歸りたり其御子を天津日高彦波瀲武鞠茅葺不合尊と曰ふ豊玉姫は其伺見給ふを耻ち且つ恨みつゝも戀しきに耐給はずして其御子を養育せし縁に因て其妹玉依姫に附て歌を奉りぬ其歌に「赤玉は、緒さへ光れど、白玉の、君か儀ひし、貴くありけり」と彦穗々出見尊は答給ひけるに「沖つ鳥、鴨とく鳥に、吾か寐し、妹は忘れし、夜の毎くに」との歌を以てせり

利之曰く古事記に豊玉姫を龍の化身の如く記しあるは語部か後世をして奇異の思を爲さしめ尊崇の念を深からしむる爲めに龍の如く説かれしものなるべし

天津日高彦波瀲武鞠茅葺不合尊其妹玉依姫を娶りて五瀬命、稻水命、御毛沼命、若御毛沼命を生む五瀬命は神武天皇東征の時流矢に當り崩し給ふ御毛沼命は常世國に渡り稻水命は妣の國海原に到る

田口卯吉曰く余は神武の時に當りて海外の交通極めて頻繁なりしを見る何となれば御兄御毛沼命は常世國に坐まし稻水命は新羅に坐しければなり而して新羅王の子天日矛も此時代に歸化したる

若御毛沼命は一名を豊御毛沼命又の名は神倭磐船彦尊と稱し即ち神武天皇なり  
長岡護美曰く神武天皇御躬の艱難辛苦を顧みたまはず親く四方を經營し國家に不軌を逞ふするも



右に掲げたるは山陵奉行戸田大和守が神武天皇の陵を修葺せし時掘出したる土器圖のにして我先人に寄贈したるものなり此土器は再々陵の側に埋めたりと云ふ



のあれば親が將として是を征し給ひ朝政常に質直を旨とし君臣相親み上下相愛するを以て皇徳海内に沿く皇威海外に輝き帝業丕々の基ひ相樹立するに至り歴代の至尊に於てせられても只管其御偉業を繼述へ玉はんとに致々として務め玉ふと膏肝も管ならず

細川潤次郎曰く夫れ豊葦原瑞穂國は我日本の總稱なり而して此一語に就ても我日本全國の夙に我祖宗の有にして他人の有にあらざるを見るべし然りと雖も西徧を治むると多く年所を歴るに従ひ遠邈の地遂に王澤に霑はざる者あるを致したり此に由て東方の美地にして六合の中心と稱へべき所に遷て之に都せんと欲す此即ち神武の東征せる本旨なり

楠本正隆曰く神武開國以來茲に二千五百五十年東洋の絕域に天長地久の國家を建て淳朴敦厚の大和民族万世一系の皇統を奉戴し君臣の道自から備り五洲の表に巍然として以て今日に至れるは吾人か共に祝し又外人に對して誇る所なり蓋し此の如きの君此の如きの臣此の如きの土は古今を問はず東西を論せず決して其比を見る能はざるへし若し天下に無革命の國ありと云は、我國以外に之を求むへからず他の之を目して君子國と爲すや是れ我が祖宗か古地大鑑識の致す所なりと雖も之に附從する風俗人情悉く其遺烈義訓の表章に外ならざるなり嗚呼忠孝の道爾然として我が國光となる豈に之を保維せざるへけんや夫れ道德なるもの之を講述すれば其範圍洪大なりと雖も俗諺に依り一言を以て之を掩ふときは親切の二字に止るのみ君に事ふるや親切の發顯する之を忠と云ふ親に事ふるや又親切の結果たる之を孝と云ふ其他交を廣ふし事を爲す皆此親切に基かすんばあらざるなり

三島毅曰く萬國第一の文明國は即ち我大日本なりと云はんとす何となれば人倫の一なる君臣の義萬古不易なると萬國中我に及ぶ者なし全國臣民の多分は我天皇の支族末流なれば其天皇を尊崇するは同族か本宗に事ふるなり故に鬼神を祭るとても天照太神を始として我祖先を祭るは皆我父母

を愛敬する孝道より溯りたるものにて我君臣の義は父子の親を兼ね忠孝合一の君子國と云ふべし支那にて古者東方に君子國ありと稱したる所以なり

宮地嚴夫曰く後漢書の東夷傳に東方を夷と云ふ夷は祗るなり言ふ義は仁有りて生を好む故に天性柔順にして道を以て御し易し、君子不死の國有るに至ると有り、註に山海經に云ふ、君子國は衣冠して劍を帶ふと、又云ふ不死の人は壽にして死せずと、並に東方に在りと有りて、又本文に夷に九種有りとして九夷の名を擧げ且東方の諸國を記して其末に、彼の陋き事の有むと有るを引て、以有る焉と或人の曰く陋し、之を如何、子の曰く君子之れに居る、何の陋き事の有むと有るを引て、以有る焉と云て有ますが、范曄が斯様に申えし譯は、孔子道の行はれざるを悼みて、桴に乗て海に浮び、九夷に往て住ば、我道の行はる、事も有むかと、歎息して云ひしを或人之れを聞て九夷は夷國なり、夷國は陋き所には有らぬかと申したれば、孔子之に答へて否な決して陋き所にあらず、九夷は君子の居る國なり君子の居る國にして、何の陋き事の有る可きと云ひしものにて、孔子は漢土にて、古代より東方に君子國と云ふ、禮儀の正しき即ち皇統一系なる本邦有る事を聞て、常に慕ひ居りしを以て道を歎する餘りに、覺せず其赤心を吐露せしものにて、孔子の之れを慕ひしも、大に以有る焉と云ひしもので有り、然るに此九夷と云へるは、即ち日本を指したるものなるを以て、清行朝臣も范史之れを君子の國と謂ひとは書れしものと見なす、併し之れには少か異説も有りて、明の津本清は、九夷は日本のみを指したるものに非ず日本は九夷の一個なりとの説で有りますれど、此は決めて謬説にて、漢土にて古來九夷と指したるは、全く我筑紫の九國の、上古より自然の如く、九域に區別の立ちて有るを云ひしものにて、九夷は却て我日本中の一所を云へる名で有り、此事は既に先輩の考證せしものも有り、且嚴夫も別に君子不死之國考と云ふを著はして夫れに申て置ましたか○爰には委しくは申し上ませぬ併し九夷は日本中の一部と見るも日本の全部と見るも或は日



本を九夷中の一個と見るも夫れには拘けらず君子之れに居るとテ、孔子の只管に慕ひしは、日本なるに違ひ有りませぬ其は何を以て云ふぞとならば、文武天皇紀の慶雲元年秋七月、唐國より歸り來りし粟田朝臣真人が彼國にて有りし事を謂へる語中に始め彼國の楚州鹽城縣の界に到りし時唐人我使を見て何處の使人ぞと問ひける故日本國の使なりと答へければ唐人我使に謂て曰く亟聞海東に大倭國あり、之れを君子國と云ふ人民豊樂にして禮義敦行なりと今、使人の儀容を見るに大いに清し豊信ならず乎と云ひしと申す事がありませぬ是れは孔子の時代よりは凡一千二百年も後の事ですすけれと此鹽城縣の唐人の語に亟聞と云へるを以ても、彼國にて古代より君子國と云ふは其實本邦を指せる事が明かに分ります、又此唐人の語に海東に大倭國有り之れを君子國と云ふと云ひしと孔子の粹に乗て海に浮ばむと云ひしとを相照し考ふるも君子の居る國は東海中に在る事は申す迄も有りませぬ果して然らば孔子の慕ひたるは日本なりしに違ひ有りませぬ然れども馬融や朱熹は又此孔子の語を夷は陋きに違ひ無ければ君子即ち孔子が自ら往て之れに居らば人民風化して其道の行はるべければ何の陋き事の有らむと云ひしものなりとの意に解釋を下して居りますれども是れは孔子の意とも思はれませぬ何故なれば、孔子既に自ら中華とも中國とも夸稱する本國に居てすら、實際其道の行はれざるより、歎息の餘り、九夷に居らむとの念も起りたるでは有りませぬか然れば我往て居らば我徳に化して九夷も陋しからざるなど、は、孔子の意中に於て、決して思ふまじき事でも有ります、孔子若し然ばかり自由に、徳化を施し得るものと信じたらむには、必しも父母の國を離れて遠く九夷に居るまでも有りませぬ即ち自國に居て存分に其徳化を施して然る可き事でも有ります然るに中華と夸稱する本國に於ては、道行はれざる哉と歎息しなからざる其夷狄などの陋む所の九夷に往たらむには自由に我徳化の行はるものと信じたりと爲るは奇も亦甚だのさでは有りませぬか斯の如き自家撞着したる事は孔子の云はざるのみならず思ひもせざる事は決

めて疑ひを容れざる所でありませぬ然るを斯る解釋を爲す者有るに至りたるは畢竟後世に及びて古代東海中に君子國と稱する國の有りし所以を知らず成りしより起りしものか若くは此を知りたるも大聖孔子にして東夷を慕ひたりとするは馬融朱熹等の爲めには甚しく遺憾に思ふ所となりて曲げては君子之れに居らばとも讀做さるゝ語なるを以て強て斯の如き註釋を加へたるかも知れませぬ其は孰れにしても正説でも有りませぬ必是れには惑はされぬ様に致したき事でも有ります釋雲照曰く應神の朝儒道を以て忠孝倫理の道を明に爲させられたるなれども上天照太神より神武天皇に至り神武天皇より應神天皇に至る迄の間數千年若し皇國に君臣父子忠孝の道なかりしならば如何して國家の秩序を保ち外邦を征して畏伏せしむる等の盛業を爲させ給ふとを得へきや是れ智を待たずして觀易き道理なり(中略)又忠君愛國の道は神代より日本固有の徳性にして漢土より渡來せるものにあらずるとは上に述べたる如くしてある加之支那の如きは堯舜禹等の世は帝々禪讓して其道統の傳の如き惟精惟一にして允に其中を執れと宣らせられたるの宣は實に我が天祖の神宣に似たるものなり然るに般より以降周漢乃至唐宋明清等に至る迄互に其位を奪ひ君臣の大義名分茲に於て亡びたりと謂はねばならぬ我國の如きは天祖開國の初より天祖の神宣を繼承奉体して万世一系神代より今日に至る迄少しも違はず君臣の大義名分天壤と共に渝るとなし故に刻論して云は、彼は小忠なり仮忠なり此は大忠なり眞忠なりと謂はねばならぬ故に五倫五常の道忠君愛國の文字は漢土より來りたると雖も其忠君愛國の事實精神に至りては他邦と大に其撰を異にするを知らねばならぬ此倫常即ち皇國固有の公道か即ち神道なり

利之曰く天御中主尊以下即ち別神五柱は世界的神話に屬すべく國常立尊より伊弉諾伊弉冊二尊に至る迄即ち天神七代は世界的神話と國家的歴史とに屬すべく天照太神より鵜茅尊不合尊に至る迄即ち地神五代は單に國家的歴史を以て解釋せざるべからず方今希臘印度の例を引て地神五代に至



# 日本太古史

石川利之著

中篇

## 東西宗教の比較

### 神道は正直勸業尙武を以て教となす

神道は伊弉諾尊と伊弉册尊が天神の命を承けて之を創設し天照太神之を擴張し大國主尊之を大成す其教はマコト即ち正直を基とし之に加ふるに勸業と尙武の道を以てせり孔子は政事に就き子貢の問に答ふるに食を足し兵を足し民之を信ずと云ひ子貢は己ひを得ずして此三つの者を去てんには何れを先にせんと云へば孔子は兵を去てんと云ひ此二つの者を去てんには何れを先にせんと云へば食を去てん古より皆死あり民は信がなければ立たずと云はれたり此食を足すとは即ち勸業なり兵を足すとは即ち尙武あり民之を信ずとは即ち正直あり釋迦も其弟子に向ひ汝等宜しく心を端しくして正直を以て本と爲すべしと云へり耶蘇も多くの人に向ひ心の清きものは福あり其人は神を見るおとを得べければありと



云へり神道の教はマコト即ち眞言又は誠にして口にも心にも偽りなく人に對じて其眞心を盡くすものなり故に菅原道眞の歌に「心たにまことの道にかなひなば祈らすとても神や護らん」とあり正直は佛語にして兩部神道の盛んなる頃此二字を以てマコトに當儀めたるものなり井上正鉄が正は神の教にて直は其教に従ふものなりと解釋したれを是は少しく誤れり然るに余が本書に正直の二字を掲げて誠の字を以てせざるは世俗の見聞に馴れて解し易き故に正直の二字を以てせしあり

徳川齋昭曰く人は貴き賤きによらず本を思ひ恩に報いむ心懸專一と存じ候抑ふ日本は神聖の國にして天祖天孫統を垂れ極を建て給ひしよりよのかた明德の遠きと大陽と共に照臨まし／＼寶祚の隆なると天壤と共に窮なき國なり君臣父子の常道より衣食住の日用に至るまで何一つ缺けたる所なきは皆是れ天祖の恩實にして万民永く飢寒の患を免れ天下敢て非望の念を起す者なきは有かたしと申も恐多き御事あり

會澤安曰く昔者神聖既に神道を以て教を設け民心を釋收したる所以の者は専ら一に出で、固より成規あり而して天に事へ先を祀るの意之を後世に傳へて

民に報本反始の義を知らしむ

帆足萬里曰く天照太神は君と師との任を兼ね神道の教を立て給ひ何事も正直にして詐なく身を潔くし過を改むるを以て人を導き給へり是れ人道の第一にして孔子の忠信を主とし過を改むるに憚る勿れと宣ひしと一致せり又神道は國家を治むるの道にして巫祝の道に非ず巫祝は神に事ふる役人のみ

久米邦武曰く日本には孝悌仁義の語なし只「マコト」の語あり信にも忠にも誠にもあつべく猶推論すれば孝にもあつべく是れ日本の倫理は單に忠の中に行はれたるあり國家も亦た其如く單純ある親族にて形成せられたり

谷干城曰く應神天皇以前儒學も何もなかつた時分にも矢張り天皇は各七八十年も世を治め給ふて其中謀叛の徒もなく上下能く治りしは則ち我國固有の道に由て治めたるものにして決して他の教を用ひたのではありませぬ

栗田寛曰く天祖の教は神代にのみ行はれしにあらず神武の中國を平定するや皇祖天神を祀り崇神の勅に民を導くの本は教化にあり若し教を受けざる者あらば兵を擧げて之を伐てどあり君臣の大義父子の大倫を擴張するものなり故に用明天皇は斯道を指して神道と詔ひ孝徳天皇は隨神の道と詔へり神道とは



我皇祖皇宗の此國土萬民を治め玉ふの大道なり

四

又曰く大山前に頽るゝも驚かず威武も屈するよと能はず利祿も誘ふと能はざるを是れ之を神聖の大道と云ひ是れ之を日本の神教と云ふ

井上毅曰く天日嗣の大御業の源は皇祖の御心の鏡マコトで天下の青人草を知ろしめして力でない心で御支配遊ばして御心に懸けられて御世話を遊ばしたといふとが御國の成立の初めである即ち御問城入彦五十瓊殖天皇の大御宣に我皇祖天皇の宸極に光臨するは豈に一身の爲ならん哉蓋し人神を司牧し天下を経綸する所以なりと仰せられたるが取りも直さず國を知らすといふとは君民の約束であらひ兵力の征服であらひ一つの君徳である

千家尊福曰く道德の本は誠意修身にあり道德の効用は己を正しくして延きて人を正しくし家風を齊へて延きて國風を齊ふるに在り國は家を以て成り家は人を以て成る者にして一家の風儀は即天下の風儀の根本なり己の風儀は即他人の標準あり故に道德の本は己に在りて誠意修身の外あらず誠意修身の要は正直にして偽らざるにあり古來神道の清潔を主とし正直を尊ふは其主意此に在り故に夫婦親愛し父子慈愛し兄弟友愛し朋友信愛し君臣敬愛するの原因は

夫婦父子兄弟朋友君臣等の相互の道德即誠意修身の相合して尊敬親愛の實を生ずるものあり

鈴木敏雄曰く日本神話を按ずるに國土修理は伊弉諾伊弉册二神にはじまりて大國主尊に終る但し大國主神の此事業に少名命彦の與つて力ありしとは忘るべからず

湯本武比古曰く天神の二尊に本教を授け給へる時既に其表物として天沼矛を賜ひたり矛は武なり即ち武を以て國を立つる是れ亦惟神あり而して惟神即ち清淨潔白(正直)の道義的善なる主義を鞏固にするに於て武育の力ありしと知られたり蓋し上古外教の未だ來入せざる時に於ては敬神の教と武育とは此主義を鞏固にする二方便たりしも外教の入りて敬神の教育上に影響を及ぼし其効力をして上古の如くあらざらしめたる後に至りては武育は獨り此主義を養成する方便と爲りたるより後には所謂大和魂の養成は武育の専有と爲りたるかの觀を呈したり又察せずんばあるべからず又大己貴尊は國を平ぐるに廣矛を以てし天祖は天彘雲の劍を以て皇孫に賜ひたる等亦尙武を徵するに足る

石川義形曰く神道の大本は三種の神器に存し正直は彼れ是れの善惡を明にし



て偽なきものなれば即ち智にして鏡に配すべし勸業は文藝醫術より農工商に至るまで之を奨励し人々生活自治の道を立てしむるものなれば即ち仁にして重に配すべく尙武は害を除き暴を防ぎしものなれば即ち勇にして劍に配すべし

小崎弘道曰く我國外交問題及商工業問題に就ては既に業に世人の充分に注意する所となりて新聞に演説に之を論ずる者多く之を論じ盡して殆ど餘蘊なき程なれども獨り道德問題に至りては之を顧るもの少く偶々之を論ずる者あきにあらざれども世人は之を見て却て迂遠の論と爲す者なりとして顧る者少し豈に歎すべきの至りならずや何ぞ知らん道德問題は何れの問題よりも切迫にして今日我國に於ける総ての問題の根本なるを昔時子貢政を孔子に問へるに孔子は食を足し兵を足し民之を信す即ち實業と兵備と道德の三つを以て之に答へたり子貢は尙ほ進て此三者の内孰れか最も重要あるかと問ひたるに孔子は道德を以て最も重要ありと爲し民信なくんは立たすと答へたりき論者或は之を以て迂儒陳腐の言ありと爲すものあらん然れども余は之を以て千古の格言と爲さるを得ず義は國を高くし罪は民を辱しむとは箴言の語あるが是れ泰

西の政治家が眷々服膺し片時も忘れざるの名言なり俗眼より観るときは商工業の振作に於ける殆ど道德に關係あきが如くなれども其の實之が基礎となるべきものは眞に道德なり泰西諸國にて商工業の盛大を致せるには元より多くの原因あるべしと雖も其最大原因は即ち其國民の道德特に商工業の道德即ち信用の大あるに基すと爲さるべからず

### 神道と他教

神道を顧みずして他教のみを奉ずる者は己の父母を棄てて隣家の父母を愛するか如し他教も決して悪きものにはあらざるも既に我邦には神道の在るあり之を奉じ他教も善き所あらば之を取りて其教化を助くべし

藤原鎌足曰く吾惟一の神道は天地を以て書籍とし日月を以て證明とす是れ即ち純一無雜の密意なり故に儒佛道の三つの教を要と用ふべからざる者なり然れども唯一の潤色として神道の光華とし廣く三教の才學を存し専ら吾道の淵源を究めむものは亦何の妨げがあらむ

菅原道真曰く凡そ神國一世無窮玄妙は敢て窺知すべからず漢土三代周孔の聖經を學ぶと雖も革命の國風深く思慮を加ふべきあり



又曰く凡る國學の要とする所古今を論涉し天人を究めんと欲すと雖も和魂漢才にあらざれば其間奥を闡ふ能はず

清原宣賢曰く神道は根抵にして儒教は枝葉あり佛教は華實なり而して世人儒佛の二教に沈淪し神道を研究せざる者あり慨嘆に堪へ可けんや

徳川齊昭曰く我邦風俗の美なると威陵の健きと何も事かけたるにあらざれども後の聖君賢主殊更に人に取りて善を爲し給ひ經書賢人を異國に求め給ひたるゆゑ漢土の書籍渡りきて孔子の道も傳り神國の道もすく明に制度も追々に備りたるとなれば漢土の道も神國の人の學ぶ時は即ち神國を尊ぶ道なり

藤田彪曰く孟軻の道決して言ふべからず然らば則軻の書は悉く廢すべきか曰く奚ぞ其れ然らんや凡そ物に利甚だ大にして害亦甚だ大ある者あり水火是れあり人皆其饒々滔々の患を慮れて烹炊灌漑の用を廢さざる者は其害を惡で其利を愛すればあり軻の王道決して神州に用ふべからず然れども心を存し氣を養ふの論國を治め民を安するの說と異端を辨じ邪說を熄て以て先聖の道を開くに至ては孔子復生すと雖も必其言を易へず人に取て善を爲すは神皇の道なれば則軻の書豈に亦悉く廢すべけんや

帆足萬里曰く神教細節の備はらざるを儒教を以て之を補ふは鐵砲を以て軍陣に備へ遠鏡を以て天學を助け麻黄大黃を以て藥用に供するが如し尤も儒教に非ずとも他教を取ても神教の不足を補ふべけれ唐の國たる本邦と最も近く其外學術多く唐より傳へ得たれば手近なる儒教を取りたるなり

千家尊福曰く我國に於ては神道を奉せざれば國民たるの資格無き者とするの制を立つべし帝位を尊び國體を重しとせば其帝位と國體とに大關係ある神道を尊重せざるべからず國民の神道を重んずるの氣風盛なれば帝位は益尊嚴にして鞏固あるは理の賅易き所なり神道を侮りて帝位の尊嚴を加へんことは決して望むべからざるなり幸に神道は國民の尊重する所にして儒佛を信する徒と雖も尙神道を輕んずる者おければ今新に人心を感化養成するに他の宗教を假用するに及ばず人心中に尊重し來る神道を活用せば其効力速にして國に利あること言を俟たざる所あり然れども神道は儒佛盛に行はれたる時代の久しきが爲めに混淆錯雜したるおと少からずして國民の氣風も亦之が爲に弊を生じたれば其弊害を矯正して神道の本義を明にせざるべからず

谷干城曰く孔子の道でも釋迦の道でも善い事から採る我國の道に違はぬ事な



らどこも採つて我國の飾に使ひ我國の道具にするといふ大なる規模を定めぬと必ず變な反動を起すであらうと存じます三宅尙齋が私の六代祖重遠と應接したものを見るに我國の道と云ふものがあるなら孔孟沙汰はお止めなさいと云ふ手紙が来て居ります其時重遠が答に決して止めるには及ませぬ我國の道に差支の無い道はどこの道でも採ります惟く孔孟の道と雖も湯武の放伐の如き事は採ません其孝悌忠信の如きは我邦の道に適つて居ります私が國學をし國の道を學んで其傍に孔孟の道を講ずるは妨がいと云ふこの手紙がありませ私に矢張り其論者でありませ私に我國の道を本として研究して他の事物を我國の道を助ける滋養物にしたいと思ひます充分に消化すれば他の道も我道に爲てしまひます之を消化せしむるには自尊と云ふ心が無ければ向ふ丸出しに爲てしまつて外を貴んで内を賤む様に爲ります

大隈重信曰く數千年前に一種の宗教此宗教を迷信して種々悪俗が導かれて居るそれを堅く守て居る國は皆衰へてしまひ或は亡びてしまつた所が日本は隨分支那の學術支那の文明の御蔭で進歩した又儒教の日本に利益を與へたることは尠からの文學の上から美術の上又は道德の上社會の上にも儒教と云ふも

の利益を與へて居る又日本の文明史を讀んで見ると印度から來た佛教若くは支那から來た儒教に餘程御禮を言はなければならぬ會て非常に御世話になつたのである所か其本の印度があくなつてしまつた支那は今將に亡くならんとして居る何故に支那印度から日本の人文を導かれて來たにも拘はらず其本家が亡くあつたのに反對の比例に逆行して日本は勃然として興つたか日本は佛教も儒教も弊害のある所は棄て、利益のみを採つたのである所謂日本では佛教も儒教も日本化せられてしまつたのであるそこで支那印度の如き禍に罹らなかつたのであるどうして日本化したかと云へば先づ日本に神道と云ふものが一つある此神道の主義で變化したそれから武士道を以て變化したと斯ふまゝ考へるのである

井上哲次郎曰く日本帝國は神武天皇より今上皇帝陛下に至る迄百二十一代二千五百有餘年の間皇統連綿として持續し内に不逞の徒なく外に反冠を爲す者あらざるは神道の方なりと謂ふを得べし何とあれば神道の説に因れば歴代の天皇は神孫にして臣下たる者の侵すべからざるものなりと堅く國民の腦髓に侵染せしむるを以て國民は常に忠愛の精神を脱却せる者なし此教を爲すは蓋



し神道あればあり

黒田長成曰く神道と皇室とは密接の關係を有するものにして祭祀を重んずるは皇室の尊嚴を維持する所以なり故に大寶令に於て特に神祇官を設け其長を太政官の上に位せり

西村茂樹曰く本邦の道德は其初め教を支那印度に取りしと雖も邦人固有の資質と相合して一種の品性を造れり固有の資質とは何ぞや曰く敬神曰く忠孝曰く節義是れあり鎌倉時代より徳川氏の初めに至り所謂武士道ある者を其中に加へ廉耻と忠孝と信義とを重んじ剛強不屈の氣を以て之を執行せり佛國人チヤンクラセの日本西教史獨逸人ケンブルの鎮國論等に極めて日本人の道德と武勇とを稱賛せしは蓋し外人の實見して之に感じたりしなるべし

栗田寛曰く世に神道と云へば禰宜祝等の神祭りすることを然云ふと思ふ者あれどもうは大なる過りなり神道とは天神の定め玉へる條理にして人の踏行ふ所の道即ち是にて父子には親あり君臣には義あり兄弟には序あるが如く天下にありとある人の一日も離る可らざるものを云へり故に大にしては朝廷の大政を天下に施して万民を治め玉ふも即ち神道ある故に其制度に従て違ふまじき

は云ふ迄もあく小にしては賤しき我々に至る迄一家を治るも朋友に交るも皆神道をもるゝとはあき筈あり人倫の外に神道あるにあらず神道の外に人倫あるにあらざるなり

釋雲照曰く神道の教は日本固有の國躰にして儒教は其文字を借りて倫理の道を明らかよするのみである故に儒を用ふれども支那の儒にあらず佛敎も亦印度より渡來せりと雖も彼の小乘等の國躰に合はざるものは之を用ひず只大乘を取て以て神道の神隨を顯彰するのみである今儒佛を用ふれども其國躰に合するものを取て合せて一貫の皇道と爲し給へるものにして決して其合はざるものを強て混合したるにあらず故に將來若し外國の教學等來りて我が國用を助くるものあらば他山の石として我國躰の用に充つべし

又曰く即今の形勢は親は佛敎を信じ夫は儒敎を信じ妻は神道を奉じ兄は耶蘇敎弟は無宗敎等とマチ／＼に其宗敎道德倫理の教を異にして一家の内すら各々心を異にす况んや四千万人如何して心を一にし徳を一にすることを得べきや

ニコライ曰く日本の教は神道佛敎儒敎の三教であつた此等の教は例へば三人



の子守の如く日本國民を教養して善を教へたものである日本人は大和魂を有つてゐる能く人を愛する正直である是れは神道に依たものである神道の宮に參詣して御覽なさい神道の宮には鏡があります是れは八百万の神が汝の心を透徹するのは恰も汝の面の此鏡に寫つる通りであるから汝の心を清くせよといふことを命じて居るのであります神道の教は日本國民に心を清くせよといふことを強く教へた之に依て日本の人民は正直な清い心が養はれて居るのであります又佛法は愛の深き教である日本人には慈愛の心に富んで居る者が多い之れは佛法に養はれた結果である實に私共は目撃して居ます婦人方々は慈善の心が厚い互に助け合ふ心に富んでゐる之れは皆佛教の感化によるのであると思ふ又日本人は禮が厚い之れは儒教から來つたのである儒教の仁義禮智信といふことで教へられたからである要するに此通り日本は正直で慈愛に富んで禮儀が厚い此は皆以上の三つの教に因て養はれたものであつた實に美しい事である子供は父を知らずと雖も父は子供を知つてゐる子供が美しい事を行へば父は喜んで愛するに相違ない之と同じとです日本國民はまだ眞の神を知らないといふけれども眞の神は既に日本國民の此等の美事を知つて喜んで之を愛護し

居らるゝに相違ない然るに今日本人の大和魂は子守の手から離れて父の手に移る時が参りました今や佛教を信する信仰心は盡きました申さば日本國民は既に成長して智慧を開きましたのであるから神道や佛教や儒教は既に適しなくなつたのである

スタイン曰く神道は日本にて國脉を維持するに必要あるを以て之を宗教に代用して自から宗教の外に立て國家精神の歸嚮する所を指示し儒佛及び西洋諸法等は人民自由の思想に任せ法律の範圍内に於て之を保護し教養上固より之に干渉すべからず

ルプオン曰く日本人の愛國心は實に稱賛すべきもので是れは王室に對する忠義といふことに密接の關係がある日本の王室は又神道と關係して各人各家が其王室の祖先を崇拜して之を日本全躰の祖先とすると同時に皇帝を日本ある大家族の家長家父として家族制の中心躰として居る是れ日本に於ける愛國心の驚くべき發達をさせる所以て此の如き完全なる統一せる國家的觀念は諸外國に見ることが出來ない勿論佛獨諸國にも此の如き忠君愛國の精神はあつたには相違ないが多くは其一部の封建的君主に對する忠義心であつて従つて日本の



如き統一したるものではない此日本に於ける愛國心の發達は實に日本に於ける文明の中心であつて是れに他の分子が錯綜融和したるものである。又曰く至躰西洋人の未だ眞正なる日本を知らない者の一寸した一通りの考では日本も維新前即ち西洋文明の輸入前といふものは全く文明あるものはなかつたのであらう全く野蠻未開の有様で實に取るに足らぬものに違ひなかつたとコウ信じて居る是れは強ち無理のきいとて詰り昔の東洋人が東洋文明の外に文明はない外國人は皆野蠻人だと信じて居たと同様に今日の西洋人は西洋の文明の外に文明はないと前定して居るからで畢竟彼等は日本を知らない結果此の如く斷定して居るのである自分は之を以て大なる誤りと思つて居る即ち東西文明の優劣は別問題として自分は確に舊日本に特種ある文明の存在を確認するものである其第一の争はれぬ證據といふものは元來文明を有せざる人民と文明を有する人民と相觸接する時は必其一は他の爲に壓倒されて遂に人種まで滅絶に歸するので彼の亞米利加の土人や日本の「アイノ」等は其好適例である然るに日本人の西洋人と觸接した結果はドウだと思はるに惟ふに其人種の滅絶しない計りでなく其文明まで失はず立派にやつて居るではいか若し

是れが取るに足らぬ文明であつたならば日本人は決して西洋の文明を吸收するの力なく大方西洋人に征服されてしまつたに違ひない今日日本の立派を獨立の有様は優に日本の文明の頗る卓絶して居たといふことを證據立るものである。

フエノロサ曰く日本は一方に於ては支那印度の宗教哲學文學美術の傳統寶庫を有する事が出来て一方に於ては直接に西洋の文化思想に接する事が出来るです是れは日本人の非常なる特權であります此の如き好位置を史上に占めて居るものは古來無いのであります此千歳一遇ともいふべき機に出會ひまして茲に國民的精神を發揮し新なる文明道義的生命を世界の歴史に寄せますのは即ち日本人の天職であると思はれます此重大なる責任は決して一朝一夕に盡されるものではありません固より永遠を期さねばならぬのであります彼の自分の小天地に籠居して此一大機會と此重大なる任務を會得する事の出来ぬ保守家は固より感むべきの極でありますが彼の徒に其辭令を美にして其態度を温和にし一種外交官的嫺雅を以て西人に對し一切西洋の文明を器械的に採用して直に世界文明の仲間入りを爲し日本人として文明史上に寄する所がある



やうに思ふ所の一派の急進家は私共の大に取らぬ所でありませぬのみならず亦國民を害ふと少からざるものと思はれます

神道は一視同仁

神道は一視同仁にして決して彼是の別を爲さず善は之を取り惡も捨てずして之を改遷せんとするものなれど儒老佛耶の教は國の東西と人智の開否とに因て設けたるものあれば多少異なる所あるを以て其末派の輩は些少の異なる所を互に指摘して彼れは異端なり是れは教敵なりと稱し甚だしきは宗教の爲め親族にても相反目するに至る是れ大に立教者の意に反するものなり然るに我神道家も其風が傳染し他を誹るの弊を生ぜり佛教に於ても華嚴經に一を受けて餘を非とするは魔の攝持する所とあり孔子は異端を攻むるは是れ害のみと云へり

内藤耻叟曰く他の國に行はるゝ宗教は多く他國より轉流して其人を教化したる者なり我國の教化は全く天祖の御寶訓より成立ちたる者なり儒道の堯舜を以て祖とするが如きも其子孫は既に亡びたれど我道の祖たる教化の本たる天祖の御子孫は即ち天皇陛下にましますあり是決して他の教法になき所あり井上哲次郎曰く宗教に佛教なり基督なりとの差はあるが一を撰びて他は根本的

に惡いと云ふとは出來ぬ孰れも各々誤謬はありとも真理も亦ある基督教の側から見れば他宗教は悉く惡しくあるといふのは之れは間違つた考へで佛教の中には永遠不滅の真理がある今日迄永く多くの人心を支配して來たのも全く之である佛教の根本主義はカントの哲學と一致し遠くはプラトンの哲學とも通じて居るとをショッペンハウエルは發見して東西共通の哲學を首唱したはどであるハルトマンの如きも殆んどショッペンハウエルの哲學論を繼承し彼のニーチェの如きも其説を奉じて居る位である故に若し佛教を誤謬ばかりとして疑ふならば西洋の哲學迄を間違ひとして見ねばならぬ様を事になる佛教は決して淺はかきものでなく只だ經文が廣漠として居つてわからん様であるが研究としたならば真理を認めるとが出來る今の佛教僧侶の如きは佛教の善い所を知らない全く玉を抱いて玉を知らぬと云ふて宜しい儒教に至つても又同様で決して間違つて居るものとは言へぬよし獨逸の哲學の如く深奥なる所はなくとも其中には真理がある仮令支那は滅ぶるとも儒教は決して滅ぶべきものではない佛教の印度に於ける然り基督教に於ても亦然り其國は衰亡しても真理の存する教に至りては其國と運命を共にしない儒教の形は滅するとも其



眞理は社會の原動力と爲つて行はるゝに相違ない儒教にも佛教にも何れも共通點が存するから最初から他宗を排斥する精神を懷いてはならぬ其根本主義に至つては決して撞着して居らぬ淨土宗の如きは大に基督教に似て居る所がある婆羅門教に於ても亦うである基督教の三位一體の如き矢張り佛教に於て永く唱へられて居るとで阿彌陀と勢至と觀音の三者は即ち三位一體であるので阿彌陀は無限を意味し勢至は勢力を意味し觀音は大慈悲をあらはして之を三尊とし祭つて居るか矢張り同躰としてある之れは勿論歴史上の人物ではない基督教の三位一體と悉くは似て居ないが大に似て居る阿彌陀は即ちゴットに似て居る觀音は又アリヤに似て居る余が先年ミュンヘンの博物館で見たアリヤの像は殆んど觀音の像と見せがふ程よく似た者が幾らもあつた佛教と基督教とは教義に於ても類似の點が澤山あるから基督教を擴むるには只だ佛教を排斥する精神を懷いては間違である他宗を頭から排斥せず種々の宗教が自由競争をしたなら其の悪い所は滅して善き所が自然に残る日本に基督教が來ても他の宗教を排斥するに及ばぬ基督教が日本に入れば未だ他國に於て遭遇せざる批評を蒙むつて惡き所は消ぬ其の善き所が顯はれ却て同教の爲

めになる我國の如く佛教あり儒教あり神道あり又基督教來り其他種々の宗教が一國內にあるは信仰の爲めには迷ふ所があるかも知れぬが個人の思想を豊富にする點に於ては決して憂ふべきことでない却て喜ぶべき現象である此等の宗教の一派に偏するとなく互に融合調和して行かねばならぬ(中略)基督教には眞理はないかといふに決してそうでない基督教にも亦甚だ善い所がある故に日本人は是等古來の宗教を併呑し消化し而して之を融合調和して統一する精神がなければならぬ基督教にも佛敎にも各々數千年の歴史があつて其間何れも各宗の長所短所を顯現して居るから吾人は能く之を看破して宜しく今後の方針を定めねばならぬ

島田三郎曰く日本の宗教の歴史に就てはロクに詮議もせず一概に基督教を以て國躰に合はぬ邪教とするは無智淺薄の暴論だと謂はねばなりません一體儒教は民主的精神を帯びて居る教である即ち孔子の説は堯舜を祖述したもので其堯舜はドゥいふ人かといふに民に最徳望ある者を擧げて主權者の地位を譲つた人です故に儒教では此神讓といふことを重んずるのみならず武王の討つを討ちたる如きは是れ臣として其君を弑したるに非ず其民に代りて無道を討つ



たものだといふて賞賛して居るシテ見れば儒教はたとひ何程仁義忠孝を説いても其民主的精神を帯びて居る言ひ換ふれば革命の性質を含んで居る限り我萬世一系の天皇を戴いて居る國躰に合はぬと云はねばありません佛教は又諸行無常で國家もあければ何も悉く無に歸して始めて大悟徹底するといふので其主義は無論平等に在るシテ見れば是れも矢張日本の國躰には合はんでありませんかダカラ基督教ばかりに付て彼此いふのは狭い話です其れよりか日本は何れの國教にまれば政治にまれば文學にまれば技藝にまれば普く之を包容して其長所を採用するが得策です既に今迄に於て我國は佛教も儒教も入れて佛の虛無思想に陥らす儒の民主的精神にも侵されず却て其長所を採用して佛教に依ては平安を得儒教に依ては仁義忠孝の美習を收めたではありませんかシテ見れば今基督教が這入つて來たとて何もソウやかましく平等説だから國躰に合はんとといふて排斥するには及びますまい今度も亦例の如く其長所たる愛といふ思想を採用して國民の徳義を高め國家の利益を圖るべきでありませぬ佛教徒が其本來の性質や歴史を忘却して今日基督教に對して邪教呼ばはりするは實に譯の分らんとであります

澤柳政太郎曰く世間には基督教を以て日本の國民は合はぬとする説があるが是は基督教を狹義に解釋する所から起つて來る間違でせう思ふに英米獨佛露の諸國皆各々基督教を奉じて居るのに其國家を計營するに於て少しも差支がないのを見れば基督教とて矢張國家的傾向を有して居るといはねばならぬだから日本に於ける基督教も其服從的範圍を脱して即ち何事も西洋を標準とするの弊を去りて日本的宗教として獨立する様になれば矢張歐米の諸國と等しく國家計營上の要素とて之を取用するに不都合はありませぬ  
辰巳小二郎曰く古の日本人は能く我を主とし彼を客とし我が爲めに彼を使ふを知りき外國人の多く歸化せしが故に日本人の日本人たる所以を失ひし事をし外形よりいは古の日本人の外國風儀に倣ひし事多しと云へども其精神に至りては然る事なし儒教佛教皆外國より渡りし者なり皆日本人の教に違へり儒教は政權は有徳者の手に歸し國の本は民ありと云へり佛法は人皆佛智を備へり上下貴賤の別は假空の事なりといふ日本古來の教は天皇天孫のみ貴として萬民を皆賤とす皇族にあらざれば皇位を嗣ぐ事なし漢土の如く匹夫にして俄に皇帝になる事なし君臣の別永く定まりて動く事なし斯く内外の教相異り



相違ふといへども古の日本人の信奉せしは全く外教の長を取り内教の短を補はんとせしが故なり今の日本人多くは生國を忘れて外國のみを知り我を客とし彼を主とする傾向あり能く古の人の爲せし事を見て己が過失を正さんと甚だ望まし

### 神道の大本と儒老佛瑣耶回の大本

神道の正直儒道の仁道教の慈悲佛教の慈悲瑣耶回の美耶蘇教の博愛回々教の信其稱は異なるも其歸する所は一にして一言以て之を蔽は、皆己を修め人を治むるに外あらず

一條兼良曰く神道の一心儒道の正心佛道の信心は皆同一あり故に歴代神儒佛を混淆して教化を助けたり

勝安芳曰く孔子釋迦の教とて完全無缺のものに非ず耶蘇マホメットの教にも取るべき所あり孔子は好んで其惡を知り惡んで其美を知る者は天下に鮮しと云はれたるからには今日孔子が居たならば耶蘇マホメットの教の中の善き所を採つたかも知れん

細川潤次郎曰く天長節は老子の書に見ゆたる天長地久の語に取て萬壽無

疆の意を寓する者ならん往時我邦は文物制度を彼に取る事普通の事ある故其制を取れる者なるべし

西村茂樹曰く耶蘇の教の如きも新舊約書に就て之を見れば別に神妙不測の教あるを見ず到底孔孟の言ふ所と大同小異あるに過ぎざるが如し

又曰く回々教の教義に五條の要領あり第一は淨潔にして禮拜を行ひ第二は都府に於て傳呼者即ちミューズンといふ者信心者に事を報じ教師の處に會せしむ第三は齋食を勸む第四は教民は收入の四十分一を貧民に施し第五はイスマールの墓とアラハムの足迹に賽せしむ

又曰く瑣子は眞善美といひ孔子は智仁勇といふ瑣子は道德の相をいひ孔子は道德の力をいふ此二者を合して道德の形體精神備はる

三島毅曰く孔子は勿意勿固勿我又克己復禮といひ老子は無私無欲といひ莊子は喪我忘己といひ佛は無我無我所といひ皆私を除く工夫に非ざるはあし其中にも私欲を除くは易けれど私意を除くは尤も難し故に孔子は四勿の第一に勿意をいひ佛は六觀の中にも尤も意識を除かんとす果して能く此私意私欲を除けば儒道で申さば孔子の忠恕を以て一貫し自から愛し他を愛し天地萬物を



二條の仁に歸着す老莊で申さば人の私意を用ひず物々自治に任せ天地自然の一道に歸着す佛で申さば自利他利平等の濟度が出来て不二法門の一真如に歸着す故に諸學派の極所は唯一あるを知り一に歸着するに在るのみ

又曰く莊子の學は老子自然の旨に本づき敷衍擴張して老子が言はざることも自から發明して之を言へり猶ほ子思孟子が孔子の學に本づき孔子が言はざることを言ふが如し後世學問の進歩と謂ふべし其言調は異あれども其眞理に至りては往々易理又は佛説に符合する所あり學問高尚の極點に至れば諸學に大差なきまゝと知るべし

三宅雄次郎曰く世俗或は孔丘釋迦耶蘇瓊克拉克的を謂て四聖と爲す然して言行を詳悉し得るは獨り瑣あるのみ但始く傳ふる所に依りて較量すれば瑣は愛あれども耶の若く愛あらずして而して耶と同く身を犠牲に供せるなり慈悲忍辱なれども釋の若く慈悲忍辱ならずして而して釋と同く民衆を濟度せんと務めしなり温潤含蓄の氣あれども孔丘の若く温潤含蓄の氣あらずして而して孔丘と同く道を學て倦ます人を誨て厭はず食を忘れ樂みて以て憂を忘れ老の將に至らんとするを知らざる者なり然るに人の神として仰かるゝには傳聞審な

らすして不可思議なる所の存在せんとを要す瑣か他三氏の如く後世の尊拜敬禮する所と爲らざるは豈に其言行の詳悉し得らるゝが爲めにあらずや孔や釋や耶や設し能く之か言行を詳悉し得は又焉ぞ瑣の如くなり若くは瑣より降下するの恐あらざるを保すへけんや

和田垣謙三曰く私は三教同盟てなければいかんと思ふ三教とは儒教佛教基督教の三つです此三つの宗教が聯合して大躰の方針を一にし即ち各部から委員ても擧て大躰の方針を決議させ其決議は由て此三大宗教が一致の運動をするといふとにあれば大に社會の人心を動かして世界を風靡するとか出來ると思ふ「ユニテリアン」などは先づ之に類したるものだがまた重に耶蘇教に傾て居るからいかん

島地默雷曰く儒教には人心道心の差別を言ひて所謂人心是危道心是微惟精惟一允執其中といふ者は是れあり佛教も亦煩惱菩提の二心を談ず而して儒の人心は佛の煩惱心よして道心は即ち是菩提心なり菩提は梵語にして此に翻して道と譯す凡そ道てふ者は甲地より乙地に通ずる經路の名あり今菩提の道に於けるも亦然り因地より果地に通じて迷境を脱離し悟達の地に到達する者を菩提



といふ其因地に在るを因菩提といひ果地に在る者を果菩提といふ人道も亦其通りにて其被ふる所廣博なれば匹夫匹婦の親睦家事を治むるより始めて王公將相の律令を以て國家を経綸するに至るまで皆一として人道ならぬ者はあし只人道の初歩と極所との差別あるのみであるされば聖賢といふも佛菩薩といふも皆此通路の高上なる位地に進み給ひたる方をいふなり即ち物我の隔を亡して意なく必あく固なく我なしといふ孔子の地位は人法二無我と説きたる佛陀の意と符節を合すが如く共に形氣の人心に煩惱されずして性徳の道心に精一なる境界をいふ者なり

前田慧雲曰く今佛教の經典即ち大藏經を披て一閱したる後更に外道の學説を取て之を對照するに天地開闢説の如き世界建立説即ち須彌四洲三界六道の如き生理説の如き心理説の如き物理説即ち四大極微刹那生滅の如き三世因果説の如き生死輪廻説の如き其他修行法即ち六行觀の如き佛身説即ち三身の如き涅槃説の如き彼是の諸説頗る相類似したるものなるを見る當に右等法相即ち零碎的學説は彼此相似たるのみならず一組織をなしたる哲學的理論に在ても彼此頗る相似たるものあるを見るあり即ち六句若くは十句義を立て、物心多

元を説く所の勝論は小乘の有部宗及大乘實相論と頗る相類似し二十五諦を立て、冥性神我の二元を説く所の數論は大乘の眞如緣起論と最も相似し自在天を立て、萬有を悉く自在天の開發と説く所の自在天外道は是亦大乘の諸法實相論并眞如緣起論と相似て但人格と理跡との別あるのみ眞言大日説とは或る点に於ては全く相同じと謂ふも不可あきもの、如し此の如く彼是最も相似たるものにして一は佛教と稱し他の一は外道と稱して其間に一大鴻溝を分ちしは抑々何の所以なる歟佛教と外道とは如何ある點に其差別ありて如何ある關係を有せしものなる歟を推究するに蓋し佛教あるものは諸外道の學説を採來て以て之を釋尊自証の案符中に入れて陶鑄したるものなるべし換言すれば諸外道の學説を集めて之を釋尊自証原理の上に大成したるものと謂ふべきか高楠順次郎曰く婆羅門日常の義務として教へらるゝものにして吾人が最も好意を表すべきは婆羅門生活の五輪施是れあり(一)鳥獸に施し彼れ等をして人間の同情に生活せしめ(二)人に施して以て同人の交情を全うし(三)祖先を敬し奉施の實を示し(四)神明を祭りて供齋の布施を獻じ(五)吠陀經の聖典を熟誦して人天無上の供養を終へ人類に施すに無限の樂地を以てす是れ印度古代宗教に於け



る理想の教義となす

高島嘉右衛門曰く眞理教育は東洋に發育し現育教育は西洋に發達す其は世界人類の救世主たる釋迦孔子耶蘇の如き教理を發揮して世人を教化せし聖哲は皆亞細亞洲中の産にして今日歐米諸國の殺伐慘酷なる世の中にもカッく道徳の種子ありて社會の秩序を維持するものは全く耶蘇が東洋より興せし教化を持ち入れたる恩澤なり之に反して現理の發達の殆ど造化の秘を發き天工の妙を奪ふはどの域に達したるは全く西洋人の手柄にして我か東洋の其方に進みしは彼か手柄を持ち込みたる恩澤ありされは形而下の恩澤は西洋より我に持ち込み形而上の恩澤は我より西洋に持ち入れたるものかれは則ち我等の西洋人に於けるは眞理と現理との貿易を爲したるものと謂ふべし

大島圭介曰方今支那に行はるゝ宗教の中道教は老子の道徳經より出て老聃を以て開祖と爲し清淨無爲世事を避け人欲を省き山林に隱遁し心神を靜考するを以て根本と爲し故に宗教を以て名くべきものに非ず而して後世に及び佛教に摸擬し天官地官水官の三神を立て靜考を主とし仙丹符籙の術を行ひ氣を練り膽を養ひ祈禱を以て惡魔を攘ひ終に長生不死羽化登仙の法を説くに至れり

元代には朝廷の尊崇世人の信仰盛かりしか其後漸次に衰亡し今は熱心の人鮮しと云ふ北京城の西方に白雲觀と稱する道教の大廟あり四季日を定めて祭典あり時に參詣の人群を爲す其他道觀の數鮮なからす道士の居所は觀と稱して院寺等の字を用ゐずマホメット教は土耳其領亞刺比亞より天山南路回紇邊に傳播し就中回紇の部に最も盛に行はれ終に支那本部に入りしを以て回教と名けしならむ回教の法規は載せてコーラン經にあり其宗徒たるもの始祖マホメットの訓戒教律を信奉すると誠に深く徒弟の交誼極めて親睦にて其未だ互に相識らざる者も暗語を以て意思を通し危急の際に當り互に救援扶助するの約甚だ固く他宗の人と婚姻を通せず豚肉を食ふを禁し衣食住とも清淨なるを尊ぶものなり佛教は多數人民の信仰する所なれとも僧侶に學識の人に乏しく又世人に説きて訓導することを勉めず本邦に於て中等以下衆庶の信奉するか如く深切ならず其歸依心の主意も大に異なる所あり死後の濟度を托し未來の安樂を願ふ情も甚だ冷淡にて其之を祈念するは多く現世の富貴を願ひ子孫の榮華を希ふを主とするものゝ如し因に云ふ佛像を安置する所を寺と稱するは漢の明帝の時に起れり支那にて府廷即ち役所の在る所にて寺と名くるもの甚だ多



し例へは大理寺光祿寺鴻臚寺等の如き是あり明帝の時無摩騰西域白馬經より  
來り初めて鴻臚寺に止り遂に寺名を取り白馬寺を創立す其以來浮屠の居る所  
を皆寺と曰ふと

正直の解釋

神道の正直は心に偽りのなき即ち誠を謂ふ孔子も天子より以て庶人に至るまで  
一に是れ皆身を修むるを以て本とす其身を修めんと欲せば先づ其心を正ふし其  
心を正ふせんと欲せば先づ其意を誠にすと又其身正しければ令せすして行はる  
其身正しからされは令すと雖も從はずと曰はれ孟子も身道を行はされは妻子に  
も行はれすと曰はれたり耶蘇も眞の道德は心に在て行にあらすと説かれたるは  
心と行と違ふ者われはなり譬へは人を殺す勿れとあるは殺す事のみ罪にあらす  
此心を有する者は既に罪あり淫を行ふ勿れとあるも女を見て色情を起すは既に  
罪あるものなり釋迦牟尼は弟子に向ひ諂ひ曲れる心は道と相違ふ是故に宜く應  
に其心を正直にすべし諂ひ曲れる心は他人を欺き誑すものと知るべし道に入る  
人は則是の處を是故に汝等宜く應に心を端くし正直を以て本と爲すべし曰は  
れ又優婆塞戒經に菩薩は先づ自から惡を除き然る後に他人に教へて惡を除かし

む若し自から除かすして他人に教へて除かしむるとするも是理あるなし是故に菩薩先づ自から施を  
爲し自から戒を持し自から定を知り自から勤行精進して然る後に人を教化すべし又華嚴經に信は道  
源功德の母と爲り一切の諸善根を長養すとあり又涅槃經に諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛  
教とあり又同經に小惡を輕んじて殃なしと爲す勿れ水の滴は微なりと雖も漸く積めは大なる器に盈  
つるとあり韓非子に千丈の隄は蟻蟻の穴より潰え百尺の室は突隙の烟を以て焚とあるも此意なり  
中村正直曰く世の中に惡を爲しても匿さずれば正直と曰ふは誤りにて正直は惡を爲さるることを  
いふものなり

正直の範圍

正直は自他の行爲に對し誠を盡すものなれば羅馬のヂヌスチアン帝の三條の教典もモゼスの十戒  
も釋迦の五戒も老子の四戒も孔子の三戒も皆此範圍に在り三條の教典は第一に他人を害する勿れ第  
二に人の物は人の手に在り觸るべからず第三に行を慎め、とあり、害は人を傷け人を誹る類、手に  
觸るべし盜み毀つ類、行は姦淫猥褻の類なりモゼスの十戒も第一に天帝を崇むべし第六に人を殺す  
勿れ第七に淫を行ふ勿れ第八に竊を爲す勿れ第九に妄證する勿れ第十に他人の妻及び他人の物品を  
貪る勿れとあり釋迦の五戒も第一に殺生第二に偷盜第三に邪淫第四に妄語第五に飲酒此五戒は儒教  
の五常に配せば第一不殺生は仁に屬し第二不偷盜は義に屬し第三不邪淫は禮に屬し第四不妄語は信  
に屬し第五不飲酒は智に屬す老子の四戒とは孔子か周に適き禮を老子に問ふ老子は子の驕氣と多慾  
と態色と淫志とを去れ是れ皆子の身に益なく吾の子に告る所以のものは是の若きのみと曰へるもの  
なり孔子の三戒は少時血氣未だ定まらず之を戒むるに色に在り其壯なるに及んては血氣既に剛し之  
を戒むるに闘に在り其老たるに及んては血氣既に衰ふ之を戒むるに在りと此色、闘、得は佛教  
三毒の愚痴、嗔恚、貪慾なり又孔子は利口を惡むは其信を乱すを恐れてなりと云へり此利口は耶蘇教



の所謂妄證佛教の十惡即ち殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、兩舌、惡口、貪慾、嗔恚、邪見中の妄語、綺語、惡口、兩舌を謂ふ回教もコーラン第四章に偶像を信する勿れ淨き女を姦する勿れ孤子の産を破る勿れ父母に不孝なる勿れとあり又孔子の孫子思は隠れたるより見はるゝは莫し微きなるより顯なるは莫しと曰はれたるは耶蘇が弟子に向ひ其れ掩はれて露れざるものなく隠れて知れざるものなし是故に爾等幽暗に語りしとは光明に開ゆべし密室にて耳語せしとは屋上に播るべしと説かれ回教もコーラン第二十二章に神は顯れたるを知り又隠れたるを知る總ての物は終に神に歸せん嗚呼眞信仰者よ汝の神に稽首し恭敬し禮拜せよ又正直なれ之に因て汝は幸福を得ん神の眞の宗教の爲めに戦ふは汝の應に爲すへき所なるぞと説かれたるも亦皆正直を勸むる語なり

副島種臣曰く耶の十戒、佛の五戒、儒の正心誠意慎獨、我の惟神、亦皆一之を正に歸す噫、孰れか天下の善同しからずと謂ふ乎其異なる所以は殊に道の教の枝葉末節を脩むるのみ

原坦山曰く神仙儒佛道元同し恰も萬類の虚空に現するか如し秋來れば千樹搖落を催し春到れば百花紫紅を發す

有賀長雄曰く儒教の普く日本に行はれて今尙修身上に大勢力ある所以の者は大体に於て我が國体に符合し天子の尊むへき所以父祖の拜すへき所以を訓諭すはなり然れども尙現世の治國齊家修身に厚くして現世の前即ち開闢史並に現世の後他界の事に薄かりしか爲に開闢史に關しては神道に讓る所あり他界の事に關しては佛教を退くるとを得ざりき太子傳補接に依るに聖德太子十三の時父の天皇太子に問ふに本邦既に神代の儀あり儒文あり何故に今又佛法を敬するやを以てす太子答て曰く臣幼味なりと雖も熟く儒釋及神史の文を見るに大方分明にして之を疑ふへき所なし神道は道の根本天地と與に發し以て人の始道を説くなり儒道は道の枝葉生黎と與に發し以て人の中道を説くなり佛道は道の華實人の智熟して後發し以て人の終道を説くなりと是れ或は後人の作構に

係ると雖も要するに名言なり然れども眞理は必ず一体なるべく始と中と終とに依り別なる可らず

### 二種の神器

天照太神が三種の神器を天孫に授け玉ふ時知仁勇とは言はざるも其實は知仁勇を示したるものなり鏡は己を照し人を照す智なり璽は人に對し信を示し徳を授くる仁なり劔は害を除く勇なり儒道に於て孔子も知仁勇を以て天下の達徳と爲し斯三者を知れば則身を脩むる所以を知る身を脩むる所以を知れば則人を治むる所以を知る人を治むる所以を知れば天下國家を治むる所以を知ると曰はれたり一條兼良曰く三種の天下に在るは猶ほ三光の天に麗くか如し鏡は日、玉は月、劔は星なり鏡の圓規は則ち日の象なり其物を照すも亦然り故に名けて日像と曰ふ珠は水に生す月も亦陰精、玉を夜光と名く月も亦夜を照す明月の珠、夜光の璧同く是れ玉なり劔は星なり故に星、金の散氣と曰ふ豊城の光、斗牛の間を射る神劔の在る所常に電氣ありて星と同氣を斂むること見るべし故に三光あるを以て天となし三器を傳ふるを以て天子となす

### 知仁勇

神道は鏡、璽、劔を以て知仁勇を示し孔子は知者は惑はず仁者は憂へず勇者は懼れずと曰はれ釋迦は貪慾、嗔恚、愚痴の三毒に制せられされは森羅萬象我と同躰にして快樂あるも苦惱なしと説かれたるは惑はず憂へず懼れずと同一なり

西村茂樹曰く古人知仁勇を稱して天下の達徳を云ふ其言極めて當れり知仁は固より尊ぶへき徳なりとも勇を以て之を率ひされは其徳を成すと能はず知は心の能なり仁は心の徳なり勇は心の力なり凡そ天下の物は何れも力に依りて其能と徳とを顯さるはなし太陽諸星の運行空氣の動靜海水の盈虛電氣蒸氣の或は光を發し或は重体を驅進するは皆力の爲す所なり人心も亦此の如し仁義禮智と云ひ忠孝節義と云ひ何れも心の力即ち勇に依りて其徳を成就するなり余故に曰ふ勇は諸徳の



先導者にして又其督勵者なり

### 敬神

伊弉諾伊弉冊二尊既に天神を信し大國主尊も亦深く天神を信し少彦名命も亦天神を信す命の小艇にて來るも天神の命を爲し之を擧げて共に國土を經營す又大國主尊は兄弟の輕侮を受けたる時も天神を祈禱し其冥助を仰きたると古史に載せあり神武天皇も時を鳥見山に建て皇祖天神を祀り崇神天皇も天神地祇の社を定め幣帛を奉りて之を祀れり儒教に於ても虞舜か晏天に號泣すとは上帝を禱りたるものなり成湯も大旱の時上帝を禱り六事を以て自から責めたれば其感應に因て大に雨ふりたりと云ふ孔子は怪力亂神を語らすとあるは門人等が妄りに神に託するを恐れて語らざるものならん門人が神に事ふるを尋ねたるに未だ人に事ふるとの出來ざるに焉ぞ神に事へんと曰はれ神は無しとは曰はす又丘か禱ると久しとあるゆる神の崇ふへきとは認め居れり又鬼神の徳たる其盛なる哉之を視て見えず之を聞て聞へず物に躰して遺すへからず天下の人をして齊明盛服して以て祭祀を承けしめ洋々乎として其上に在るか如く其左右に在るか如しと曰へり孟子も惡き人と雖も齊戒沐浴すれば以て上帝を祀るへしと既に天神の崇ふへきとを説けり瓊克拉の眞神を信し其刑せらるゝ時友人に向ひ鶏を神に献せよと託せり耶蘇教は舊約全書に上帝に事ふべしと天神を崇ふへきとを第一に説かれたり新約全書にもパリサイの人か何なる誠か最も大なるやと問ひたる時耶蘇は爾心を盡し主なる爾の神を愛すへし是れ第一にして大なる誠なりと云へり又人を悦す者の如く眼前の事のみ務めず誠心を以て神を畏れ従へとあり回教に於ては専ら神は惟一なるを説けり佛教に於てもアマミダは梵語にて無量無邊又は無限を意味したるものにて阿彌陀經に譯して無量壽と稱し三千大千世界を照覽して遺す所なく萬世不滅と云へば即ち上帝を指したるものなり

因に記す神道にてトヲカミエミタメと唱ふるは遠祖惠み給へとの意なりと耶蘇教にてはアーメン

と唱ひアーメンは「誠に眞實に」と曰ふか如しと佛教にては南無阿彌陀佛と唱ふ南無は教を求むる語なりといへは何れも天神又は祖先に對し教を求むるものなり然るに佛教の一派なる日蓮宗にては南無阿彌陀佛と唱ふるとを忌み南無妙法蓮華經と唱へり妙法蓮華經は梵語にてサダルマフンダリキヤンダランと云ひ即ち經文の名なり此經支那にて譯したるもの六通りあり法華三昧經、薩曇芬陀利經、方等法華經、妙法蓮華經、添品法華經是れなり妙法蓮華經は姚秦の羅什の譯なり日蓮宗の僧侶は南無阿彌陀佛と唱ふるを忌め日蓮は佐渡に在る時彌陀の功德を説き又日蓮宗の本部とも稱す身延山には日蓮の遺訓として「な程のむ量の罪がある者もみ延に來ればたすけ給ふ」とナムアミダの五字を以て韻をなせしものありと云ふ又日蓮宗の中には多寶佛を信仰する者あり多寶佛は無限を意味したるものなれば即ち阿彌陀の異名なりと云ふ果して然らば日蓮も亦彌陀を頌讚せし者ならん又世人成田の不動尊芝山の二王、信州の善光寺等を信仰して佛法には靈驗のある者ありといへと佛法に靈驗あるにあらず人の精神の到る所には何なる宗教にても天神之に感し幸福を降し給ふなり佛法には正法輪身と教令輪身とありて柔和忿怒相分る金剛薩埵は大日の正法輪身にして不動明王は教令輪身なり成田の奥の院には大日を安置し芝山の奥の院には觀世音を安置し善光寺には彌陀勢至觀音の三尊を安置せり眞言宗にては本尊を大日(毘盧遮那即ちベイロシヤナ)といひ淨土宗にては彌陀といひ外道にては梵天と曰ひ自在天と曰ふも其實は一にして彌陀も大日も儒の上帝耶のゴット回のアラ一神道の天御中主尊なり彌陀の勢至觀音に於ける大日の金剛薩埵不動明王に於ける儒の大極の兩儀に於けるは天御中主尊の高産靈神産靈に於けるか如し故に不動尊又は仁王を信仰して利益あるは譬くは人あり支配人に向ひ懇請する所あれば其精神に因て主人其心に感して之を救ふが如し故に耶蘇教徒は耶蘇の教に因て救をゴットに求め回教徒はマホメツトの教に因て救をアラ一に求め佛教徒は釋迦の教に固て救を彌陀に求め我が神道を信する者は大



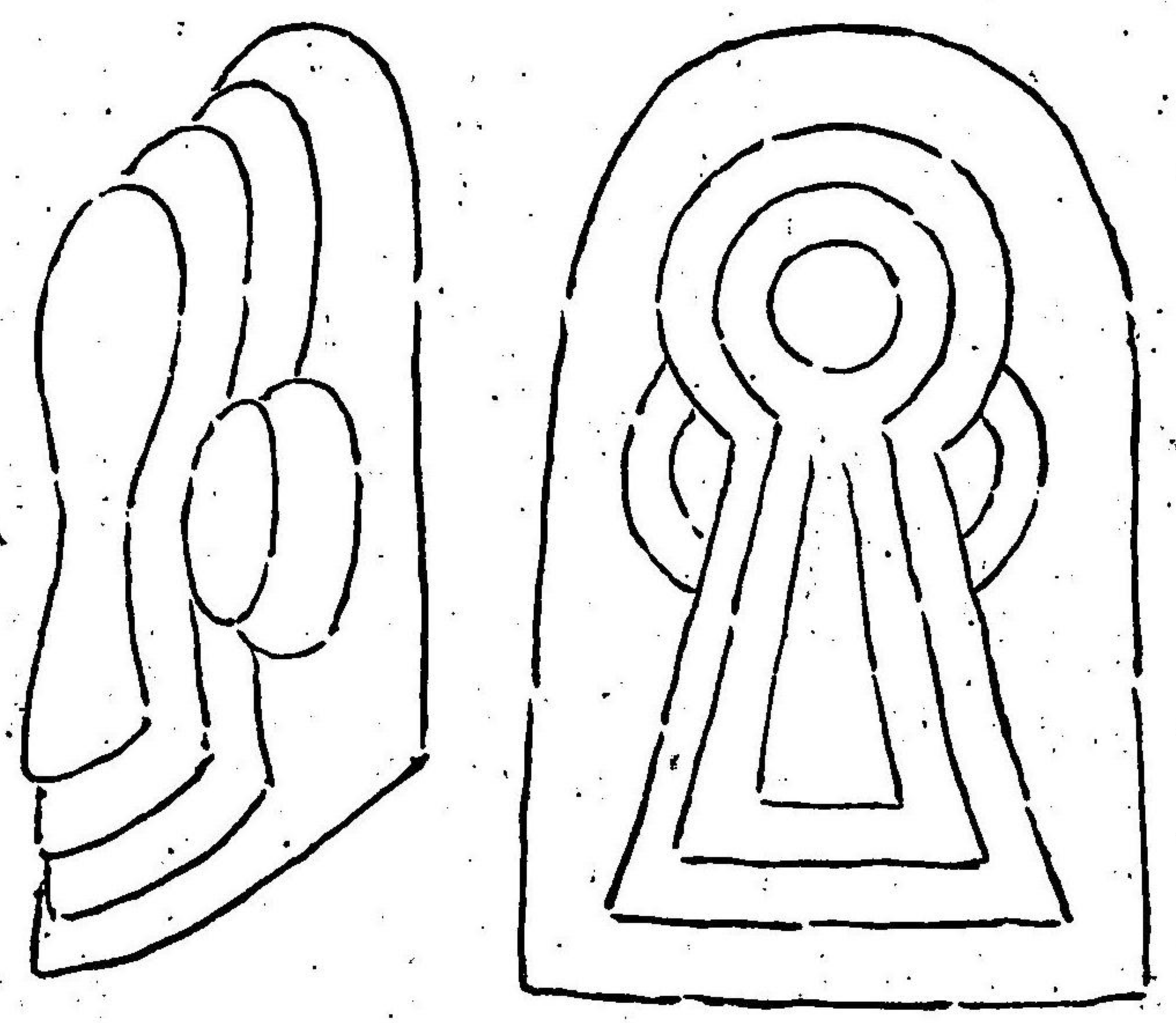
國主尊の教に因て救を天御中主尊に求むべし其名稱は異なるも其實は一なれば名稱の異なるを以て他を誹らすして各々信仰を爲すへきものなり

西村茂樹曰く國民皆敬神尊王の心堅固なる時は日本國は百万年も大丈夫なり若し敬神尊王の心薄くなる時は日本國は甚だ心配なものなり日本國の安全堅固なるも危急存亡となるも皆國人の敬神尊王の心の厚きと薄きとに因ることなり忠義なる日本の國民よ夢寐の間も敬神尊王の心を取失ふこと勿れ

前田慧雲曰く龍樹菩薩の著述せる十二禮は阿彌陀佛の徳を讚述したる偈頌なるか既に十住論中にも易行品ありて彌陀の法門を説き又智度論中にも處々に彌陀に説及したるものあれば龍樹菩薩も亦馬鳴菩薩と同一實行方面に於ては淨土教を唱へたと知るへし此の如く龍樹菩薩は諸法實相も説き真如緣起論も述へ密教も淨土教も皆之を唱へたれども最も主として多く説きたるは諸法實相論なり(中畧)淨土往生はもと大衆部即ち中天竺佛教の思想にして兜率往生は上座部即ち北天竺佛教の思想なり故に中天竺佛教者は概して皆淨土往生の思想を有し淨土教を唱ふるもの、如し世親菩薩は北天竺佛教を唱ふるも共に又中天竺佛教をも宣揚したる人なれば此人にして馬鳴龍樹の先蹤を追ふて無量壽經優提婆舍の著述あるは固より怪むに足らざるなり思ふに無量壽經優提婆舍は十地經論と其軌轍を同ふするものにして淵源は華嚴經に在り

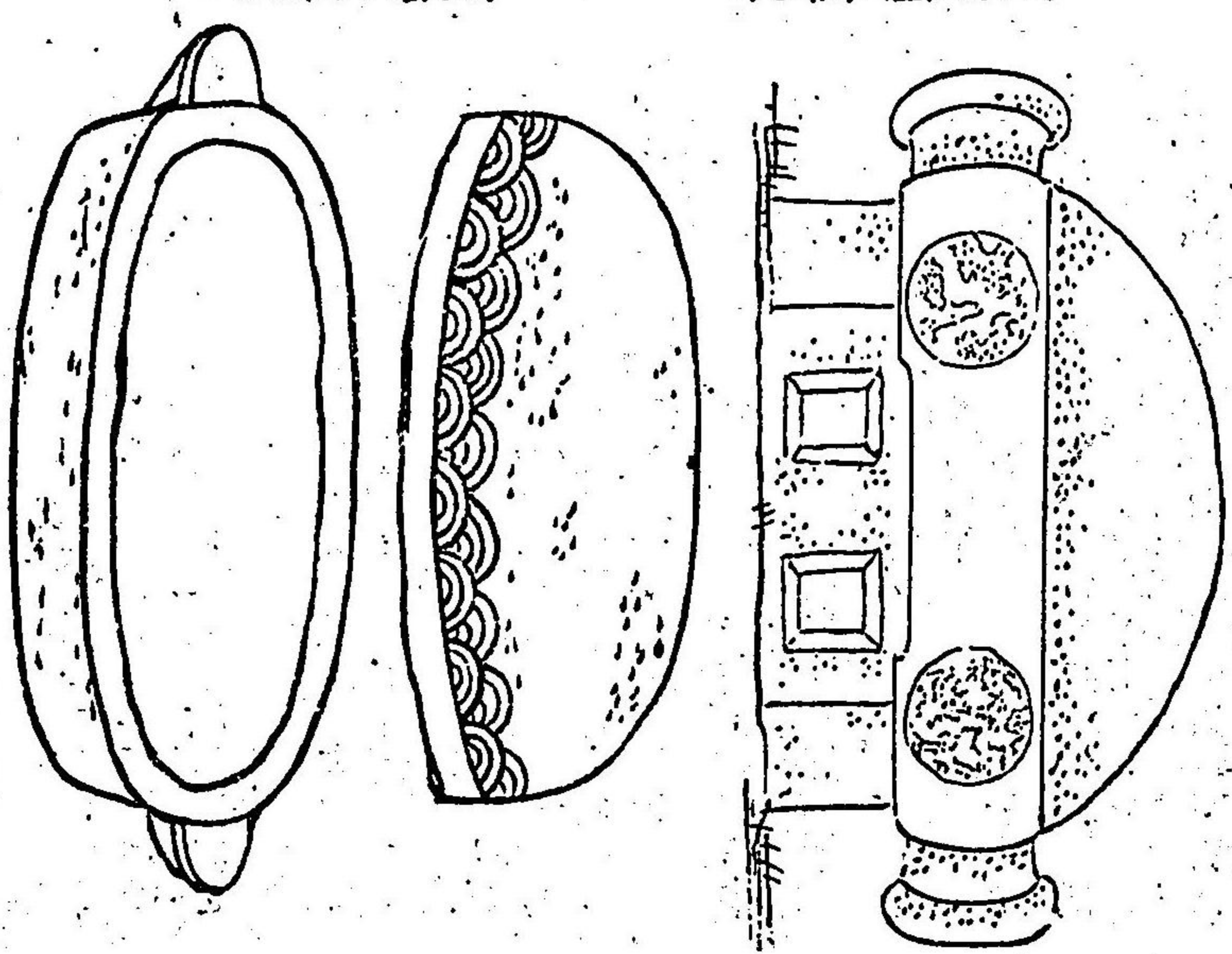
葬祭

神道は最も葬祭を重んじ上古は葬式の時に喪屋を建て岐佐理持掃持、御食人、碓女、哭女、等の役を設け高貴の人は石棺若くは陶棺を用ひ種々の物品を整へて鄭重に之を葬り且歳時其靈魂を祭りて之を慰む伊勢大神宮出雲大社の祭典の如きは其最も重なるものなり儒道に於ても亦葬祭を重んじ孔子は孟懿子の孝を問ふに答へて生るに之に事ふるに禮を以てし死すれば之を葬るに禮を以てし之を祭



右ハ古代陵墓葬式の圖

日本太古史 中篇



右ハ神前國足羽山より掘出したる石棺

右ハ和泉國田原野の古墳より掘出したる石棺の前面



るに禮を以てすと云へり又亡靈に水を薦むるとは神儒佛共皆同一にして儒にては左傳卷一に水を鬼神に薦むるを載せ佛教にては六種供養の第一を闕伽といひ闕伽とは梵語にして翻して水と云ふ神道にては日本紀卷十六に死者に水を薦むるとあるを載せあり又神儒佛何れも元は自葬にして僧侶の手を経たるものにあらざりしを僧侶が其教を弘むる爲め死者の家に到り之を慰め且屍を収めて之を葬りしより遂に僧侶の職業の如く爲りしものなり

熊澤伯繼曰く經文の内には慈悲忍辱の心を専ら説き慈悲心より無縁人の尸などの道路にすたりて葬らざるを憐みて葬る心はあらんすれども一切經文の内は今時の出家沙門の如く人の死せるをみては己の業とし葬禮を營み若し又坊主に任せず葬る者あれば地獄に入とおとしめ愚人を誑かし或は銘々墳那とたて、同宗ながら我満をかまへ墳法死すれば其位牌を我々の寺に納め人の往來をもとめて渡世の營みとする事一字一句もなきなり元來葬禮、祭禮、の事は聖人の至理を以てなし給ふとにて釋迦の經文の中になき事なるを梁の竺潛といへる出家始めて人を葬り漸く出家の業となり儒者の行ふ法式の中を竊みて其禮を損益して己か家の法となせり若し釋迦の靈神宇宙に滅する事なくは竺潛法師が爲し始むる事末流末世の營みとなりゆく事共佛法の天理にそむくよりおこると知て臍を噬の悔み有るべし

### 尙武

伊弉諾尊は天沼矛を以て八洲六島を治め大日靈尊は皇孫に葦雲劍を賜ひ大國主尊は一名を八千矛尊と云つて廣矛を以て國土を平定し孔子は仁者は必ず勇ありと曰はれ釋迦は武藝に達し殊に弓術を能くしたるとは諸經に散見す又釋迦は諸比丘に向ひ道を學ぶ者は譬へは一人と萬人と戰ふ爲め鐘を若て門を出て或は怯せ或は半路にて退き或は格闘して死し或は勝を得て還るか如し沙門の道を學ぶは堅く其志を持し精進勇銳前境を畏れず衆魔を破滅して道果を得べしと説かれたるも耶蘇が十字架に

掛けらるゝも敢て驚かず其門人使徒等が耶蘇の教を奉して或は颶風の爲め船を覆され或は圍圍に繋かるも志を變ずるとなく其教を布きたるもマホメットの右に劍を提げ左にコーランを捧げて教を布きたるも亦皆武勇なり

固に記す孫武の兵を論するや之を経すに五事を以てす一を道と曰ひ二を天と曰ひ三を地と曰ひ四を將と曰ひ五を法と曰ふ道とは民をして上と意を同ふし之と與に死すべく之を共に生くべくして危きを畏れさらしむるものなりと云へり吳起の兵を論するや昔の國家を圖る者は必ず先づ百姓を教へて萬民を親しむと云へり孟軻の兵を論するや天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かずと云へり此道と云ひ親と云ひ和と云ふも皆徳にして宗教に屬するものなり歐米各國に於て軍隊に布教使を置くは以なきにあらず

山崎嘉曰く八千矛は元帥の率ゆる兵數にして大國主を八千矛の尊と曰ふは元帥の尊と曰ふか如し徳川齊昭曰く文武の道は一致と存し候士たる者不學文旨にては相濟まざる事と存し候我等淺學にて古今に暗けれども幼きより神聖の道を學ひつらく思ふに君臣父子の大倫は勿論祭祀を崇み本に報ゆる道より勇武を尙み耻を知る義に至るまで皆神代の昔より備りたる事にて忠孝文武など云ふ文字こそなければ其道はまさしく神國の大道と存し候

千家尊福曰く大國主神の邪神を掃平し人民繁殖の道を開き給へるも少数者の爲に多數人民の不幸を受けるを救ひ給ふものなれば神道の擴張に力を盡す者は人民の權利を伸ふるに障礙するものを除き愛民の神慮を遂げん事を勉めざるべからず

津田真道曰く我帝國は神祖以來尙武風を爲し人々勇氣を貴ひ其性を稱して大和魂と曰へり是神功皇后の一舉して三韓を征服せし所以なり然るに中古隋唐に通するに及びて其文華を喜ひ却て尙武の國風を輕むするに至りたり是其終に三韓を失ひし所以なり爾後朝威振はず竟に政權武人の手に



歸したり是自然の勢なり而して武人専ら勇氣を養育せり是曾て北條氏の元冠を西海に塵殺し豊臣氏の一時朝鮮を威嚇せし所以なり而して比年清國を征して荐りに戰捷を重ね國威を各國に宣揚せし原因種々ありと雖も主として我神武なる國風即ち大和魂の致す所なるとは則疑ふべからず南摩綱紀曰く我大日本國は皇祖皇宗以來武を以て國を建て給ひ國名を細才千足の國と唱ひ人皇第一の天皇を神武と稱し奉り爾後列聖皆武を尙ひ併せて文道をも崇ひ給ふ三種の神器の如きも鏡は智に象り璽は仁に象りて文なり劍は武なり且つ古昔は祭政一致文武岐を分たす其内にも尤も武を重し給ひしを以て下亦之に感化風靡して俗を爲し大にしては國を治め小にしては一家一身を齊脩する皆此に由らざるはなし降て舊幕府徳川氏の時に至ては武士道と唱ふる一種の道ありて上下貴賤之を以て人間最大至重のものせり故に幕府を始め三百諸侯の政法制度皆武に基きて之を定め諸藩の學校にても大抵は文武兩道を兼ね學ひしなり蓋し文武は猶ほ車の兩輪鳥の兩翼あるか如し人只文道のみを知りて武道を知らざれば氣象柔軟身体孱弱になりて活潑進取に乏く文道を知らざれば氣象兇勵行爲暴悍になりて沈着靜寧を失ふ故に文武を兼修せざるべからざること猶ほ車の隻輪にては行くへからず鳥の片翼にては飛ぶこと能はざるが如く必ず相資け相待ちて始めて大なる功用を成すことを得へし

西村茂樹曰く男子は言ふに及ばず女子とても尙武の心掛專要なるへし是れ迄は女子は陸海軍の組織、師團の兵數、兵器の精粗、軍艦の構造等は大抵は之を知らざりしが此後は是等の事も能く研究し折々は陸軍の操練をも見物し軍艦に入りて大砲の音をも聞く様にありたきものなり増田子信曰く大己貴尊最も武畧あり廣矛を提けて凶徒を征服し其様出雲を本據として今の山陰山陽より北陸東山へかけて悉く其治下に隸せり因て稱して大國主神といひ又八千矛神といひ又國作大神ともいへり其威風今の朝鮮迄も及び新羅の天日槍等歸化せり日本紀には天日槍は垂仁天皇の

朝に歸化したる由載せられ播磨風土記には神代の事とせり

### 美育

神道は節儉を尙ふと云ふも度を過くれは野鄙に陥ゆるを以て天照太神は美育の道を示し鏡を造らしめて容貌を照し句玉を造らしめて容貌に裝飾を加へ自から工女を督して神衣を織らしめたり又此時既に衣服を各種の色に染めたるは何れも其威儀を正ふする爲なり儒教も儉を尙ひ侈を戒むると云ふも孔子は質(飾なきもの)か文(飾)に勝つときは野鄙に陥り文か質に勝つときは史(飾過ぎる)となる文質彬々即ち其宜きを得たるものか君子なりと云へり又君子は其衣冠を正して其瞻視を尊くし又色は温を思ひ貌は恭を思ふと云へり

川田剛曰く世人美術品を贅澤物と思ふは誤りにて其國の文化を知るには最も善き標本なり

### 自國と他國

菅公か神國一世無窮之玄妙云々又和魂漢才云々と曰はれたるは深く神道を信して我國民は我國を愛し然る後に他國に及ぶべきことを示したるものなり公は唐に留學し孔孟の道を學びたるに拘はらず當時の人が儒道に心酔するを慨し斷然遣唐使を廢せんとを奏請せり孔子も己の親を愛さずして他人の親を愛するを悖徳と云ふ己の親を敬せずして他人の親を敬するを悖禮と云ふと曰はれ又物に本末あり事に終始あり先後する處を知らば即ち道に近しと曰はれたるも老子か千里の行は足下よりすと曰はれたるも廣く解釋するときは自國を愛して後に他國に及ぶの義なり耶蘇も何れの國人をも愛すれど先づ自國の者を愛し後に他國の者に及ばし只偏頗の誤りに陥らすと基督の傳記に見へたり

内藤耻叟曰く人各其國を國とし其家を家とし國には其君を尊奉し家には其父を愛敬す至る所として安堵快樂ならざるはなし何ぞ必しも世界萬國を同視して尊卑を忘れ内外を乱り我子は他人の爲めに我父を放逐し我妻は他夫を愛昵して而後に心に快しとせんや是れ余が尊内卑外は天地の公道



なりと云ふ所以なり

井上圓了曰く一人と一家と一國との三者各密切の關係を有するを知らば其三者の間に平等差等の關係あるを知らざるへからず凡そ社會を組織せる各人は平等同權なりと云ふも是れ唯表面の事のみ若し其裏面に入れば差等異權の存するを知るべし縦令は社會の階級を破壊し來りて上下の區別を一拂し去るに至らば平等同權の眞理に達するもの、如しと雖も人には賢愚強弱の別なき能はず老少男女の別亦自から存して此數種の人民盡く同一の事業に就く能はず必ずや其性質と才力とに相應する社會の地位を占有するに至らん然る時は必ず差等異權を生ぜざるを得ず是れ平等と差等と相離れる所以にして平等の中に自から差等ある所以なり而して平等に偏するも差等に偏するも共に眞理にあらずして眞理は此二者の中道にありと知るへし故に人の一家に對し一國に對するも此二様相離れる關係あるを忘るへからず自己と他人とを同視するは平等の見なり自己と他人とを別視するは差等の見なり自家と他家とを同視し自國と他國とを同視するは皆平等の見にして之を別視するは差等の見なり自己を愛して他人を忘るゝは差等に偏するなり他人を愛して自己を忘るゝは平等に偏するなり自己を愛しなから其裏面に他人の愛すへきを忘れず他人を愛しなから其裏面に自己の愛すへきを忘れざるは所謂其二者の中道なり而して此間に先後輕重の順序あるを記せざるへからず我に父母あり他人にも父母あり共に父母たるに於ては平等なるも其間に我と他人との差等ある以上は我父母を先にし他人の父母を後にせざるへからず我人民に君主あり他の人民に君主あり共に君主たるに於ては平等なるも我と他との差等ある以上は我君主を重として他の君主を輕とせざるへからず是れ所謂平等差等の中道なり此中道に本きて一家及一國の人倫の成立するを見るなり此平等差等の關係は又之を國と國との間に適用し來りて國際の關係を示すとを得へし例へは自國を愛するを知りて他國を忘れ其甚きに至りては平常無事の日にありて他

國を敵視し或は之を輕賤して禽獸視するか如きは差等の見に偏するものなり若し之に反して自國と他國とを同一視し甚しきに至ては自國より他國を尊重するか如きは平等の見に偏するものなり故に平常の交際上にありては自國と他國と互に友情を以て相親み一朝競争するに當ては自國を助けて他國を排せざるへからず是れ所謂平等差等の中道なり然り而して時弊を矯正するに當ては或は平等に重を置き或は差等に重を置かざるへからず即ち時弊差等に偏すれば之を矯正するに平等を用ひ時弊平等に偏すれば之を矯正するに差等を取らざるへからず例へは一國二社會にありて上下の懸隔甚しく從て壓制の極端に走りたる時は平等同權説を唱へて其弊を正さるへからず又同權主義其正道を失ふて財産平均論の行はるゝに至ては差等異權説を唱へて其害を防かざるへからざるか如し

### 農工商と漁獵

管公の記する所に依れば大國主尊は民に農工商を勸め且醫を弘め又其子事代主命をして民に漁魚鹽鳥の業を授けしむとあり農工績織の事は天照太神既に其道を開き民に衣食住を授け給へしと古史に載せあれば尊は之に改良を施したるものならん堯舜も后稷をして民に稼穡を授け五穀を樹藝す五穀熟して民人の育するを待ち契をして人倫即ち父子の親君臣の義夫婦の別長幼の序朋友の信を教へしむ孔子も嘗て農商を司とる職に就きし時牛羊を蓄息せしめ量目を平にせり又術に適く時其門人冉有か從て赴き既に多くの人民あり又何を加へんといひたれば孔子は之を富さんといひ既に富たれば又何を加へんといへたれば孔子は之に教へんといへり孟子も梁の惠王や齊の宣王に富國強兵の基は農桑牧畜を勸めて之に申ぬるに教育を以てする事を説きたりマホメットも隊商を率てシリヤに赴き貿易を爲し商業頗る好果を得たりと佛教に於ても法華經に一切の治生産業は實相と違背せずとあるは即ち勸業の事なり



因に記す兵法家の經典とも稱す六韜に載するに太公望文王の間に對し大農大工大商を謂て三寶と爲し農其郷に一なるときは穀足る工其郷に一なるときは器たる商其郷に一なるときは貨足る三寶完きときは國安しと又武王の間に對し天下安定國家無事の日は戰攻守禦の具は盡く人事に在り未耜は其行馬蒺藜なり馬牛車輿は其營壘蔽障なり鋤耨の具は其矛戟なり蓑蓐笠笠は其甲冑干楯なり鏃鏃斧鋸杵臼は其城を攻むる器なり牛馬は糧用を轉輸する所以なり鶏犬は其伺候なり婦人の織紵は其旌旗なり丈夫の壤を平くるは其城を攻むるなり春、草棘を鋸るは其車騎を戰はすなり夏、田疇を耨るは其步兵を戰はすなり秋、禾薪を刈るは其糧食の儲備なり冬、倉廩に實つるは其堅く守るなり田里相伍するは其約束符信なり里に吏官あり長あるは其將帥なり里に周垣ありて相過ぐることを得ざるは其隊分なり粟を輸し芻を收むるは其廩庫なり春秋に城郭を治め溝渠を修むるは其塹壘なり故に兵を用ふるの具は盡く人事に在り善く國を爲むる者は人事に取る故に必ず其六畜を遂んし其田野を開き其處所を安せしむ丈夫田を治むるに畝勢あり婦人織紵に尺度あり是れ國を富し兵を強くするの道なりとあり又黄石公の三略に耕桑を務めて其時を奪はず賦斂を薄くして其財を匿くせず徭役を罕にして民をして勞せ使めざるときは國富みて家娛しむ然る後に士を選んて以て之を司牧す夫れ所謂士とは英雄なり故に曰く其英雄を羅るときは敵國窮す英雄は國の幹なり庶民は國の本なり其幹を得て其本を收むるときは政行はれて怨みなしとあるを見れば兵法家も農工商即ち殖産興業の先きにすべきとを説くものなり

會澤安曰く吾輩人民食ふ所の米は天祖の天狹田長田の稻の餘りにして衣る所の服は齋服殿の神衣の餘りなればゆめ疎かにすべからず

井上圓了曰く我國の習慣として官吏を重んじて商工を賤しむ風あれども社會公益上より之を觀れば商工も農業も國家富強の本なれば決して賤しむべき道理あるへからず學者や官吏は少數にて足

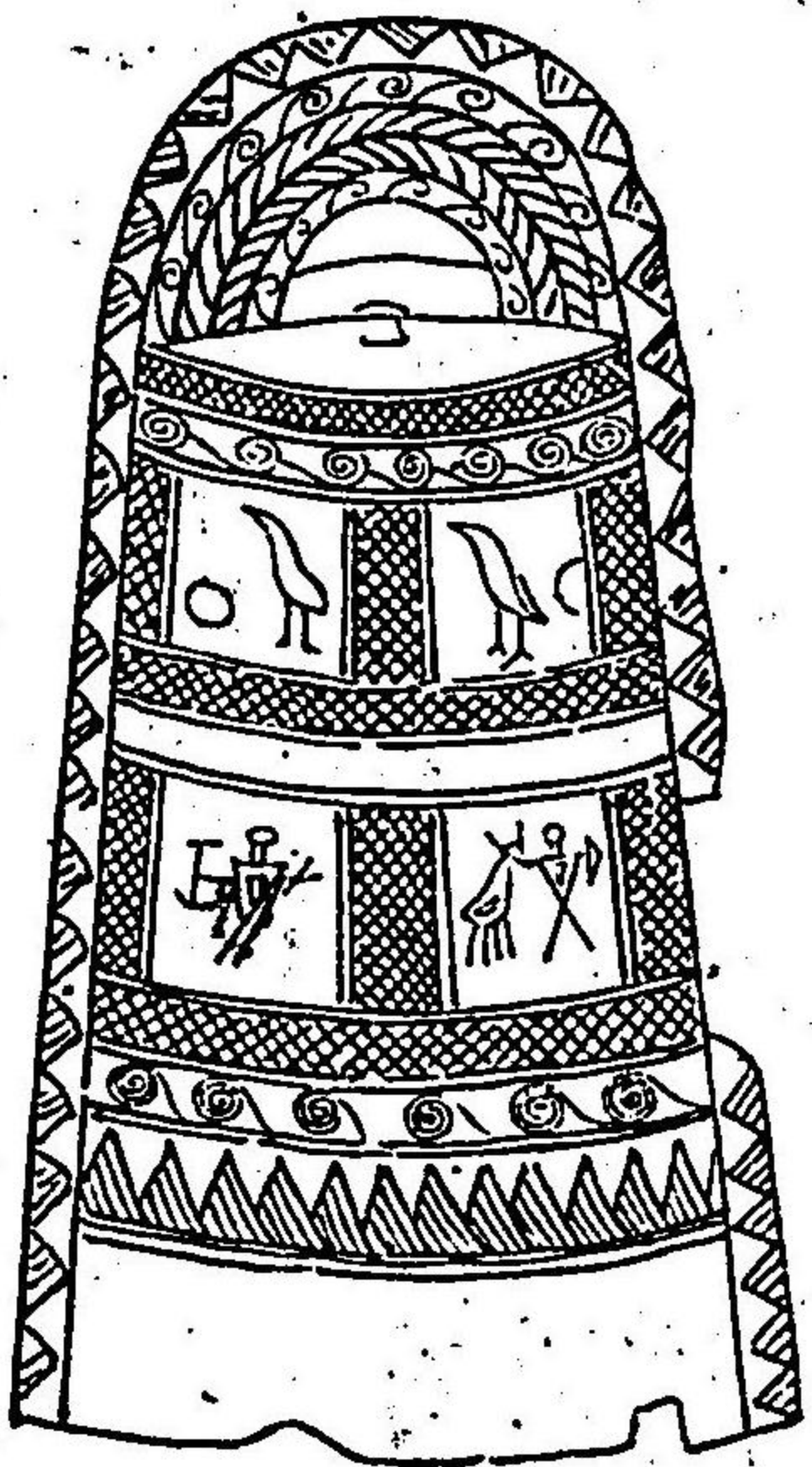
れども農工商は人生必需の衣食住を供給する者なれば多人數之に従事するにあらずんば其需用を満たすべからず

高木敏雄曰く風土記には所造天下一大神と稱すまた其御魂に對しては倭大物主櫛瓊玉命と稱し或は單に大物主神とも稱すまた其祭祀の地に因て三輪大神、三諸大神とも稱し播磨にては伊和大神とも稱す或は單に大神と稱するとあり日本神話の神格中此「大神」の稱號を有する大國主神が如何はかり重要な位地を有するかを示す更に此神の名稱の多數なる事此もまた此神の有名の神にして同時に有力の神なる事を證するものなり後世に於ては大黒の名稱の下に七福神の一として結ぶの神の名の下に結縁の守神として國民の信仰今に少しも衰へず大和の三輪山一名三諸山の祭神は大物主神なり此社は諸神社中に最も舊きものにして延喜の制既に名神大社に列し新年、日次、相嘗新嘗の官幣に預りしとは延喜式の神名并に祝詞の部を見ても明なり今日に於ても尙官幣大社たり然れども此神の有力なる神格なる事を證せんか爲には出雲神社の名を擧ぐるのみにて十分なるべし全國の神社中大社の稱號を有するもの伊勢、熊野、杵築の數社に過ぎず出雲、杵築大社か延喜の制既に名神大社に列し現今官幣大社たるは曰ふ迄もなく其社の勅建實に神代に溯るを見る天日隅宮として杵築の大社築造の莊麗なる記事は記紀の神代卷を始として風土記其他の文書に詳なり其他現今官國幣社として此の神を祭るもの大和に大和神社あり武藏に氷川神社あり能登に氣多神社あり畿岐に金毘羅宮あり常陸に大洗磯前神社あり三河に砥鹿神社あり伯耆に大神山神社あり日向に都農神社あり石狩に札幌神社あり此外丹後の宮津社播磨の伊和社、美作の中山社、越中の高瀬社安房の小鷹社、越前の高木社、近江の建部社、佐々木社、山城の五條天神、越中の天神、羽前の田河社、等何れも大己貴神を祀る固より諸國神社の數は神話に於ける此神の勢力を定むる唯一の標準にはあらずとするも以上の事實は或點に於ては少くも重要な標準の一つたるを失はざるべし

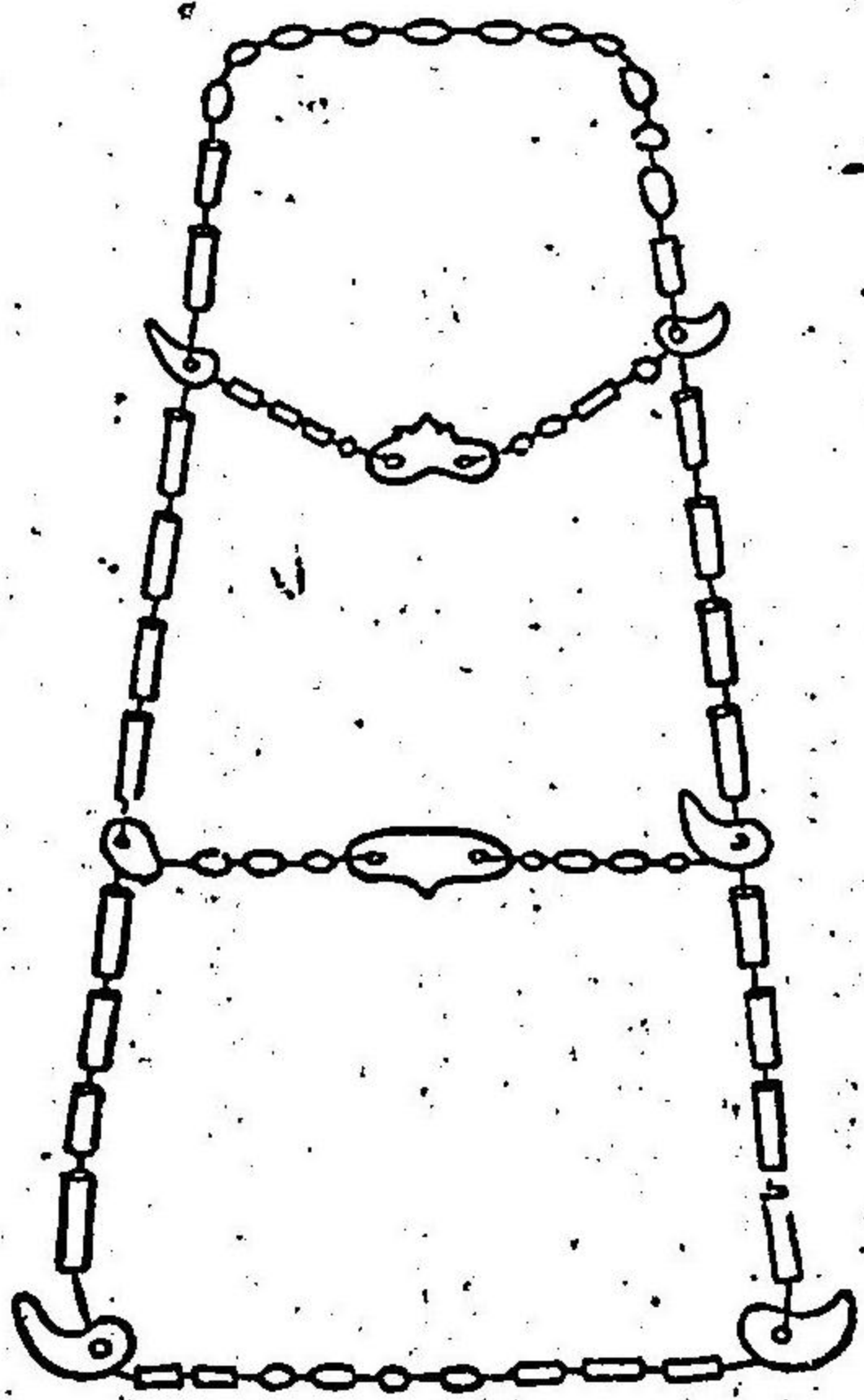


岡本盛輔曰く平田篤胤嘗て大國主神の時の開化を證すに扶桑畧記を引て曰く天智天皇七年近江國志賀郡に崇福寺を建つ地を掘りて寶鐸一口を得たり高さ五尺五寸元明天皇和銅六年に大和國宇太郡浪坂郷の人太初位上村東人銅鐸を長岡の野地に得て之を献す高さ三尺口徑一尺音は律呂に協ふ嵯峨清和の兩朝に亦銅鐸を獲る事あり寛政中に及び亦之を播摩及ひ參河に獲たり高さ三尺餘其他諸處に出す所極めて多し率皆數千歳の物にして人代の有る所に非ず殷周以後の製に非ず則其大國主神の時に出るや疑を容る可からず蓋し天神の鏡を造るに鐵を用て之を磨く其曲玉も亦美石を用て之を磨く大國主神の時は其鏡に白銅を和し八花形等を鑄り水銀を貼し光を生せしむ其曲玉も亦多く煉玉を用ふる者に似たり銀銅皆外國に出て而して國人之を用ふ殆ど素盞鳴尊の教に由るなり其説易ふ可からざる者に似たり

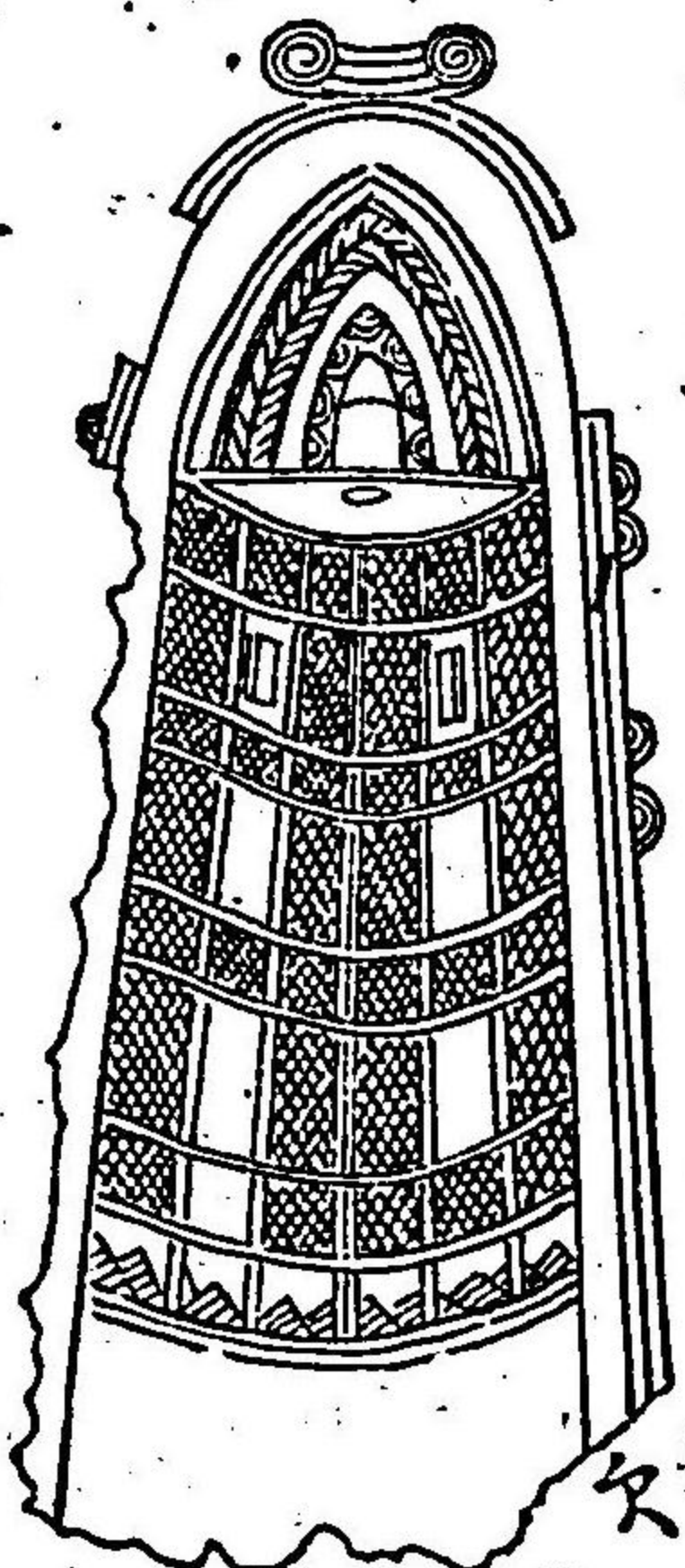
福羽美辭曰く扶桑畧記天智天皇七年の所に正月十七日於近江國志賀郡一建崇福寺一始令平地掘出奇異寶鐸一口高さ五尺五寸又掘出奇好白石長五寸夜放光明云云と云へる事あり元明天皇紀和銅六年七月丁卯大和國宇太郡浪坂郷人太初位上村東人得銅鐸於長岡而献之高三尺口徑一尺其制異々常音協律呂勅有司藏之嵯峨天皇紀に弘仁十二年五月丙午播摩國有人掘地獲一銅鐸高三尺八寸口徑一尺二寸清和天皇紀に貞觀二年八月十四日辛卯三河國獻銅鐸一高三尺四寸徑一尺四寸於瀨美郡村松山中獲之或曰是阿育王之寶鐸也なども所見たり或説に今現に大和國吉野山に豊臣太閤の手書を添たる銅鐸ありて天の半ちやくと呼の右中の一つならんを謂へれど此は信られず其は其謂ゆる天の半ちやくの圖を見るに右の記録もとも云ふとは其尺寸異なればなり豊臣太閤の手書の文に「武ゆうたつし手から先の若ものとは汝が事いよく武かうをつくすへし當座のほうびとして天の半ちやくあとうるもの也八月日邑下判官源藏朝」とありとそ半ちやくとは寶鐸の轉訛なるべし又上野國綠野郡落合村なる七輿山宗永寺境内の古墳より掘獲たりと



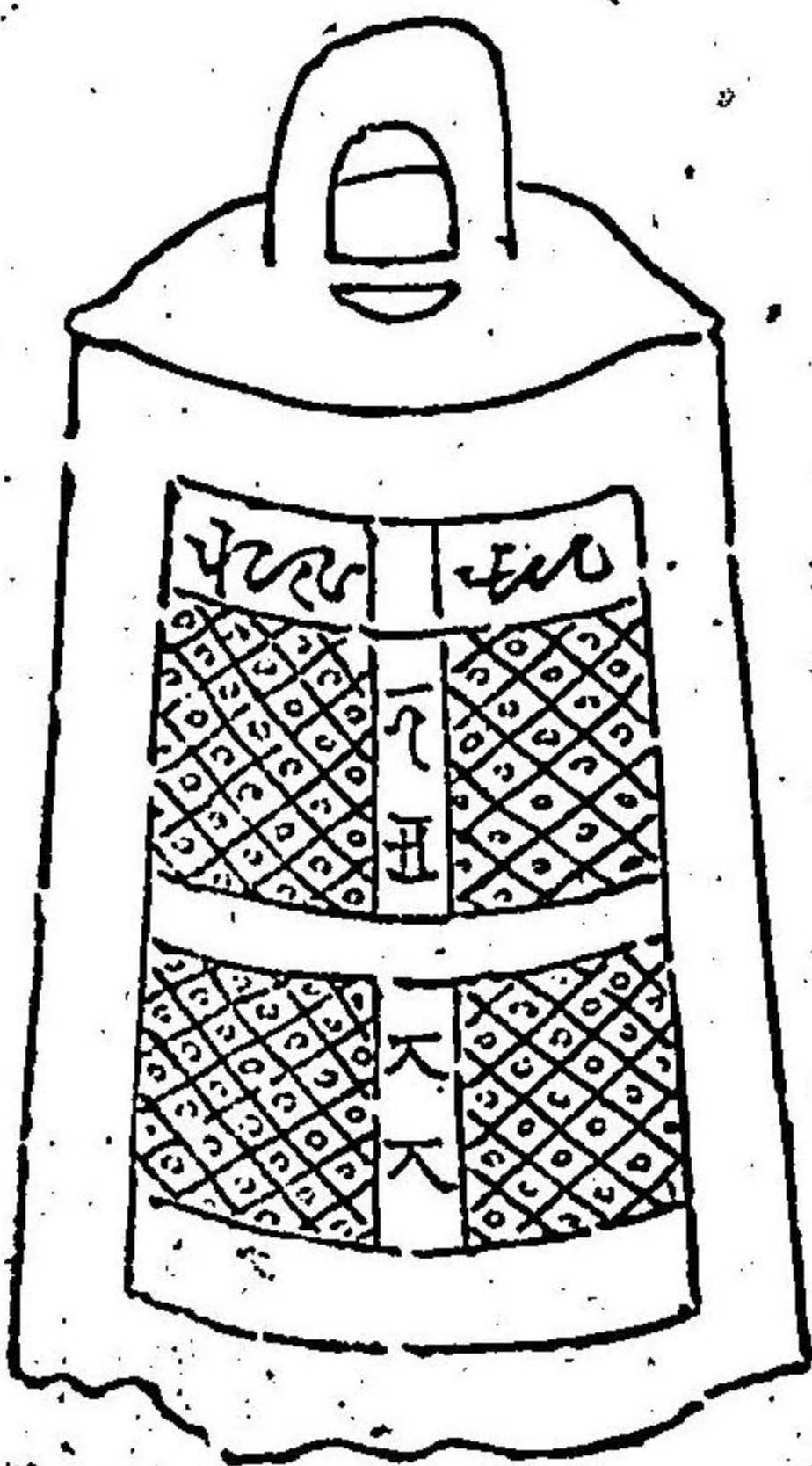
右ハ谷文晁所蔵の銅鐸



右ハ對馬國住吉神社神寶の曲玉



右ハ大和國吉野山にある銅鐸



右ハ上野國綠野郡落合村より掘出したる銅鐸



云々此は上件の鐸にもには相似る古物なるか其鐸付たる文様古文字に髣髴たり斯て此器のみは例の穴なきは若くは異品なるか又谷文晁の所蔵せる古銅鐸は正に上の鐸と同じ類にて三穴あり高さ一尺一寸にして人又牛馬龜鳥などの略形を鐸付たり文字又物の形を畫くこと其甚古く有りしこと是等にも知るべし右の古器とも古く鐸と稱ひ來れる故に今も姑くさは謂ふなれど神典には奴豆また佐那伎などに此字を用ひたり其は其形の相類たる故と聞えたり上件の器ともは其形區にして内に振玉を付く可き所も無れば神典なる奴豆佐那伎などの如く振鳴す物には非ず古書にたえて思ひ合すべき事なければ其名も亦知る可き由なし然れば強て屋代翁の匾鐘と名けられたるに従ふより外なくなむ

績織と裁縫

大和國春日社の大國殿に大國主尊御夫婦の像を安置せり尊は右手に槌を持ち左手に裏布を持てり夫人は右手に槌を持ち頭上に盥を頂き左手を以て之を支へ居れり此槌は尊の槌と異なり砧を打つものにて盥は布を調す器具なれば尊は既に農工商を勤め且其子事代主命をして民に漁獵を授けしめたるものなれば其夫人をして婦女に績織と裁縫の業を授けしめ此像は即ち布を調す所を型とりたるものならん

栗田寛曰く麻績連は長白羽命の裔にして麻績氏の人を率ゐて麻を殖えて青和幣を作り敷和の服を作るとを掌りしものなり麻績とは麻を績むことにて麻を績みつむきて機を織る神なり其麻を以て織りしを昔は荒衣の服と云ひ又ウツハタともいへり常陸の久慈郡に白羽神社あり白羽村にあるは此神の鎮坐の故なり其近地幡村に長幡部神社あり其社にて織る幡をウツハタといふ延喜時代まで調物に納めたり此幡は今のメリヤスの襦袢と云ふものゝ如く下着なごにして頭から被る様にして着る所の物なり常陸風土記には其所織の物自ら衣裳となりて更に裁縫するとなし之を内幡と云ふと

いへるにて知るべし太古の神々の巧藝既に此に至りしこと眞に妙といふべし  
西村茂樹曰く世間の婦人の多く勞力を以て賤しむべき事と思へるは第一の心得違なり勞力は人間か此世にありて爲すべき要務にして國家の富強といふも皆國民か勞力するによりて成就する事なり只上等社會の人が怠惰に日を送り衣服飲食皆給を他人に仰き婦人の務を知らざる程賤しむべきはなし西國立志編に「手足は何程汚れたりとも心の清潔に害なし」とあり中等以上の婦人能く此義を知るべし

醫藥と禁厭と湯治

大國主尊は醫藥を製して民の疾病を救ひ又禁厭を以て疾病を治したるとは古史に見えしか温泉に浴せしめ疾病を治するとも民に示したり瓊克拉的も其弟子ハルミデスの頭痛を愈すに藥には一種の樹葉を與へ且加ふるに禁厭を以てしたり其禁厭は十分己を信せしめて然る後に施したるものにして即ち精神療法なりと此事プラトンの文集に見えたり耶蘇も到る處に於て癩病、眼病、聾者等の患者を救ひたるとは新約全書中に多く載せあり佛敎に於ても梵網經に佛子たる者は一切疾病の人を見れば應に其人を看護すると佛を供養するか如くにすへし八福田中に看病は第一なりとあり八福田とは一に佛二に聖人三に和上、四に阿闍梨、五に衆僧、六に父、七に母、八に病人を曰ふなり儒道に於ても論語に子の填む所は齋、戰、疾とありて祭祀と戰爭と病氣の事には孔子も殊に注意し又喪ある者の側にて食する時は飽かずとあり孟子は老て妻なきを鏢と曰ひ老て夫なきを寡と曰ひ老て子なきを獨と曰ふ幼にして父なきを孤と曰ふ此四者は天下の窮民にして告ぐるとなき者なれば文王は政を發し仁を施すに必ず斯四者を先にすと曰へり此四者は殆ど病者と均しき不孝の者なればなり

高木敏雄曰く出雲風土記にも其外にも大國主神に關する話説に稻種の見ゆる場合少からず依て思ふに大國主神は農業保護神の一として古代より尊崇せられしならむ或は農業保護と云ふよりは蟲



害禁厭の法と云はむ方適當なるべし稻田の蟲害驅除の禁厭の法に關しては古語拾遺に昔在神代大地主神營田之曰云云と此に關聯して大國主神の醫療禁厭の法の發明に關しては同く古語拾遺に大己貴神與少彥名神共戮力一心經營天下爲蒼生畜產定療病之方又爲攘鳥獸昆蟲之災一定禁厭之法百姓至今成蒙恩賴皆有効驗也とあり又大國主神の最後の濟民の事業として猶温泉開場の事を擧げざるへからず鎌倉實記に准后親房記引伊豆國風土記曰稽溫泉立古天孫未降也大己貴與少彥名我秋津洲憫民天折始製禁藥湯泉之術伊津神湯又其數而箱根之元湯是也と

又曰く日向の都農神社に於ては大國主神は醫療の神として吐濃大明神の名の下に祭祀尊崇を受けたり吐濃大明神癩瘡をまじなふに必いやし給ふとかや彼の國人は明神の方に向て頌文して云吾常以汝爲高今者此物高於汝若有懷憤宜令平却と唱へて杵と云ふものをして朝ごとに一二度あつると三日すれば癩瘡いゆと云へり

己の欲する所を人に施す

大國主尊は既に業を勸めて萬民に生活の道を授け又醫藥湯治の方を弘めて萬民の疾病を救ひたるは即ち幸福を與へたるものにて耶蘇か己の欲する所を人に施せと説きたる金言を實行の上に施したるものなり孔子は此金言を反面的に説き己が欲せざる所は人に施す勿れと曰へり佛教に於ても涅槃經に一切の衆生は皆殺さるゝ刀と撃たるゝ杖を畏れ壽命を愛せざる者なければ己の心を以て他の心を推量り他人を殺す勿れ撃つとを行ふ勿れとありマホメットの十二戒にも第四に親族、乞食、旅人には彼等に與ふべき者を與へよ又コーラン第二章に人に施與するに陽なるは善し隱徳は尙善にして神は必ず之に報すとあり

新島襄曰く善を人に施すといふとに就ては何れの宗教に於ても大眼目とする所なり

レック曰く孔夫子の言語中殊に注意すべきは夫子が基督の生前五百年に於て黄金律を反面的に發言せしにあり而して是れ全く人類心性の組織を研究するに由りて推論せしものなり其言に曰く己の欲せざる所を人に施すこと勿れと

分を守る

大國主尊の像に就き菅公の記する所に依れば直身正視して上を仰かす下を臨まざるは高きに媚ひす卑きを侮せずして分を守る者を表したるものなりと分を守るとは即ち中を執るものなり孔子が上位に在て下を陵がす下位に在て上を援かす己を正ふして人に求めず上天を怨みず下人を咎めずと曰はれたるも釋迦が勢ありて臨まざるは難しと曰はれたるも此意なり又佛教の六度集經に寧ろ道を守り貧賤にして死するとも道になき事を爲して富貴と爲りて生きると勿れとあり

徳川家康曰く人は五字と七字を守れば足る五字とはウイヲミナ(上を見る勿れの意)七字とはミノホトヲシレ(身の分限を知れの意)是れは大黒天の教なりと天海に聞けり

一家和樂

大國主尊は既に修身の事と齊家の事とを示し齊家は即ち一家親族の和合を專一と爲すものなれば顔色怡々たるは其表なり儒道に於て孟子は詩云刑子寡妻至子兄弟以御子家邦言ふは斯心を擧げて諸を彼に加ふる已故に恩を推せば以て四海を保するに足る恩を推されば以て妻子を保する無しと曰ひ又人恒に言へるあり皆曰く天下國家と天下の本は國にあり國の本は家に在り家の本は身に在りといへり佛教に於ても無量壽經に父子、兄弟、夫婦は勿論家の中外にある親族は相互に敬ひ愛しみて憎み嫉むとなく我に有て彼に無き者は相互に融通して貪り惜むとなく言語顔色を常に柔和にして相互に意に違ひ戻るとを爲す勿れとありマホメットも教を弘むる時第一に其妻カデヂヤに施し次に家僕ゼードに施し次に甥アリーに施して以て万民に及べり



成島弘曰く一家の和樂は富の基なり何に大黒天を信仰しても一家が和樂せざれば決して富むとは出来ぬ

五十四

### 君臣の道

我國君臣の道は開闢以來整然たるみならず祖宗の教は國の内外を問はず人の貴賤を論せず賢を擧げ能に任し善を衆に取りしとは記紀神代卷に詳なれば爰に掲げず儒道に於ても四書六經の過半は孔子が君臣を使ふに仁を以てし臣君に事ふるに忠を以てすへきことを説けり佛敎に於ても釋迦は四恩の中に國王の恩を説き又華嚴經に國に君王ありて一切の万民安穩なるを得れば君王は一切の万民安樂の根本なりとあり心地觀經にも人民の豊に樂むは王を以て根本と爲すとあり又王を尊ひ重んずると佛若くは父母の如くせよとあり耶蘇敎に於ても新約全書に王を尊ふへし僕たる者は主人に従ふべし只善良なる者柔和なる者のみならず苛刻の者にも服ふへしとあり又人は二人の主に事ふると能はず蓋し此れを惡み彼れを愛み此れを親しみ彼れを疎むへければなりとあり

井上圓了曰く我邦は其億兆の臣民皆皇室皇族の末裔より出てたるを知れば古來君臣一家の如き國風ありて忠孝一致を以て人倫の大本と爲せるを知るべし是れ他邦に其例を見ざる一稱特有の國風なり他邦に在ては忠孝其途を異にし支那の如きは孝を以て重しとす然るに我邦は忠を以て最も重しとせり是れ率土の濱皆王臣なる臣民一致の國風によるなり而して君に事へて忠なるは即ち親に事へて孝なるものと爲し忠孝兩全し難きときは寧ろ孝を捨て、忠を取らしめ以て億兆の臣民皆皇室を輔翼し奉り來れり今更に其起る所以を考ふるに我邦君臣の間は恰も一家中の父子の如き關係ありて天皇陛下は我父なり之に忠を盡くすは父に孝を盡すと同一の感情を有し忠は孝の大なるもの、如く考へ來りて遂に忠孝一致の風をなし就中忠を重しとする風を爲せり實に我人民の忠義の感情は一種特別にして他邦人種中に未だ其比を見ざる所なり

### 父子の道

伊弉諾、伊弉冊二尊が三貴子を生みたる時大に喜び己の纏める玉を與へ且三貴子に各々職を授けしとは古史に在り大國主尊も兄弟に輕侮せられし時其父母が之を庇護し又父母の教に順ひたるとは古史に載せあれは父母に事へて孝を盡し父母も之を慈みたると明なり又事代主命は忠孝兩全なりとあり孝行の事は孔子は尤も熱心に之を説き孝は徳の本なり又孝は百行の本なりと曰へり釋迦も世間恩に四種あり一を父母の恩二を衆生の恩三を國王の恩四を三寶の恩と曰はれて孝行の事を説き又心地觀經に慈父の恩の高きとは須彌山の如く悲母の恩の深きとは大海の如しと又忍辱經にも善の極は孝より大なるはなく惡の極は其不孝なる乎と又梵網經に孝順は至道の法なり孝を名けて戒と爲すと又長阿含經に人の子たる者は五事を以て父母を敬ひ其命に順ふへし一には衣服飲食を供奉して乏しきとなからしむ二には凡そ爲す所あれば先づ父母に白す三には父母の爲す所は恭く順ひて逆はず四には父母の正しき命令には敢て違背せず五には父母のなせる正しき業は相續して斷たずとあり孟子は之を反面的に説き世俗の所謂不孝なるもの五、其四支を惰り父母の養を顧みざるは一の不孝なり博奕を爲し飲酒を好み父母の養を顧みざるは二の不孝なり貨財を好み妻子に私して父母の養を顧みざるは三の不孝なり耳目の欲を從にして父母の戮を爲すは四の不孝なり勇を好み鬪狠して以て父母を危すは五の不孝なりと云へり耶蘇も爾の父母を敬ふべしと曰ひ又新約全書に子たる者は二親に服ふへし是主の悦玉ふ所なり父たる者は爾の子を怒す勿れ恐くは其氣餒らんとあり回教の十二戒にも第三に両親に事ふるに順良なれ第五に貧の爲めに彼の子を殺す勿れとあり

會澤安曰く天照太神豊原瑞穗國は吾子孫の王たるへき地なりと宣ひ天孫に神器を授け給ふ神代の古より今に至るまで皇統易らせ給はざるは父子の親是より悖きはなし

### 夫婦の道



伊弉諾尊先きに唱ひ伊弉冊尊後ちに和し始めて夫婦の大道を明にし大國主尊は夫婦結婚の制を立て夫婦は神命に因るものなれば忽にすへからざる事を示せり蓋結と唱ひ男女盃を差替して心の變らざることを契ふは即ち尊と其后須世理姫との間に行ひたる風儀か今に至る迄結婚の式と爲れるなり又夫婦互に下紐を結交して他人には解せしと契り夫婦の約を重せり後世出雲の大社に於て毎年神か縁を結ぶ會議を開くと言傳へたるも之に原因す儒道に於て夫婦別ありと言つて男女の別を立て互に敬ひ愛すへきを説き孟子か齊の宣王の色を好むと曰ふに對し古公亶父の事を引き是時に當て内に怨みの女なく外に曠き夫なしと曰はれたるは邪淫を戒めたる語なり耶蘇も夫婦は上帝の命なることを説き又新約全書に妻たる者は其夫に従ふへし夫なる者は其妻を愛すへし苦を以て之を待つ勿れ又姦淫の故ならて其妻を出す者は之に姦淫をなさしむるなりとあり回教もコーラン第四章に妻を愛せよ能き衣を着せよ親切に彼女と語れとあり第二章に妻は夫か能く愛す如く夫に對し貞節なれとあり佛教に於ても知度論に夫婦互に敬ひ愛さるは罪惡の一なりと優婆塞戒經にも己の妻子を苦しめて他を憐むは眞正の慈善に非ずとあるは己の妻を愛すへきを説きたるものなり

會澤安曰く伊弉諾尊妍哉の歌を伊弉冊尊に先たちて唱へ給へるは其時より夫婦の別明なるなり

兄弟の道

天照太神其弟素盞鳴尊の暴を爲すも敢て之を咎め給はずして反て之を慰め素盞鳴尊も初め暴を爲せしも後に姉君の尊ふへきを悟り寶劔を献したり耶蘇教に於ても新約全書に乘ての人を敬び兄弟を愛せとあり儒教に於ても兄弟の道を五倫の一に置き長幼序ありと云へり孔子の門人子夏か死生命あり富貴天に在り君子敬して失ふなく人と恭くして禮わらは四海の内皆兄弟なりと云へしは耶蘇か天に在す父の旨を行ふ者は是れ我が兄弟我が姉妹我が母なりと云はれたると一對なり

會澤安曰く伊弉諾伊弉冊二尊が天照太神は高天原を治むへし月讀尊は夜食國を治むへし素盞鳴尊

は海原を治むへしと任し給ひしは兄弟の序なり

朋友の道

大國主尊は少彦名命と友とし善くして共に國土を經營し少彦名命の此土を去るに及ひ深く憂愁せられしは友道を示したるものなり孔子は益者三友、損者三友、直、諒、多聞の三者を友と爲すは益なり便辟、善柔、便佞の三者を友と爲すは損なりと曰はれ佛敎に於ても因果經に朋友に三の要法あり一には過失あるを見れば輒ち曉し諫む二には好事あるを見れば深く隨喜の心を生ず三には苦厄の難に在るを見れば救助して相棄てざると是なり瓊克拉的は世人は田畑衣服飲食を擇ふことを注意すれと朋友を擇ふことに注意せず人の喜怒哀樂は皆朋友より起るものなれば最も朋友を擇ふに注意すへきとなりと云へり耶蘇教に於ても人を議する勿れ恐くは爾曹も亦議せられん爾曹か人を議する如く己も議せらるへしと又朋友の間に在て謙遜の者は人に敬せられ傲慢なる者は人に蔑せらる故に汝等宴席に招かるも首座に坐す勿れとありマホメットは弟子セードかダブークの戰に於て戰死したる時は是れ神命を全ふして其宜しきを得今や神に近きたれば遺憾なしと云へり然れどもセードの女か其遺骸を葬る時マホメットは其遺骸を撫して涕泣せり女怪み之を問へば友其友を吊するなりと云へり又回教の十二戒の第九に契約を守れ第十二に傲慢に地上を歩まされとあるは朋友に交る道を示したるものなり

會澤安曰く思兼、手力雄、兒屋、太玉、建雷、猿田彦等の諸神心を同くして天神を輔翼し奉り友を以て仁を輔ければ朋友の信を申すなり

自主

神道は自主を尊ぶものにて記紀にも奴婢を除くの外は人民の總てを淨き公民又は大御寶と稱すどあり又大國主尊は民に生活と衛生との法を授け自治自愛の道を示せり釋迦も己は主にして万物は皆客なれば万法は唯我心識の變相なりと説きたり老子は人を知る者は智なり自から知る者は明なり人に



勝つ者は力あり自から勝つ者は強なりと曰はれ孔子は己に克ち禮に復れは天下仁に歸す又人の己を知らざるを患へず人を知らざるを患ふと曰はれ孟子は万物皆我に備はる又天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ひ志を得れば民と之に因り志を得されは獨り其道を行ひ富貴も淫せず貧賤も移さず威武も屈せざるを大丈夫と謂ふと曰はれ王陽明は山中の賊を破るは易し心中の賊を破るは難しと曰はれたり瑣克拉的是世人皆無知に甘んず余も亦無知たることを免れざるも余の世人と異なるは自から其無知なるを知り眞の知識を得んと務むるに在りと回教のコーラン第二章に妄りに自己の身体を害せざる様なれ良心に反して不正を爲し他の物を貪る勿れと耶蘇は當時の人か自國のみ貴ひて他國の人を禽獸の如く思ひたるゆる人類は皆神の子にして同等なる事と人の生命は貴重すべき事とを示したり

西村茂樹曰く吾儕人類は天地の間に生れて常に天地の管理を受く其生死吉凶禍福人智を以て之を料る能はずと雖も蓋し皆天命の前定せる所ならん故に西人の所謂自由(自由の字は英語のリバーチイを譯したるものなり或は譯して自主と爲す者なり自由と大に異なり余は自主の字を用ひんと欲す)なる能はず人類の生果して此の如き者なりとするときは吾儕此世に在りて何事をか爲すべき惟天賜の良心に従ひ仁を行ひ義を履み己を正しくし人を助け自ら省て疚しきことなく俯仰天地に愧ぢずして始めて人たるの道を全くしたりと云ふことを得べし彼天命を知らず己か小智を恃み私慾を逞くし奸詐を行ひ人を倒して自ら利せんとし常に役々として此世を没する者の如きは國家人民を害すること甚たしく眞に天の僇民と稱すべき者なり

### 立志

大國主尊は万民に幸福を與へんとの大願を發し玉ひ他の妬み妨げを或は忍ひ或は排して遂に其教と業とを後世に傳へたり釋迦も諸比丘に向ひ汝等若し勤めて精進せば事の難きものなし譬へは小水か

常に流れて止まされは遂に石を穿つか如しと説かれ佛者の心を一處に制すれば事として辨せざるは無しと曰はれたるは儒道の精神一到何事か成らざらんと一對の確言なり孔子か仁遠からんや我れ仁を欲すれば斯に仁至ると曰はれ孟子か文王を待て而る後に興る者は凡民なり若し夫れ豪傑の士は文王なしと雖も猶興ると曰はれ又能はざるに非ず爲さるなりと曰はれたるも立志の意なり又佛教に於ては懈怠の失を説き懈怠は衆行の累にして在家の人懈怠なれば衣食供はらす産業擧らす出家の人懈怠なれば迷の苦を出つると能はず悟の道を得ると能はずとあり回教の十二戒にも第十一に汝等安固を得ざるも失望する勿れとあり

中村正直曰く日本人の忠孝に對す立志と忍耐は決して西洋人に劣らない試に敵討の本を見よスマイルズの自助論にも無き程の苦心をしたる者か幾干もある今日此敵討をする程の忍耐を他の方に用ひたなら忽ち歐米に勝る國と爲る

### 忍耐

大國主尊は仁徳を有し万民に尊敬せられし爲め其兄弟の妬を受け屢々危険に遇ひしとありしも能く之を忍び千障万難に勝得て遂に國君の位に登り給ふ耶蘇の弟ヤコブユダは性苛酷にして無慈悲なれば耶蘇と共にナザレに住居する時も親密ならず故に耶蘇は孤立すれと遂に大業を成し得たり處葬も其弟象の爲め屢々危険に遇ひしも能く之を忍びたるは何れも尊に似たる所あり孔子は小忍ひされはは大謀を乱すと曰はれ瑣克拉的是雅典市を徘徊する時惡戯者あり棍棒を以て瑣の背を撲つ瑣は之を省みず傍人瑣を詰り何ぞ其返報を爲さざるやと瑣靜に答ひ驢馬汝を蹴る汝驢馬に怒るかと云へり老子か柔剛に勝ち弱強に勝つと曰はれたるも忍耐の意を含めり釋迦は忍の徳たるは持戒難行も及ぶ能はず能く忍を行ふ者を名けて有力の大人と爲すと説かれ耶蘇教に於ても新約全書に忍耐は練達を生し練達は希望を生し希望は羞を來らせざるを知るとあり回教のコーラン第十章に忍耐ある人には榮ゆ



る子孫わらんとあり孟子は天の將に大任を是人に降さんとするや必先つ其心志を苦ましめ其筋骨を勞し其體膚を餓し其身を空乏にすと曰はれたり

岡本監輔曰く素尊逐はれて艱苦し横暴を化して聖敬に歸す後來大國主の國土を經營する亦辛苦を以て之を致す素尊の遺訓に由るなり艱難辛苦の事は其れ備に嘗めざる可けん哉大國主神備に艱難を嘗め地を拓き亂を撥し以て國土を經營し傍ら衛生療病等の法に及び天下後世の慮を爲す是れ一身にして三皇を兼ねたる者なり其大名持八千矛等諸般の號有るも亦怪むに足らざるなり

### 知足

大國主尊の分を守るとは前項に記せしか分を守るは即ち知足なり釋迦か諸比丘に向ひ多欲の人は多く利を求むる故苦惱も亦多し少欲の人は求むると少き故此患なし汝等諸の苦惱を脱せんとせば常に知足を知るへし知足は則富樂安穩の所なりと説かれたれば其門人獅子吼か少欲と知足とは何れの差別あるやと問ひたるに少欲は求めず取らず知足は少きを得て悔恨まざるなりと對へられたり瑣克拉的か尤も慾望の少きは最も神の道に近きものなりと云ひ又知足は富なりと曰はれ千古の名言と稱せられたるか老子も道德經に知足は富なりと記せり孔子は不義にして富且貴は我に於て浮雲の如しと曰はれ孟子は心を養ふは欲を寡くするより善きは無し欲寡ければ存せざる者あると雖も寡し欲多ければ存する者あると雖も寡しと曰はれ耶蘇は衆人に向ひ戒心して貪心を慎め人の生命は貯蓄の饒に因るものにあらずと曰はれたり

西村茂樹曰く支那の教(殊に老子の教)は知足を貴ぶ洋學者之を賤しみ謂へらく支那の國勢の振はざるは知足の教之を爲すと余謂へらく知足決して不可に非す今日も宜しく守るべきの訓戒なり唯世人知足の義を誤解する者多し今之を辨せん凡そ知足は己か私欲殊に体欲(飲食男女の類)に就て之を言ふなり飲食の如き女色の如き快樂安逸の如きは尤も知足の戒を守らざるへからず(富貴

にも知足を守るべきとあり是は論旨錯綜せるを以て爰に言はす)學者が學問を研究し實業家が國を富すか如きは彌か上にも其廣大増加を求むべし知足は此の如き場合に用ふべき者に非ず學者が學問を中廢し實業家が事業を中廢するか如きは之を安小成と云ふへし安小成と知足との戒は並ひ行はれて相恃らざる者なり

### 教化

大國主尊は既に一家の和合を得又万民幸福の基を開かんと欲し諸國を周遊して庶民を教化するを以て樂と爲すもの如し古史に尊は大和高志筑紫稻羽伯伎等に赴きたることを載す是等は何れも教化の爲めに赴きたるものなり高志は今の加賀、能登、越中、越後、越前にして筑紫は筑前、筑後、稻羽は因幡、伯伎は伯耆なり釋迦も迦毘羅國淨飯王の太子なれば其國王の位に即へきに二十九歳の時太子の位を棄て雪山に入り阿羅邏迦蘭の兩仙に事へ難行苦行せると六年に及びたれど更に心に得る所なかりければ摩迦陀國に適き菩提林中に默坐すると數年遂に大悟して阿耨多羅三藐三菩提を得て華嚴(大方廣佛華嚴經)の大乗を説くも此法難解難入を以て更に方便を設け阿含(長阿含中阿含雜阿含等)の小乗を説くこと十二年此小乗の教か漸く世に弘まり大乘の説くへき機の來る見て方等(大集經淨名經金光明經阿彌陀經大日經等)を説くと八年般若(摩訶般若光般若金剛般若)を説くと二十年法華(妙法蓮華經)を説くと又八年にして其臨終に及び滅も滅に非ず生も生に非ざる眞理を説くと一日一夜之を涅槃(涅槃經)と謂ふ其衆生を濟度すると謂ふは即ち万民を教化するものなり瑣克拉的も眞神を信し希臘の古俗に反するを以て罪を得たる時司瑣に向ひ汝か罪を許さば能く汝か教を止めんや否やと問ふ瑣答て曰く大將の命を受けて戰に臨むや死生を顧みず余は神命を受くる者なり豈に死生を顧みる者ならんや余は一日命あらは一日神命を奉して汝等が眠を覺さるへからずと云へり耶蘇もカリヤに傳道する時其門人中より十二人を拔萃して使徒と爲したるか彼等は元粗野下賤の貧民なれば耶蘇は非常の熱心と忍耐とを以て彼等を教化したり



後此十二使徒が各國に遊説し歐米諸國に於て今日耶蘇教の盛大なるは此十二使徒の力なり孔子も數十年間諸侯に遊説して安居するとなかりければ後世孔席煖ならずと謂ふ孔子は又書經を編輯し禮記を整理し詩經を蒐輯し音樂を改良し易經を註釋し春秋を筆削す世に儒道は宗教にあらすと曰ふ者あれと宗教の觀念のありしとは明なり故に天地万物を主宰する上帝の存在を認め居れり孟子は善政は善教の民を得るに如かず善政は民之を畏れ善教は民之を愛し善政は民の財を得善教は民の心を得ると曰へりマホメットも教を弘むる時メヂナの神殿に到り其神を指し偶像なり木片なりと云ひしかは神殿の監督コレインシの族之を聞き大に怒る是に於て其叔父アブダレフ過激の言を慎まんとを忠告すマホメットは之に答ふるに大陽我右に立ち大陰我左に立ち我に沈黙を命ずるもコレインシ全部の人間事物來りて之を禁するも上帝之を許し給はし我は眞理を述べざるへからすと云へり

因に記す佛教は婆羅門教より進化したるものなれば佛教を講ずるには婆羅門教を知らざるべからず婆羅門教には種類多くして佛教よりは凡て之を外道と稱し其外道の數を大日經には三十種とあり楞伽經には百八種とあり維摩經には六種とあり智度論には九十五種とあり涅槃論には二十種とあるも其本原は吠陀に歸す印度最古の宗教たる吠陀(吠陀とは智識の義)にては初めデイウスの一神を立てしか後にインドラ。アグニー。スルヤ。の三神を立てて之を造化の神となすも此内インドラ(空氣の神又は帝釋と稱す)を以て第一と爲す派もあればアグニー(火の神)を以て第一と爲しインドラもスルヤ(日の神)もアグニーの一部なりと爲す派もあり其後ブラフマ。シバ。ウイシニユー。の三神を立てて之を造化の神と爲すも是れ又ブラフマ(梵天)を創造の神シバを破壊の神ウイシニユーを保存の神と爲す派もあればシバ(自在天)を以て第一と爲し天地万物盡く自在天より成ると爲す派もあり又ウイシニユーを信して佛陀はウイシニユーの化現なりと爲す派もあるは佛教中眞言宗は大日と曰ひ淨土宗は彌陀と曰ふか如し歸する所は全知全能なる神を指すものなり婆羅門

教徒の左肩より右脚に三條の紐を掛くるは佛教徒の袈裟の如し珠數を用ひ朝夕祈禱を爲し(回數も珠數を用ひ祈禱を爲す)葷酒肉類を禁するは佛教と同じ婆羅門教は因果應報を説き又人を善道に導くに來世を説く其言に父母妻子親族も伴ふ能はざる他界に赴く時唯一の同伴者たるべき者は徳のみなれば日々己の職業を勤めて怠らす來世の同行と頼む可き友(徳を謂ふ)を得よ實を集むるも携ふると能すさわり此説は佛教の阿含經にある一夫か臨終の時第一の婦より第四の婦に至る迄同行を勧むるも第一の婦(身体)第二の婦(財寶)第三の婦(親族)は從はず吾意に適はざる第四の婦(意)のみは從ひ行く譬と同一なり婆羅門教も其蓋與に至ては高妙幽遠にして佛教と大差なきも迷信の多き所は大に佛教と異なれり又婆羅門教の一部に瑜迦と稱する一派あり冥想を凝して最高の實在者即ちブラフマと合せんとする法あり此法の修行は禪宗の座禪と畧々同じ獨逸の梵語學者ヴァルナルは印度の古文を翻譯し「婆多瑜迦の燈」と題し一千八百九十三年に刊行し其中に「瑜迦の眠」と稱し冥想を凝すは一種の催眠術なることを説明せり博士井上圓了か唐の太宗の時印度より來りたる僧が人を活殺すること自在なるも博奕に對しては行ふと能はざりし咒術も世の所謂不動の金縛と稱す秘術も催眠術の一種なりと説きたるを見れば印度にては古く催眠術の行はれし者なるへし」中村正直曰く古より聖人は天下の爲め一身を顧みず故に孔子は諸侯に遊説し席暖ならず釋氏は衆生を濟度する爲め王國の儲位を棄つ基督は身を殺して世を救ふ今此書を(管公の書を指す)讀むに大國主尊の國を天孫に譲るは身を布教と勸業治病等に委ねて以て万民を救濟せんか爲めなり然らば則尊は我神道の祖にして實に尊崇を爲さるべからざるなり

久米邦武曰く三諸神社は大己貴國作りの幸魂なり大己貴の出雲避地の時は其年もまた初考に及ばず猶有爲の盛りなれば顯見の事をやめて専ら幽事の布教に力を謁され因て馴化したる民族は衆多かるべし故を以て大國魂神社は全國に存し陸奥地方にまで及べり大國魂は建邦神なり蓋し其教化



に景向するもの大己貴を建邦神の化身と崇敬したるなり建邦神とは欽明帝の時に蘇我稻目が百濟王子惠に昔在大泊瀬天皇汝國爲高麗所迫命神祇伯受命於神祇祝者乃託神語報曰屈請建邦之神往救將亡之主必當國家盛靖人物又安原夫建邦神者天地剖判之代草木言語之時自天降來造立國家之神也云々といへり余の謂へる産靈神に相當す夫を釋紀には大己貴神也と解せり此の如く古代に大己貴の國民より崇敬されたとば實に非常なるものなり是も宗教の進路に於て必有の事にして怪むに足らず其故は在天の神は幽遠なり社會は眼前に顯はる威徳を視て渴仰の熱誠を鐘むるを常とす天主の崇敬を耶蘇に鐘め佛の信念を弘法親鸞日蓮に鐘むる等皆然り大己貴の國を作りて人望を集め己も以て神通と思ふ程なれば其教化に浴する者には目映程に尊かりしなるべしされは事代主の家聲益々識んるまゝに大國魂として崇拜益々隆んになり大己貴を以て天地を鎔造したる産靈神の化現と信したるなり

津田真道曰く余は儒教も亦宗教なりと斷言す蓋し儒者の所謂天は耶蘇の所謂神なり其故奈何となれば書經等の古書は單に天と言はすして皇天上帝又は畧して帝と云ひたるにて證すへし然るに周の時其所在を以て稱して單に天と云へり新舊約全書に神と云はすして唯天と稱したる所あるに同じ又天主或は天父と云へるも其義は則一なり而して儒者の所謂天道は神教者の所謂神道なり小崎弘道曰く從來の宗教類別法は眞正の宗教と虚偽の宗教若しくは神の與へたる宗教と惡魔の造りたる宗教との二つにてありき而して基督教以外の宗教に一の眞理なしと爲すのみならず一の執るべき所なしとなせり然るに近來諸宗教の研究漸く盛なるによりて基督教と他の宗教との區別は必ずしも眞偽正邪の正反對なるに非ず何れの宗教にも多少の眞理を含まざるなく又多少執るべき所なきにあらざると明になれり一千八百九十三年に於てシカゴの大博覽會と共に萬國宗教大會を開きたるか如き到底前世紀に於て見ることを得ざる新現象にして基督教と他の宗教の關係に於け

る思想に大變動ありたるを示すものとすへし神の默示は只ユダヤ教基督教のみにあるに非ず他の教にも多少あらざるはなく他の教も必ずしも基督教の敵に非ざるを知る此の如く其思想の廣くして包容的になりたる結果基督教それ自身に對する思想の上にも亦多少の變化なしと爲すべからず吾人は此思想變遷の中流に立てる者なり吾人が我國に基督教を輸入せんとするに當り其眞理の實核のみを取て總て其糟粕を排除し去らんと欲するは自然の思想と爲さるべからず前田慈雲曰く過去現在因果經には阿羅邏の說を記して左の如く云へり「阿羅邏伽蘭告太子曰衆生之始始於冥初從冥初起於我慢從我慢生於痴心從痴心生於染愛從染愛生於五微塵氣從五微塵氣生於五大從五大生於貪瞋等煩惱乃至入非想非非想處此爲究竟解脫云々」俱舍稽古には阿羅邏の所說此の如くなれば蓋し兩衆即ち數論外道の徒ならんと云へり然るに數論は眞性と神我との二元を立てるものなるに阿羅邏は右經說に依て見れば眞初と神我とを對立的二元として説かずして只冥初の一元のみ説くもの、如くなれば純然たる數論の徒に非ずして數論に據て別に一元を構成したる哲學者たるもの、如し鬼に角阿羅邏は佛教大乘的思想を有したる哲學者にして太子は之に就て其說を聞かれたるには相違なきなり又曰く佛已前に在て印度思想界の發達か既に繁華の盛觀を呈し居たることは異論なき所なり中に就て最も高妙幽遠なる理致を含むるものを勝論數論及大自在天外道の教理とす而して勝論は六句義即ち極微と隱力とを以て万有を説明する者にして心物多元論なれば稍々佛教小乘中の有部の教義に近けれども他の數論及大自在天外道の所立に至ては頗る佛教大乘教理に類したるものなしとせず

### 教と政

大國主尊は既に國土を奉還し報して曰く吾か治むる所の顯露の事は皇孫當に治むべし吾は將に退て